ヘイローナイツ

漬けまぐろ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近メイン作品の筆（手）が進まないので息抜きに作った物、ぶっちゃけシージコラボで「火薬銃器イケるな・・・せや！」と思ったから書いた物。

※ＵＮＳＣ海軍旗艦インフィニティはコルタナから逃げるためにランダムジャンプを使用、ランダムジャンプとは転移先の座標を特定されないように太陽系内の何処かにランダムでスリップアウトする云わば緊急スリップスペースであり其を使用した後な

ので実質ＨＡＬＯ５の直後になります。
※現時点で投稿者のレベルは６０になったばかりのペーペードクターなのでストーリーをしっかり把握できてるかなんとも云えない現状。そしてスカルシュレッダー（偽）をヒーコラ言いながら粉砕したばかりということ。はじめての２昇進はガヴィル姉さんだ。
※恐らくＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱ部隊はサルカズやヴィーヴルを上回る膂力とタフネス、アーマーのスラスターを併用した走り出し２歩目で７０ｋｍ／ｈ、３歩目で１００ｋｍ／ｈに迫るクランタばりの機動力、サンクタより優れた銃器技術と射撃技能、第６感によるコータスに匹敵する警戒心など皆無に等しいアーツ適正以外各種技能も卓越てんこ盛りの明らかなチート軍団となってしまう事、しかしながらそれらはＨＡＬＯの公式設定での戦闘能力。アークナイツの世界にはちと過剰過ぎるかもね・・・
以上を踏まえ容認できねェぞ!というドクターには閲覧をオススメできませんので悪しからず…
２０２３／７／１８　プロファイルの更新、ミスで筆記中のデータが飛んだ為モチベ維持の為に既に在るものを編集するお茶濁し・・・

目次

明日輪光 1
足音 5
地球とテラ 23
巨星始動 46
方舟 69
プロファイル 96
艦長 来訪 131
例のブツ 160
回想 チェルノボーグ事変 186
龍門 212
龍門上陸 242
迷い（スラム）の森（街）へ 263

― 明日輪光 ―

―ＵＮＳＣ　下士官のログ―

異星人を信じた事はあるか？

いや、コヴナントみたいな・・・そもそも人間とは姿形が違う種の生命体の事じゃない

我々人類とはまた違うルーツを持つ独自の人類の事を言いたいんだ、中々難しいな・・・ 生物学の座学をもっと真面目に受けておくべきだったか・・・

こう・・・指があって、足がある、髪の毛も生えてるような人類に限りなく近しい存在、我々人類は元々《地球》で生まれた種族だ。

今私が言いたい異星人とは地球とはまた別の星で生まれた謂わば《ＵＮＳＣの植民地惑星》の登録に無い星の元築かれてきた人類ということ。

私の同期に日本人の下士官がいるんだが日本では《トラックに轢かれて死ぬと異なる

世界に送り込まれて神様に力を与えられ英雄の如く戦った後に男なら美女に囲まれ、女なら美男子に囲まれる生活を送る》らしい。

なんとも滑稽で幼稚な話だ、誰かの為に大義を果たした訳でもない、況してや善行を重ねてきた訳でもなく都合よく神の手違いで死に至り詫びとして生き帰ったとしてもその死そのものは運命だ、果物の皮で転んで死んでもサウナの中でいつの間にか死んでもそれが運命だと私はそう思う、この科学技術が発達した世の中で高層ビルの一室から白馬の王子様を待つようなものだ、まだホームレスの元に高級スポーツカーに乗った億万長者が突然現れて迎に来たとか言い出す方が現実味がある。

その同期の日本人も「あくまでもこれはフィクションの話だよ、《指輪物語》みたいな――ね。死んだら終わり、そんな与太話は信じてないよ」と言っている、だが数百年前の日本では実際に若者の飛び出し事故で話題になったのはジュニアスクール時代に歴史の教科書に書かれていたのを覚えている、何故覚えているのかだって?余りにも馬鹿馬鹿しいからだ。

話を少し戻そう、仮に死後の世界が存在するかなんて分かりっこない

小説やフィクションでは死の間際に《他界した家族がいた》ともあれば《綺麗な花畑》なんてのもある。マッチ売りの少女にもあっただろう、死の直前に幻覚が見える所謂《走馬灯》というやつだ。

科学技術が大きく進歩した現在では多くの人々が文字通り死の縁から生還するケースは稀にある、大半は最前線で負傷した兵士だが・・・いざ臨死体験を思い返してもらうと――

《暗闇・・・無意識の睡魔に襲われて・・・》

《プラズマ弾が当たって、視界が回転したんだ、それで・・・気が付いたら今目が覚めた》

《ブルートのスパイカーが身体に刺さった瞬間の焼けるような熱で意識を失った。今さっきのように覚えてる・・・え?あれから一週間も経ったのか?!》

結局のところその走馬灯とやらは有りもしない出任せだったらしい、私もコヴナント大戦時はあるフリゲート艦のオペレーターとしてブリッジに居たことがある、コヴナント艦からのプラズマキャノンがブリッジの真下に直撃し、私は死を覚悟した・・・だが艦は運良く大爆発を免れ主砲と陸戦部隊の降下ポッドが用意された区画が千切れるだけで済んだのだ、背中には夥しい量の脂汗と冷や汗が混ざった嫌な感触は今も鮮明に覚えている、しかしながら走馬灯なんて見た覚えなぞ一切ない、ただただ気味の悪さと運の良さが混同した現実を浮いた奥歯で噛み締めていたんだ。

余談ではあるがイスラム圏ではアッラーの信仰があるのか死後の世界を信じている者は多い、サンヘイリ族は逆に死後の世界は誰一人として存在は愚か微塵にも捉えていないんだ、結局何を信じるかなんて人それぞれだ。

ここから本題に戻る

我々人類が目の当たりにしているのは死後の世界なのか、はたまた地獄の一丁目なのかはわからない、だがこれだけは言える

異星人は――確かに存在したのだ。

―　下士官のログ　―

ｃｏｒｄ：６５７２３１１９２Ｆ６４ＤＮ８８１６ＩＮＦ１０１＃＃

このログは機密事項漏洩対象として凍結処置・・・Ｉ

— 足音 —

「This is UNSC Infinity. Due to an engine failure, we are currently descending to an unknown planet. All UNSC ships in the vicinity, please respond. Repeat, all UNSC ships in the vicinity please respond...」

「Это СБ ООН. Бесконечность.」

Из-за отказа двигателя мы сейчас спускаемся на неизвестную планету.

Всем кораблям СБ ООН, находящимся поблизости, просьба ответить.
Повторяю, все корабли СБ ООН поблизости, пожалуйста, ответьте…」

「This is UNSC Infinity.
Due to engine failure, we are currently descending to an unknown planet.
All UNSC ships in the vicinity please respond.
Repeat, all UNSC ships in the vicinity please respond…」

「こちらはUNSCインフィニティ
機関停止により現在不明の惑星に降下中、付近のUNSC艦は応答願う。
繰り返す、付近のUNSC艦は応答願う…」

「?･是?･合国安全理事会的无限
由于引擎故障，我?･目前正在下降到一个未知的星球
附近的所有ＵＮＳＣ?･艇?･回答
重⊠，所有在附近的ＵＮＳＣ船只?･回?･･･」

「艦長ダメです！国連宇宙海軍加盟国の公用語を試してますがウンともスンとも言いません！」

ＵＮＳＣインフィニティの各所でけたたましく警報が鳴り響いている
幾度も救難信号を繰り返すインフィニティの光域通信は太陽系を横断してもなお僅か数秒のタイムラグで通信を可能にする人類の数少ない架け橋となっていた
それだけの物を使用してもスリップアウトしてから十数分に渡る通信士達の熾烈な格闘戦をＵＮＳＣインフィニティ２代目艦長《トーマス・ラスキー大佐》も只ブリッジでこまねいている訳でもない

「他の公用語も全て試すんだ!ローランド、凍結(コールドスリープ)中の防衛戦・隠密行動・遭遇戦に特化したファイアチームとデッキクルーを全て叩き起こせ!」

「かしこまりました艦長」

ラスキーの言葉に反応したローランドはＵＮＳＣインフィニティの艦載ＡＩと呼ばれる高度な技術を使用したスマートＡＩの一つである、サインに署名した隊員の中から比較的脳部に損傷が少ない戦死者の脳細胞を使用し製造される〝それ?はＵＮＳＣの戦闘艦に搭載され非常に優れた戦略戦を可能にしている

ローランドは第二次世界大戦時、大日本帝国と対峙していた際のアメリカ軍パイロットを模した姿をしているが中には薄着のエンジニア風の女性であったり刀を携えた鎧武者の姿をしたＡＩもいる、これらは各ＡＩが〝自我?を成形した際に過去の資料から思い思いの姿を取り込み再現しており、ＡＩなりに個性を見出している為だ思考はＡＩらしく論理的かつ合理的にはなるが口数の大小や仕草といった生前の癖すらも持ち合わせており過去にはサーカスに登場するピエロの姿をした結果多くの乗組員がピエロ恐怖症で配属艦転換申請で溢れた事もある

７年というスマートＡＩの耐久年数を更に引き延ばすためにホログラフィック投影

の解像度を大幅に引き下げ幾何学的な形状に姿を造るＡＩもいたほどであった

「所で艦長？あの惑星を粗方スキャンしたところどうやら〝人類？に近しい有機生命体が確認されました、折角ですから第二の異種間交流でも如何でしょう？」

「今はそれどころじゃない！後にしろ！」

ラスキーが慌ただしくクルーに指令を飛ばす中、ローランドはどこか飄々とした口振りでラスキーに語りかける

ＡＩにとって搭載された艦は一心同体でありローランドが余裕を持っているのも最新の装甲技術とシステムに守られた非常に強固な船体だと深く理解し、当分は全動力機関の復帰も数時間は絶望的だと理解しているからであった、逆をいえば数時間あればインフィニティは再度反重力機関を再稼働させ従来通り船体を浮かし衛星軌道に乗るも可能だということであった

「寧ろ今は機関の復旧よりもあの惑星の何処に墜落し現地の生命体にどれだけの影響を良くも悪くも与えるかを考えた方が良いと思うんですがね」

ローランドは両手を背中に回し《休め》の体制を取ると誰にも聞こえないような小声でため息混じりにそう呟く

既にローランドは墜落するであろうポイントを大方絞り込んでいた、幸いにも有機生命体が居ない場所に進路を取っていることは確認済みであったのだ

たしかその場所は雪を大量に背負った山腹の合間、衝撃で多少の誤差は生じるであろうがそこから４０２ｋｍ程西南南に近い航路で引き摺られて北国の近場に位置する山の麓で完全に停止する算段を立てるとローランドはもっとも近い大きな街に意識を強く向け一人で黙々と解析を開始した

「さて、落ち着くまで暇潰しをさせてもらおうか。言語スキャン開始･･･《ウルサス帝国》･･･《チェルノボーグ》･･･《移動都市》･･･ 成る程、ロシア語に似てるな･･･ん?･･･《鉱石病》《不治の病》《ロドス》･･････《天災》･･･ 天災?これは･･･一体･･･?」

特に気になった《天災》と呼ばれるワードを申し訳ながらチェルノボーグのネットワークにいとも簡単に侵入し検索にかけながら更に解析を進めるとローランドは艦の一部が奇跡的に復帰した事に気が付く、１０万年前の〝フォアランナー(旧人類)?〟が人工惑星に残した出力機関とエンジンは未だに謎が多くこのエンジンをインフィニティに取り付

けた《キャサリン・ハルゼイ博士》本人すら把握しきれていない事もありインフィニティではこういった突発的なトラブルや奇跡的な回復は珍しいことではなかった

「艦長！なんとか操舵システムは復帰しました！エンジンは今しばらくかかりそうですが！」

「でかしたクルー諸君！ローランド！大気圏に突入するよりも前に出来る限りのストライデント級を発艦させろ！何としてでも間に合わせるんだ！」

「問題ありません艦長、取り舵少々艦首2。引き上げ、フリゲートハッチオープン、誤差修正とコース確認ストライデント１０隻発艦・・・これで完全に停止しても麓の有機生命体からは見えない山の死角に艦を下ろせます、もちろん可能な限り船体に負荷が無いように尚且つ船体の傾きも水平に近くなるようにしました、人工重力システムをオフラインにすれば電気も節約できる上にストライデント各艦も発艦済み、これで当面の自衛力とライフラインは確保できるでしょう」

ラスキーの問いにローランドはさも当然のように振る舞った

墜落するのは全く変わらぬ事であったがこの惑星の生命体に対して全長５．７ｋｍの巨大な宇宙戦艦で吶喊する様を第一印象として刷り込むのはあまり良い策とは言え

ないだろう

後々此方をさらけ出していくならば情報を小出しにして現地住民の理解と信頼を得てからにした方が良いのは当然であり他に問題があるとすればこの惑星の住民達の〝現状の科学レベル?〟が如何程(いかほど)であるかも結局判明していない事だ

この惑星の住民達がＳＦ映画などの《未だに手にしたことがない夢の技術を盛り込んだフィクション作品》が存在し、《エイリアン》や《宇宙戦争》に近い映画や娯楽小説等が存在すれば最悪我々人類は考え得る最悪な状況で彼等から見れば星を征服しに来た宇宙人扱いされかねない、《第９地区》のような難民エイリアンとして捉えてもらえればまだ良い話だろう

最悪の場合は帰還を最優先にするためにこの惑星の生命体に略奪戦争を仕掛け掌握後植民地惑星としてＵＮＳＣに登録されることにもなる、インフィニティが抱えるストライデント級重フリゲート艦を１０隻全て大気圏突入前に発艦させる事に成功し半数は直ぐにこの惑星の衛星軌道に進路を取らせ待機させる事を艦長に進言しておこうと考える、そうすれば有事の際には衛星軌道から６００トンの超密度投射体を光速の４０％の速度で地表に降り注がせる事もできる――とローランドはイリジゥムニューロの片隅に留めておくことにした

「よしいいぞローランド、峠を越えたとは言い難い、皆まだ気を引き締めておいてくれ。マイルズ通信士、パーマー中佐に優秀なファイアチームを一つ集めるよう伝えておけ・・・偵察部隊として送り込む、武装はＭ６Ｈ２ハンドガン（５０口径マグナム）のみ持たせろ、外套になるようなシートをアーマーの上から羽織らせインフィニティが接地後完全に停止した後にペリカン輸送機に搭乗し街付近で降機、任務に当たらせろ」

「了解しました艦長！」

「ジェンキンス通信士、救難信号は継続して発信しろ。周囲の電波信号を探り該当しない秘匿通信を５秒間隔で各国語をループ発信だ」

「サー！艦長！」

ラスキーは謎の惑星の大気圏に近づくに連れ断熱圧縮と摩擦熱に包まれてゆくインフィニティの中で、どうか無事に脱出できるようにと首にぶら下げた角の取れた鉱物の欠片のネックレスを指先で触れた後強く握り締めた

「ドクター・・・ドクター、大丈夫ですか?」

ウサギ耳の少女が抉られ、破壊された道路や建築物の粉塵を吸い込まないようにしながら落ち着いたトーンで心配そうに語りかけていた、彼らはウルサス帝国のとある施設の一つから命からがら脱出したばかりだ

「あぁ・・・あぁ、大丈夫・・・」

「レユニオンの部隊が近づいている、何か手はあるか?」

「・・・囲まれるのは時間の問題だ、一点突破しかあるまい。だがこれは数人が文字通り決死の囮とならねばならん」
「だめですＡｃｅさん！きっと策はあるはずです！みんなで生き残り脱出する方法を探しましょう！」
「いいや、もう時間は残されていない、俺が囮になる・・・アーミヤ、ドクターと皆を頼んだ。二アールはドクターを守れ」
「しかし・・・」
「お前はここで失うには惜しい人材だ、俺は俺が出来ることをやらせてもらう」

覚醒したばかりの意識のせいかおぼつかない足取りで両膝を地に落とし項垂れるマスクと頭をすっぽり隠してしまうフードを被ったコートの人物
それを中心に遍路のようなゆっくりとしたテンポで進んでゆく
黒地に青のアクセントが入ったジャケットを羽織った１５人程の一団の周囲に僅かながら気配を感じる、間違いなく狙撃手がいるが淀みを感じることは無かった事からこの一団の者である可能性である可能性は十二分に考えられる
５００ｍ先だろうと狙撃手がいれば必ず周囲にはベタつく汗のような殺気（空気）と臭いが

蔓延(はびこ)り、戦場に常に身を置く者である四人組は優れた空間認識能力と第6感(シックスセンス)をフルに使いその空気を容易く汲み取ることができる

あの一団の周囲にはその嫌な臭いはしなかった、それこそ1km先からの狙撃ともなれば臭いは最早(もはや)嗅ぎ別けることはできずとも戦場で養われた感覚は今まで絶対的な勝利を提供してきた

先に撃たなかった方が悪い、気が付かなかった方が悪い、先に死んだ方が悪い、測量計算と風速とコリオリ力の影響と弾速を配慮できない方が悪い、身動きを悟られるのが悪い、それが狙撃の真髄だ。そうだ、その通りだ、それ以外何が罷(まか)り通るのか

そのお陰でまた一体、一団の後方から忍び寄っていたレユニオンと思わしき狙撃手の頭部を榴弾で木っ端微塵に吹き飛ばし糸が切れた操り人形のように残された身体はだらしなく地に伏せた

スコープ越しからでも上半身が焼けた臭いが漂うような趣味の悪い現代アートが新たに出来上がる

「・・・呑気なものね、民間人に毛が生えた程度のトーシロー(素人)だというのに少ない弱者に大勢で力を振りかざして《自分は強いんだ》なんて思い込む・・・質の悪いテロリストが幾らでも湧いて出るハズだわ、あまりにも哀れね」

そして再度引き金を引き絞るとバレルから弾頭が弾き出される
テロリストというのは大半が《反旗を翻る自身に酔いしれる》個人の意志が弱い者が陥(おちい)り、扇動され、同じ考えを持つ者同士が同調し傷を嘗め合うのと同義だ
弾頭は白い尾を靡(なびか)せ直進する
どのような理想を掲げたところで弱者の血を流せば、それは途端に《悪》へと変貌(へんぼう)する、さぞや気持ち良いだろう耐えに耐えた圧制から解放されるのは、内なる化物(自身)を解放するのは
弾頭内に納められた高性能炸薬が目標に命中し信管が点火され弾ける
それこそがテロリストの主導者の思惑、一度足を踏み入れれば抜け出せない、抜けたくないと思わせる夢の心地、麻薬の一種
故に我々はそれの邪悪な芽を早急に摘み取るのだ

ギシュウウウン…

「！」

「どうかしましたか？アーミヤさん」

隣にいた槍を構えた青髪と馬耳の女性オペレーターが先とは様子が違うアーミヤを見て心配そうに声をかけた、嫌に警戒するウサギ耳の少女の様子を見て槍の女性も周囲を見渡す

「《フェン》さん・・・聞こえましたか？確かに今何処かから発砲音が・・・」

「・・・いいえ、私は何も・・・発砲音は此処彼処（そこかしこ）から鳴り響いていますが、それとは違うのですか？」

「はい、そう・・・ですか・・・」

「？　室内戦の後にいきなり外に出てドクターの体調が気になるのは私も同じです、さぁ急ぎましょう」

アーミヤはその何処でも鳴り響いているハズの銃撃音を杞憂（きゆう）だと思うことにした、何故か耳の中に漂う違和感を覚えながら――

「・・・あら？あの耳の子、何か感付いたみたいね、良い耳してるじゃない」

側面に牙を剥いた狼のシルエットがペイントが施された狙撃銃の空になったマガジンを銃本体から取り外し新しい物を装填、チャージングレバーをスライドさせ初弾をチャンバーへ送り込む、辺りには12個の空薬莢と3つの空になった弾倉が転がっていた

銃を扱うロドス加入者も居るであろう、サンクタと呼ばれる種は発掘された銃器をレストアし、生涯の相棒として扱うと調査を進める内に風の噂で聞いた程度であるがその中でサンクタが使用するような銃火器とフルフェイスの不気味な装甲服を纏った人物が使用する銃火器には決定的な違いがある、それは方や底部に《Ｍｉｓｒｉａｈ　Ａｒｍｏｒｙ》と刻まれた火薬式の実包と《エッチング弾》というこの惑星で一般的に出回る非常に高価なアーツを複合した弾だ、ＵＮＳＣ製の一般的な狙撃銃に使用される弾丸も一つあたりの値段で１００枚の焼きたてパンケーキを食べれる程の値段だがＵＮＳＣで正式採用されている拳銃、Ｍ６Ｈ２マグナムピストルの弾薬とエッチング弾を比較すればエッチング弾はさらに高価な品だ

見た目ではエッチング弾は９ｍｍパラベラム弾に近い形状をしている、ＵＮＳＣ製狙撃銃の弾丸は実に１４．５×１１４ｍｍと一際大きく薬莢と弾頭合わせた長さは約１６ｃｍ、分かりやすくいえば日本人なら誰もが知る１万円札の横幅とほぼ同じサイズである

ＵＮＳＣではこの１４．５×１１４ｍｍＡＰＦＳＤＳ弾を狙撃銃の弾薬として採用している、貫徹力を得る為に弾頭は細く、まるで戦車砲弾のＡＰＦＳＤＳ弾を小型化したような物が主流であるがＳＲＳ―９９　Ｓ５　ＡＭの派生型として存在するこの《ノルンファング》はアーガス（守り手）が２つ名の人類史上最強のエーススナイパーの為だけに名匠によって産み出され専用の徹甲榴弾を装填できる、ガンスミスが一発ずつ丁寧に仕上げ《死と破壊の化身》はアーガスの名を更に世に知らしめた

この特注狙撃銃は全長１６１．３ｃｍ・重量１５．６ｋｇ・フル装填された４発マガジンに至っては４．５ｋｇと非常に重い、ＵＮＳＣで扱う歩兵用火器としては大型火器にカテゴライズされる

「首尾はどう？０５８」

「異常無し――と言いたいけど《一団》を取り囲むようにレユニオンの部隊が徐々に包囲しつつあるわ、１０４は？」

「俺の用は済んだ、今建物の屋上を乗り継いで向かってる」

「了解、そしたら後は《１１７》ね」

「あー、悪いが１１７とは連絡が取れない、《霧》が濃すぎるせいだろうな・・・レーダーでは確かにこちらに向かって来ているから問題ないだろうさ」

形状が異なる装甲服を纏った三人が無線通信を行っているが周囲にはチリチリとした霧のようなモヤが視界を制限させている

こちらに向かっている一人も含めこの四人は半月少し前にこの惑星テラのウルサス領に突如放り出されてから各組織の調査を進めており事が上手く運べば同盟、利害が一致すれば協力、こちらの意図に反し敵対行動を見せれば掃滅対象と見なし四人は行動していた

そもそも四人はウルサス領というお世辞にも良いとはいえない環境と余所者への排他的な思考もあり四人は寧ろ身を隠す一時的な前哨基地とするにはうってつけだと考えた、地理に詳しい案内人が居れば雇い入れることも考えたのだが如何せんこのウルサスには《信頼できる存在》がいないという事も合わさり矢鱈(やたら)めったら彷徨(うろつ)くのもは避ける方針に固めた

しかしながら《見たこともない高価な装備に身を包んだ四人組》の情報は裏事情が多いウルサスのアンダーグラウンドで瞬く間に広がり、そんな四人組を付け狙う無法者は決して少なくない、それらを容赦無く叩き潰しては武装の鹵獲と口封じを繰り返した結果ウルサスの裏で四人組は畏怖の象徴として《悪魔》と呼ばれ、それらに虐げられてきたウルサスの者や一部市民のからは無法者を排除して回る《影の英雄》と祀られた

それから程なくして一向に現在友好的といえる組織や勢力は皆無といってと差し支

えない現状は１０日程続き現在に至る

「一団に動き有り、追跡する」
「了解、私も移動して射線を確保する」
「一団の座標まで３０秒、進行先にレユニオンの部隊が見える・・・０５８、合流前には間に合わんぞ」
「わかった、先に出るから援護して１０４」
「あいよ、一丁やるか」

地獄へ、降下準備を――

― 地球とテラ ―

「総員配置に付け！重装班3名は前衛・先陣班と共同して奴らの進路を塞ぎエリア掃討後3名はそのまま壁になれ！補助班は重装班のサポートを怠るな！残りの重装員は後衛部隊の援護！医療班は特殊・狙撃班の先導の元各オペレーターの治療！術師は遮蔽物に身を隠しながら各個撃破！危険を察知したら自身の安全を優先しろ！攻撃位置を放棄しても構わん！」

紺色の戦闘服に身を包んだサングラスの重装オペレーターが未だ体調が整わないドクターに代わり指揮を執る、しかしこのＡｃｅという人物は指揮が本来は重装オペレーターである、もちろん本人もそれを自覚し一刻も早くドクターの復調を待つしかなかった

「Ａｃｅ！私にも指示をくれ！」

「駄目だ二アール、お前はダメージを貰いすぎている、ドクターとアーミヤの傍に居ろといったハズだ！アーミヤ、この我が儘騎士を頼むぞ」

正論を突き刺された二アールは苦虫を噛み潰したような顔をする、確かに彼女は優秀な重装員であるが些か馬鹿正直だ

仲間を守る盾としてその行いは大変素晴らしいがそれを優先するがあまり彼女は自身の身体の事なんぞお構い無しに突出してしまう癖がある

アーミヤもそんな二アールを今は少しでも身体を休めるよう今にも暴れだしそうな二アールを小さな身体で必死に取り押さえていた

「二アールさん!どうか今は堪えて下さい・・・!」

自身の限界を知らぬ者が力量を測り損ねて箍を外せば、訪れるのは確実な《死》が待ち受ける

だが二アールとてそれを理解した上での意思であろう事はＡｃｅも、アーミヤも分かりきっている、それ故に誰かが彼女を止めねば彼女は間違いなく遵死を選ぶ事を皆も承知していた

「ならば必ず生きて戻れ、死んだら承知しないぞ!」

まるで「死んだら殺すぞ」と酷い矛盾を突き付けたニアールにＡｃｅはただ口を開かず片手持ちのハンマーを握った腕を掲げた

各員は既に戦闘を開始しており数えている内にネズミ方式で増えるのではないかというほど辺りをレユニオンが覆い尽くしている

直ぐ様Ａｃｅは戦列に加わるべく特殊オペレーターにマチェットを振り下ろそうとするレユニオン兵をシールドを構え勢い良く叩き付け吹き飛ばした、どうやらこの一人が第一陣のようで最前線の重装員に第二陣が喰いかかろうとする直前であった

「先の作戦(一点突破)は覚えているな!?これは時間との勝負だ!.奴らに付け入る隙を与えるな!」

Ａｃｅの言葉で各員は再度得物(武器)を握り直す、戦いの火蓋は切って落とされ――

「Ｅｘｃｕｓｅ(失礼) ｍｅ.」

レユニオンの第二陣とロドス重装員達に接触する瞬間だった、廃墟のようなビルの隙

間から《何か》が飛び出した

あまりの速さに目も追い付かない内にレユニオンの兵士達をボーリングのピンのように弾き飛ばす、まるで運転手が居ない暴走トラックだ

レユニオン重装兵に接近すると難(なん)なく裏側に回り込み死角となる首の裏側にＭ９フラググレネードを《土産》として残すと再度凄まじい速度で駆け抜けて行った

首の裏側に手榴弾を置かれたレユニオン重装兵は手榴弾を取り出そうと必死にもがくも重武装をしたせいでろくに自由がきかず４秒経過したところで手榴弾は時限信管により発破、周囲を覆う外殻の破片と炸薬の衝撃を諸(もろ)に受けて唯一薄手だった首の付け根を容赦無く襲うとレユニオン重装兵の頭部はヘルメットごと空高く舞い上がりどこかの隙間に落ちていった

グズグズと黒煙を発する残された胴体はいつの間にか倒れ込んでおり周囲は騒々しい筈だというのに一団のいるこのエリアには喉元に食い込むような静寂さを残していた

「・・・・・・・一体・・・何だったんだ・・・？」

顔をバラクラバ(目出し帽)とゴーグルで隠しスレッジハンマーを持った男の先陣オペレーター

が呟くとそれを皮切りにロドスのオペレーター達も我を取り戻し始める

その動きは足が速く動くようなチープなアニメの動きではなく四足獣のように脚力で地を蹴り出し、しなやかな躯体で無理やり身体を返し壁を片足で蹴り付け方向転換するような、まるで狩りを行う猛獣を彷彿とさせる、突然の乱入者に場の状況が飲み込めていない者もいたがアーミヤがここで渇を入れた

「皆さん落ち着いて下さい！今の《何か》がどういった理由と目的でレユニオンのみに攻撃を与えたのかは分かりません、ですが今このチャンスはまたとない絶好の機会です！負傷したオペレーターの治療を後回しにするのはいたたまれませんが事態は一刻を争います！急いで下さい！」

アーミヤの指示でオペレーター達は各々がすべき行動に移り出した、負傷したものに肩を貸し瓦礫を数人で押し倒す、一撃一撃全てに明確な殺意があると見て間違いない猛襲はおぞましささえ覚える、骨格が歪にひしゃげたレユニオン兵達の亡骸を大股で越えながら移動を始め次の区画へ足を踏み入れる

「――なんだこりゃあ・・・」

一人のオペレーターが形容しがたい声をあげる、路肩に２ｍほどの高さにまで積み上げられた死体の数々は先ほどまで居た区画ではまるで遠慮をしていたかのような破壊の爪痕が残されていた

砕け散った道路の舗装、倒壊した建築物の瓦礫に入った何かを凄まじい勢いで叩き付けた皹（ひび）と辺りに広がる血痕と無造作に引き千切られた手足と熱した大量の塩をスイカに注ぎ込み破裂させたような、出来れば思い出したくない散乱した人体の部位

一体何をすればこのような惨劇が繰り広げられるのだろうか？

「知りたいか？」

突如聞こえた声を聞き一団の者全てが身を引いた、どうやらその声の主は山積みにされたレユニオン兵の山の影、丁度一団のいる位置から死角になる場所に腰を据えていた

何の感情も無いように聞こえる者もいれば『おっ！やっと来たか！』と歓喜の声に聞こえた者もいる、しかし共通する事はその声には確かに此方の出方を伺っているかのような節がある、見えないのに指で触れれば感触がある蜘蛛の糸ような重圧が含まれたのし掛かるような言葉

言葉を違えた瞬間に切れてしまいそうな圧が込められている

「――言葉がでないか。まぁ仕方ないか・・・安心しろよ、取って喰うつもりは無いしな？」

――重たい、死を直面にした時と同じ緊張感

心臓の鼓動が早まるのがありのままに伝わる嫌悪感、《彼》が言う事が嘘だとして今すぐ踵を返し全力で走り出せば何人助かるだろうか？

――逃げたい。だが動けない、足が震える、動かない、《居ない》のはわかっている、しかし確かにそれは《居る》、首筋に冷えきった鋭い鎌を当てる死神が、其処には《居る》。

アーミヤが知るドクターもロドスの人員をただの駒として扱っていたがそれとはまた違う、少なくとも味方では無いことは確かだ

「おいおい、まさか初対面の人物に対して良くない事を考えてたりしないよな？」

ロドスのメンバー達の心境を知ってか知らずか《彼》は死体の山から腰を上げこちらに近付いてくる

黒地のインナースーツを着てくすんだ水色の装甲服とオレンジ色で遮られたバイザーの付いたフルフェイスのヘルメット、背中には１ｍ少しの何かを背負い右太股の外側に《吸着》された《ブラックスチール・ワールドワイド》の一部メンバーや《サンクタ族》が好むような大柄な拳銃を一つ、腰には大型のナイフ右手にはまた見たことが無い倍率鏡を備えたテラでは一般的な両手持ち式のボウガンに近い大型の銃のような物を所持している

「はは、まぁそれは置いとくとしてそのコート・・・アンタ等がロドスで間違いないな？探してたんだぜ？」

「・・・《探してた》、とは・・・？」

「あぁそうだ、半月も――いや、半月で巡り会えたと言うべきか・・・なぁ？０８７」

彼がそう投げ掛けた先には彼とはまた違ったデザインの装甲服を纏った者がいた、しかしいつの間に背後に居たのだろうか、もしくは初めから居たのだろうかもわからないが彼とは違い体格的に《０８７》と呼ばれた者はどちらかというと《彼女》というべきであろうか、建物の影から〝のそり？と全容を露にする

しかし何故だろうか？彼も、彼女にも、違和感を感じた、徐々に歩み寄ってくる２人

に警鐘(けいしょう)が大音量で鳴っていた

だが何時からか彼も何をどうしたのか圧倒的な威圧感を解いたのか先程までの五臓六腑に鳴り響くような圧力は無くなっているのにやっと気付いたのだ

それでも尚依然として15人という数の優勢があろうともこの2人には絶対的に不利――ロドスの全戦力を同時に投入したとしてもこの2人を打ち破るのはそう〝容易(たやす)いことではない?だろう

そう確信させる幾度も死を掻い潜ってきた濃厚な覇気(オーラ)を纏っている、兎が獅子を警戒するような生き物としての恐怖に対する本能がざわついていたところでやっと2人の違和感が何なのか理解することが出来た

それは単純ながら身長だった

否、身長のみではなく彼女はもちろん彼もかなりの巨体であった、恐らく2mを軽く越える身長に加えボディビルダー宜しく巌(いわお)のように肥大化した二の腕と胴体の装甲からも隠れんばかりの三角筋に鍛え込まれた僧帽筋が装甲服の隙間から見える黒いインナースーツのような物と一緒に浮き出ている、一見インナースーツはゴム繊維に見えるがどのような素材なのだろうか――

アーミヤがそんな事を考えている間、この２人も同様にロドスのメンバーを間近見て疑問や驚きを抱いていた

ウルサスから出た事がない４人組の内２人はこの世界の住人は頭に熊の耳が付いている事しか知らなかったのだ、きっとロドスの者達や他の国(都市)の住人にも頭にふかふかな熊の耳があるのだろうと勝手に思い込んでいた

ところがアーミヤには兎(コータス)の耳が、狐(ヴァルポ)の耳や犬(ペッロー)の耳と尻尾が生えた者すらいれば姿そのものがハイエナ(レプロバ)な者もいる

ちょっとした移動動物園と言うべきか、この星(テラ)ならば現在でも日本に伝わる十二支を集められるような気がしたがこの話は暫くしてからにしようと１０４の男は考えた

「今は時間が惜しいから単刀直入に聞くわ、私達ＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱはロドスに対して協定を結ぶ用意がある、其方(そちら)はどう？」

ロドスの者達にとって初めて聞く言葉が出てきた

ＳＰＡＲＴＡＮ(スパルタン)―Ⅱ？何かの頭文字だろうか

Ⅱということは他にもⅠもあればⅢもあるのだろうか？兎に角彼らの申し出の答えを今すぐ答えることはできない事は間違いない、ケルシーはもちろんのことドクターの

意識もまだ完全に覚醒していない現状、アーミヤもＣＥＯという立場があるが一人でなんでもかんでも「ハイそうですか」と言うにはいかない

「すみません、私の独断で安易に可決することはできません。なのでここはまず、互いを知るべく《あなた達をロドスに招待》して今後について検討を――というのはどうでしょうか・・・？」

確かに今は敵か味方か分からない状況だ、もしも彼らを雇用しなかったとしてもロドスとして何かしらの印象を植えておきたかったアーミヤ

いざとなればまた此方から連絡員を寄越して短期契約でもすればいいのだ、彼らと協力（雇用）することができれば荒事に慣れている上級エリート達も思わず目を背けたくなる大惨事を再度起こせるだけの爆発力がある、そんなレユニオンに対するロドスでも持て余しかねない強大な抑止力があるとアーミヤは手早い考察に行き着く、この答えは間違いではない、４人１組のスパルタンⅡならばメンバーによっては植民地惑星の大陸１つを完全に掌握可能とされている

アーミヤの提案に対して異論を唱える者は居なかった、どちらかといえば唱えられないに近い、運が良いのか悪いのかＳＰＡＲＴＡＮの２人はそこまで深く考えていなかっ

た

ロドス面々が四面楚歌で彼らの出方を見ているのに対してスパルタンはロドスは何故縮こまってる?萎縮しすぎではないのだろうか?という心境だった、もちろん１０４はそこに漬け込まずにはいられない

どうにか上手くロドスの情報を引き抜こう、コミュニケーションや作戦指揮が主な担当である１０４

『なぁ０８７、連中少しばかり固すぎやしないか?もう少し堂々としててもいいと思うんだが』

『多分こっちの出方を伺ってるのよ、さっきまで「急いで脱出する」とか言ってたのに焦れったい子ね』

スパルタンⅡのみ知る秘匿通信でロドスの歯切れの悪さに０８７は建築物に背を預け腕を組んだ、とりあえずスパルタンが思い描いていたロドスとのファーストコンタクトは思いもしない形となった

０８７は生まれたての小鹿のようになっているロドスのメンバーに対して兎に角移動するよう進言した、このままウルサスに残っていては天災とやらに押し潰されかねな

い、アーミヤやＡｃｅといった指揮権が比較的高い者も移動することに異論はなかった
ようだった

…………………………………………

スパルタンと移動を開始してから早一時間程が経過した、小休止を入れている間にスパルタンが誰かと連絡しあっているようだった、大半の者はスパルタンの威圧感に大分慣れたのかいくらか軽快な足取りになっている、０８７はなんとか意識がはっきりとしつつあるドクターを背負い苦もなく足を進め、邪魔な障害物を先導する１０４が事も無げに車両の残骸を投げ捨て時には蹴り飛ばし瓦礫の残骸や倒壊した建築物退かし道を急造する

　その様子をロドスのオペレーター数人は先程までとは１８０。とまでとはいわないが感心したかのように見ていた

「うーん・・・あのサルカズのような屈強でありながらフェリーン（猫）のような筋肉のしなやかさ、彼はどのような体組織をしてるんでしょうかね」

天使の輪っかを頭に浮かせた狙撃オペレーターが小声で独り言を呟く、アーツを使用しての行動ならかなりの疲労が蓄積されているはず、ましてや先程の戦闘でかなり消耗していてもおかしくはない、体力が常人離れしているのか元から優れた身体機能・・・それらを考慮し彼らはサルカズ出身なのだろうかと勘繰る、しかしながら彼らにはサルカズを象徴する《角》が無かった、どうして中々彼らは興味深い

「どうしたのじゃ《アドナキエル》?さっきからずっと考え事しておるようだが」

「《レンジャー》さん・・・貴方から見て彼らはどう見えます?」

「彼ら?――ふむ、そうじゃな・・・《強い》。じゃろうな」

強い?先の戦いを間近で見た上で直喩の感想を言うなんてレンジャーさんにしては珍しい事だ、その中で含みのある言い方を感じたアドナキエルは彼らをいまだに計っているように感じた

「逆に聞くがのうアドナキエル、お前さんはどう見る?」

質問の切り返しに対する答えは後にするとしてアドナキエルは先頭で活路を造る1

０４を見据える、率直な意見をするにしてもロドスには極めて高い戦闘能力を有する者少なくはないが彼らはそれらを逸脱しているように見える

先頭を突き進む人力ブルドーザーにしてもあれだけ巨大な瓦礫をああも軽々投げ飛ばしては腕だけの力でスクラップになった車両を殴れば横回転しながら路肩まで独楽のように飛んでゆく、にも関わらず彼はスタミナを消耗した気配がない、人柄も無口な訳ではなく必要最低限は口を出す、その上それだけの身体能力がありながら名を馳せた訳でもない、ましてやＵＮＳＣなんて組織も初耳だ

ＵＮＳＣとスパルタンについては後にしよう、故にアドナキエルはスパルタンが良からぬ事を考えていると勘繰ってしまう、彼らの今後はアーミヤＣＥＯ、ケルシー先生、ドクター３人を筆頭とした『ロドス三銃士』によって左右されるだろう、正直アドナキエルは彼らに少し不信感を抱いている

先程の《①明らかに異常な程高い戦闘力と各種技能》《②組織のバックヤードが一切不明である事》《③アーツの痕跡は無し、使用せず①が当てはまる異常事態》ＵＮＳＣ側の人類としては最良物件だがテラの世界にとってこれだけで相手を渋らせるのに十分な材料だ、かといってこれだけの理由で不採用になったとしても現在ロドスで採用されている者も《アーツを使用し極めて戦闘能力が高い名の知れた者》だけではない、元民間人の《オーキッド》さんや《アシッドドロップ》さんと《ミッドナイト》さん辺りが良

い例かもしれない、彼女達（内1人男性）も元を返せば鉱石病を治療する為にロドスに来たのだから彼らも何かしらの対価を求めているのかもしれない

「・・・確かに彼らがロドスに加入すれば戦略の幅が幾多にも増すでしょうね、けど信頼するほど知り合ってる訳じゃないし信用できるほどの経歴がある訳でもない。正直仲間になる事に抵抗はありますが彼らからの要求や働きによってはいつか肩を並べる事になるでしょうね」

要約すると「怪しいけどスパルタンを採用するか決めるのはオレじゃない。」以上がアドナキエルの見地だった、レンジャーはそれに対して満足したかのように頷き前を見るとそれ以上何も言うことはなかった

「ん・・・ここは・・・?」

「！　ドクター！気が付きましたか?!」

ドクターがついに目覚めた、アーミヤは感極まっるも暫くはその感情を殺しながら出来るだけ気持ちを抑えた抑揚でドクターに接する

「私です、アーミヤです・・・わかりますか?」
「――アーミヤ――アーミヤ――・・・覚えているような、覚えていないような・・・懐かしい感じがする・・・」

０８７は話を無視する振りをしてアーミヤとドクターの会話を半ば適当に盗み聴く、どうやら０８７が背負うには不向きな形状をしたアーマーの後部におぶさる・・・寄りかからせるのが正しいだろうか、２人の僅かな会話を少し組み立てればこのドクター様とやらは記憶障害を患ったようだ
一時的な症状か新な人生を始めるかはこのドクター次第だろう
そこで風向きが変わったのを察知する草食動物のように１０４が突然立ち止まり周囲を見渡すと丁度東の方角を見つめながら《何か》をしているようだった
その姿はまるで警戒するミーアキャットのように立ち尽くしているがロドスのオペレーター達から見れば獲物を探す捕食者(プレデター)にしか見えなかったが誰もその言葉を言う事は無く１０４もこれといって気にしてはいないらしい

「０８７、１１７が来たぜ。あと旗艦(ふね)もだ」

「あら、吉報じゃない」

霧の向こう側から何かが近づいてくる

軍用の深緑（カーキー）に近い色の装甲服を纏った人物、確かに０８７・１０４と同じ者のようだった、所持している武器は上下に別れた銃身の物と１０４の所持しているスコープ付きの武器に似てはいるが造形が全く異なる物を所持しヘルメットのバイザーは過去の戦闘で破損したのか亀裂が入っていた

「よぉチーフ、どうだった親玉さんは」

「兵員は殲滅した、タルラには逃げられたが・・・そっちのがロドスか」

・・・今何と言った？

このテラでは腕に覚えがある者は自然に名が広がってしまう、まだこの手の仕事をろくに知らない者は誇張された噂話だと思い、傭兵タルラを知る者は簡潔に言えば「仲間だとしても２度と会いたくない」と言わせしめる相当な名の通った手練れの傭兵だ、まさか本当にタルラを追い込み撤退させたのだろうか

もし本当の話しならばこのスパルタンⅡと呼ばれる彼らは何者なのだろう、種族も経

歴も一切が秘匿された何処かの種族が造り出した破壊兵器だとでもいうのか

「なぁアンタ、あのタルラを撃退させたのか？」

Ａｃｅがチーフと言われていた男に問い掛けた、

「・・・妙な方法で火炎を扱う女というならそうだろうな」

まさかの肯定、その上１人でその部下のレユニオン上級兵を全て討ち取ったという、０８７の女性や１０４の男といい、スパルタンⅡはテラに存在する海を越えたまだ見ぬ大陸の誰も知らない軍事大国なのかと思わせざる得ない信憑性をチーフという男が更に増加させた

スパルタンが探していたのがロドスで本当に良かった、もし彼らが探していたのがレユニオンであったらここで掃滅されていたのは間違いなくこちらだったろう

嘘では無いとＡｃｅは改めて直感的に感じ取る、このスパルタンとやらは一体どれだけの修羅場を潜ってきたのだろうか

そこで１０４が唐突に話を切り出した

「チーフ、尾けられたか？」
「いや、アルテミスでは２０００ｍ以内に我々の動きに追従する反応は無かった、恐らく意図してない別動隊だろう」
アルテミス・・・またもや聞きなれない言葉が出てきた、２０００ｍ以内と言っていたが偵察ドローンだろうか？そんな範囲を索敵できる高性能機はレイジアン工業でも類を見ない

「そうか、フム・・・ロドスの指揮官――ドクター・・・だったか？」
「あぁ、どうやらそうらしい・・・曖昧ですまない、まだ記憶が混濁してるみたいなんだ」
「意識がハッキリしてりゃあ構わんさ、お客さんだ。俺達を指揮してみな」

唐突に何を言い出すのか１０４はドクターに指揮をするように指図した、スパルタンはロドスの値踏みをしているのだ、人類最強の強化人間部隊ＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱを扱うに足るか、否か
仮にスパルタンがドクターの指揮を相応しくないと取ればロドスに協力しながらも

独自の指揮と裁量からなる独立した傭兵遊撃隊として行動する気だったが１０４は目立つ事を嫌う性格故にいつも通り部隊を指揮しロドスに事実上の部隊の長として見られる事を懸念しドクターに今後スパルタンの賽を振らせる腹積もりらしい、１１７をリーダーとしてはいるがやはり階級だけでいえば大尉の１０４が部隊長として仕切るべきでもあり０８７も「そんなに嫌なのか」と言いたげに呆れるような仕草をしている

「３人は、どう言った装備を？」

ドクターから装備の詳細と各々か長けた役割を聞き出す、射撃オペレーターを敵の真ん中で足止めをさせる訳にもいかない、適材適所は戦術の基本だ

それに答えるようにスパルタンが一人づつ口を開いた

「０８７、スカウト（特殊）を主眼にショットガンによる近接射撃（強制移動）。足なら任せなさい」

「１０４、本職はＣＱＢ（前衛）と火力支援（支援）だが・・・ここでなら壁（重装）だな。まぁ上手く使ってくれよな」

「・・・１１７、必要ならある程度（先陣・前衛・支援）は請け負う」

「――それと、もう１人いる」

その言葉にロドスのメンバーは周囲を警戒した、しかしその1人は見当たらない、そんなロドスの一団を宥めるように０８７は何かを悟ったように口を開いた

「もう1人はここから８ｋｍ離れた移動都市外の崖の上にいるわ、あなた達に近づくレユニオン兵を１０人以上始末してる、気がつかなかったの？」

その言葉にアーミヤはやっと気のせいを確信にした、やっぱり先程のボウガンや弓の音とは異なる何かが強く弾けたような炸裂音は彼らの手の内の者だった

「８ｋｍも先から精密狙撃だと・・・？そんな、馬鹿げてる・・・」

にわかには信じられないと疑うドーベルマン教官は犬の耳と尻尾をもつペッローという種らしい、ドーベルマンの言葉に声も無く相槌をうつ者も数人いた、その数人の中には先程Ａｃｅと会話をしていたニアールの姿もあった

ドクターは数歩前進し周囲の高台や瓦礫などそれぞれの役牌を組み立て適切な陣地配置を思索する、自分は今試されているのだと先ほど朦朧としながら掠れた記憶に残る彼らの戦いの後に残った効率に効率を重ねた緻密で残虐な破壊の痕を残す様を今一度思い返す

（はは・・・ これが俗に言う正念場ってやつなのかな・・・？）

ドクターはまさかの起き抜け一発にこんな大仕事を任されるとは思いもしなかっただろう、記憶喪失で自身の名前をどう読み書きするかというよりも前にこんな事になるなんて不幸なのか幸運なのか見当もつかないが・・・

深く息を吸い込みゆっくりと吐き出す、深呼吸を数回行い脳に十分な酸素を取り入れると徐々に迫るレユニオン兵に狙いを付けた

「作戦開始ッ!!」

― 巨星始動 ―

― ＵＮＳＣインフィニティ ―

「それは本当かローランド」

艦長室からラスキーの驚愕の声が発せられる、その発端はローランドが『艦長、ブルーチームがこの星にいるようです、スパルタンⅡ用の秘匿信号を確認しました』と言い出した事だ

「なぜチーフが？チームという事は他３名もいるということだろう？そもそもブルーチームはファイアチーム・オシリスと行動していたはずだ、それが何故この星に？」

「さぁ？私に聞かれましても。ですが惑星サンヘリオスからマスターチーフ達が転移した――と考えれば他の誰かもこの星に来ている可能性があるという事ですな」

今言える事はＵＮＳＣにとって唯一無二の最高戦力の１つであるブルーチームとの交信が今後最優先されるという事になるだろう、だが何故いるとわかっているのにこちらから交信ができないのだろうか？

ラスキーはローランドにその疑問をぶつけてみることにした

「全くもって見当もつきませんよ、確かに少し前までブルーチームは無許可離隊で追われる身でしたがこの状況下で今更そんな事が理由で通信を拒むなんてマスターチーフがするとでも？艦長も良くお分かりでしょう」

「なら何かしらの理由で通信が出来ないということか？あの街に見えるモヤのような霧か？」

「恐らくは」

どうにも身動きが上手く取れずもどかしい、できることなら無人誘導でペリカン輸送機を送り込みブルーチームを回収したいがＵＮＳＣの光域通信ですら遮るあの忌まわしい霧をどうにかしなければならない

「そんな艦長に良い知らせです、あの霧は外側からの信号を遮りますが中にいる限りにおいて通信機器は外側にもある程度送信が可能なようです。現にリンダ０５８からインフィニティに火力支援と脱出用のペリカン３機を要請しています、ご丁寧に現在の座標と目的地の座標まで。私が察するにあの霧は外側と内側で周波数が異なる磁場の境目に当たるというヤツですな、面倒なので《電波障害》と言っときましょう」

「そうか・・・何故最初に言わないのかは後程問うとしてブルーチームがあの街にいるという証拠は?」

「ブルーチームはあの霧の中でロドス・アイランドという勢力と連携を取り現在も敵性勢力と交戦状態にあるからです」

一体どういう事だ

ロドス・アイランド?そんな話今までしていなかったじゃないか!ローランドはしれっと言うがそれが原因で全く持って良くない方向へ向かうこともあり得る

だがブルーチームならある程度コミュニケーション能力があるフレデリック１０４もいる事もありそこまで酷いことにはなっていないだろうと杞憂にしておく事にする

「ならすぐに歩兵火器弾薬を満載したガンシップ装備のペリカン３機を向かわせろ、

なんとしてでもチーフとブルーチームを連れ戻すんだ」

「電波障害については？」

「有人誘導ならその周波数を適切に変更し通過できる可能性がある、操縦士は《Ｍｋ―Ⅵ　ＧｅｎⅡパイロット型アーマー》の熟練者、通信士は電子機器に明るいスパルタンⅣにさせろ」

ラスキーから強引な命令をされたローランドはため息をつきながら「了解しました」と答える、ラスキーがムキになり声を荒げる理由は過去にマスターチーフに２度も命を救われた件が由来だ

１度目は士官候補生時代、ラスキーがまだ１０代の頃にＵＮＳＣ海軍士官候補性養成学校に在学中だったラスキー含め数百万人が在星していた人類の内たった１０名以下の生存者の１人として救出された件２話目でラスキーが触っている鉱石のネックレスはマスターチーフと共に撃破したハンターと呼ばれる大変危険なコヴナントの兵士の装甲の破片であり２５２６年当時（現在は２５５８年）ではスパルタンⅡであってもかなり危険な敵であった、必ず２体１組で行動し相方が倒されると凶暴化しスパルタンⅡのジェームスも凶暴化したハンターの拳でヘルメットごと叩き潰され餌食になってしまった

２度目は人工惑星レクイエム脱出後、ウル・ダイダクトの進行を食い止めた地球衛星軌道ライン防衛戦にてチーフが居なければ間違いなく地球はダイダクトによって全ての知的生命体がコンポーザーによりデータ化されていた件

ラスキー自体もインフィニティにダイダクトの手先が侵入してきた際にはショットガン片手に身長３ｍに届く《プロメシアン・ナイト》に対して拳で挑み怯んだ隙をショットガンの接射というアグレッシブかつ向こう見ずな行動を取った一面もある

マスターチーフの期待に応えんばかりにラスキーはチーフが求めれば与え、チーフが進言すればＵＮＳＣ海軍太陽系防衛艦隊総司令官テレンス・フッド卿の進言と同等の価値があると信じ配下にチーフの提案を厳命させてきた、彼に対する忠誠は留まる事を知らない

マスターチーフとは日本語でマスターチーフ・ペティーオフィサー[MCPO]と言う階級であり極東の島国での名を『最先任上級兵曹長』という戦場においては絶対的な発言権と実績を持ち合わせる十数億人という最大規模時のＵＮＳＣでも片手で数えられる程度の人数しか存在しない階級だ

スパルタンⅡという戦場の叩き上げエリートであると同時にその階級もありチーフの一言は所属艦艦長の言葉と同じ《現場を知りつくす者》として貴重なものとなっている

それを無視した結果地球にダイダクトが攻め入りインフィニティ初代艦長《アンドリュー・デル・リオ》は佐官の階級だというにも関わらず意図も簡単にフッド卿に左遷を言い渡され『チーフを頼むぞ。』とラスキーをインフィニティ2代目艦長として着任させる珍事も過去にあった

フッド卿もチーフに絶対的な信頼を持つ人物として有名で直属の部下にチーフの武勇伝を日頃から語っている

ＵＮＳＣの現場兵士ならば誰もが口を揃えて『英雄』『守護神』と称されるマスターチーフは生きる伝説として宗教の壁も惑星の壁すら越えた圧倒的なカリスマ性を持っていた

「失礼します艦長、各種動力メンテナンスクルーから復旧完了との報です、そして問題が1つ・・・ショウ・フジカワ光速機関― ショウ・フジカワ ― 日本人ではない、正確には《トビアス・フレミング・ショウ博士》と《ウォーレス・フジカワ博士》である、名前の通り日系人でありスリップスペースエンジン開発の第一人者の大部分が破損しており修復にはかなりの資材と人員が必要です」

「ふむ・・・全損よりはマシと捉えよう、諸君！機関始動だ！インフィニティ海抜せよ

！ブルーチームの探索と収用を第一とし発艦したペリカンも引き続きチーフの捜索に当たれ！ローランドはＳＦＦＴＬエンジン修復に必要な材料をリストアップしこの星の資材に互換性があるか調査しろ」

「イエス・サー!!」

「了解しました」

「――チーフ、今度は私が貴方を守る番です」

人類の産み出した巨人の心臓に火が灯される

歩む先に待ち構えるは鬼が出るか蛇が出るかの２本道、どちらに進んでも録なことにはならない

むしろ異星人類の介入によってテラに破滅が待ち構えるやもしれない

しかし指を加えて一部始終を眺めているだけでは何も解決しない、ＵＮＳＣの翼を広げる大鷲の紋章に流れ星が記されているがこれは《宇宙》を意味するだけではない

『勇気』『未来』『止まる事のない進み続ける光』などの意味も含まれているが最も大きな意味を挙げるとすれば――そう

『希望の流星』

……

ロドスの重装オペレーター2人の僅かな合間を白い尾を引いた弾丸が通り抜けレユニオンの狙撃兵の額中央に命中する

ロドスメンバーに危害が及ばないように弾丸を徹甲榴弾から高い貫徹力を発揮する14．5×114mm　APFSDS弾に変更し狙撃兵に撃ち込む、貫通しても尚勢いは減衰すること無く狙撃兵を貫通し背後で移動していたレユニオン兵の脇腹から背骨を綺麗に貫いた

「本当に移動都市の外の崖から弾尾が・・・」

秒速1530m／s（時速5508km／h）の槍が物体に衝突した際のエネルギー量は途方もない暴力を振るう

次に発射された侵徹体はレユニオン重装兵の盾に衝突すると盾とダーツのように尖った弾丸が塑性流動現象を発生させ容易く食い破り重装兵のヘルメットに侵入した所で速度を失い熱量で融解しばらけ散った弾丸で脳内を掻き回された

しかし戦車砲として使用されるＡＰＦＳＤＳ弾とノルンファングで使用されるＡＰＦＳＤＳ弾は《装甲を貫徹させる》原理は同じだが弾そのものの大きさは使用される火器に依存していた

ＵＮＳＣで正式採用される《Ｃｈａｌｙｂｓ（チャリーブス）　Ｄｅｆｅｎｓｅ（ディフェンス）　Ｓｏｌｕｔｉｏｎｓ（ソリューション）》社製戦車こと《Ｍ８２０スコーピオン戦車》

Ｍ９９０電熱化学式１５０ｍｍ滑腔砲から発射される侵徹体は２５００年代で更に牙を磨き正式採用された２５５７年で砲弾初速は推進材の加速も合わさり実に２４５０ｍ／ｓ（時速８８２０ｋｍ／ｈ）へ達し全長８３０ｍｍの弾芯を使用し３９００ｍｍの特殊装甲を穿孔（せんこう）可能なのに対しノルンファングの侵徹体はわずか１４０ｍｍと差は歴然である

使用している素材は《劣化ウラン》の物があるが最も戦車砲弾に適した高比重素材は《タンタル》か《イリジウム》である

タンタルはかなりのレアメタルであった過去の地球とは違い各植民地惑星で大量に採取されているため強い毒性を持つ劣化ウランは軍製品としては衰退を辿っており一般の銃火器には《鉛》《タングステン》が使用され戦車・狙撃銃・ＵＮＳＣ海軍艦での主（ＭＡＣ・ガン）砲は《タングステン》《タンタル》がＵＮＳＣで更新され始めている

『ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ』

後方８ｋｍからの白い尾を引いた死の射線にロドスのオペレーター達は舌を巻く、どれだけ長距離狙撃が得意なオペレーターでもボウガンや弓ではそもそも射程距離に限界がある
０５８から既に何度目かのキルコールが入り貫かれた重装兵以外の比較的軽いレユニオン兵は着弾の衝撃で３ｍ程吹き飛ばされ廃ビルの窓ガラスを突き破り見えなくなった
それをドクターの周囲を囲み警護する指揮から今回に限り采配されずにいたオペレーター数人が会話している

「うわっ・・・８ｋｍ先からでもあの威力とはえげつないな」
「なぁ、あれは《銃》ってやつだろう?」

テラにおいて銃は珍しい物ではあるが誰もが知らない物ではないサンクタも一部の者が愛用するしサンクタ以外の者も使用されることがある
例えば民間人、取り分け女性が比較的多く所持しているのが目撃されており利用目的の大半が《護身用》としている

セーフティを解除してトリガーに指を掛けて適当な当たり(狙い)を付けて指を絞る、手の忙しさならナイフと催涙スプレーもあるのだがテラと地球では正当防衛に対する認識が地球人とはかなり異なっている

地球では正当防衛の他に《過剰防衛》という『自身を守るためでも限度がある』――という法律があるがテラに於いてはそれが殆ど機能していない点が挙げられる

簡潔に言ってしまえば『手を出す方が悪い』という意味で地球の女性が知れば権利団体が喚き散らすこと請け合いだ

要は治安が極端に悪いのだ、地球で例えれば人類が外惑星のテラフォーミングに着手するよりも過去のデトロイトの大陸規模版といったところである故『犯罪者に近づかれる前に殺すから銃が一番』というのがテラの女性の護身事情となっている

もちろん治安が悪ければ逆に良い地域も存在するが長くなるので割愛する

「サンクタとBSWが使う銃とは違うのか?」

「知らねぇよ、レイジアン工業が《あんなの》作ったらそのうち俺達が使ってる《アーツ》も時代遅れになんのかな・・・」

後衛がそんなことをぼやいている最中にも戦況は目まぐるしく変化していた、スパル

タンはいつの間にか役割が真逆に豹変し０８７は敵の目前まで潜り込みＭ４５ショットガンを立て続けに放つ

屈強なコヴナント兵士にすら至近距離では恐れられる対人用バックショット弾はレユニオン術師が飼い慣らす《オリジムシ》に命中すると勢い良く弾け飛んだ

五臓六腑満開御礼（ごぞうろっぷ まんかいおんれい）

ここに粋な極東生まれがいればそんな事を言い遠巻きで見ながら膝を叩いただろう、図体に似合わない後方宙返りをしつつショットガンの装填をする０８７は戦場の様子を右から左へと一瞬で流し見る

ドクターが定めた４つの通路は最後に１ヶ所に纏まり最終防衛ラインに繋がっておりスナイパーの０５８をカバーするようにロドスの重装オペレーターが２人と術師が援護をしている

最初こそビビり散らしていたものの数発の弾丸が１００％の確率でレユニオン兵に吸い込まれるのを見ている内に幾つか気が付かされる事があった

「なぁ！さっきから《あの狙撃手》！」

「わぁ?!びっくりするからいきなり話しかけないでよぉ！」

盾を必死に構えながらレユニオン兵を押し戻す重装オペレーターの怒鳴り声に近い会話は《長すぎる袖が気になるゆらゆらした雰囲気の術師》の耳にも入っていた

「俺達が『やべぇ！抜かれる！』って思った時にはその狙撃手がぶっ倒してんだ！着弾するまで数秒は掛かるだろうにそれを先読みして当てるなんざ世の中にはすげぇヤツもいるモンだなァ！」

「えー?!何言ってるのか聞こえないよー!!」

特徴的なマスクを被った《一本角》が生えた声を挙げる男性重装オペレーターとその言葉が鈍器や刃物がシールドに当たる音で遮られ曖昧にしか耳に届かずイマイチ理解できてない《スキーゴーグル》を額に当てた白いシャツを着たペッローの重装オペレーター、その耳自体は案外飾りに近い物なのかもしれない

『カキュンッ』

遥か後方から侵徹体が飛来し、それはペッローの女性重装オペレーターのシールドを僅に掠るとレユニオン兵の喉仏に吸い込まれるように命中した

「ひゃぁ!!弾が盾を掠めた!!」

「あぶねぇ！盾の破片が目の前掠めたぞ！前言撤回だ！あの野郎狂ってやがる!!」

グルグル回るドリルのような手の平返しの後、ついに堪忍袋の緒が切れた男性重装員、１００％の命中率を誇る最強のスナイパーだとしてもやっても良い事と悪い事があると逆上する

８ｋｍも離れていてはこちらの動きによっては友軍に直撃してしまう事もあろう、だが長年スナイパーを勤める０５８は誤射は彼女のスナイパー人生において一度も発生したことはない

最後の１人を叩き伏せシールドの端っこを抉り取られた持ち主はちょっと泣きそうな顔をしてスコープに写るように何かを訴えかけていた

盾自体の材質は一般的にはポリカーボネートやアクリル有機ガラス、鉄などが使用されているがＵＮＳＣでは装甲服自体が《ミョルニルアーマー》という防弾・防刃・対熱・対冷・ガス・放射線耐性などありとあらゆる耐久力を持つ素材となっておりリチャージ式の高出力アーマーシールドが備わっている事もありＵＮＳＣ歩兵装備では物体シールドは設置式機関銃の銃手の防護や防衛線の守りに使用されるチタニウム合金製の限定的な物しかない

一部例外として戦闘車両があるがそれは後述する

ＵＮＳＣにシールドが無いわけではなくアーマーアビリティとして薄い青色の硬貨フォトン式《ライトシールド》、手榴弾型の小型デバイスを地面に叩き付けてハニカム状の透明に近い黄色の壁を展開する《バブルシールド》などの光学式シールドか主流となりスパルタン達はそれらを用途に合わせ使用するのだ

気になる点はテラの各元素が地球の元素と元素が相反する可能性である

「・・・あの子、ご立腹なのかしら?」

０５８はそこまで考えて先程放った弾丸が彼女のシールドに掠めたことを思い出した、そんなに怒ることではないのでは?

しかしテラでは装備品を大切にする者は多い、資源が限られてるからか、はたまた高級品だからか――そういった意味合いではＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱも少し親近感を感じるところがある

ＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅳのアーマーは都市部に豪邸を幾つか建てる位の値がかかるがＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱのアーマーは宇宙戦艦一隻に相当する費用が掛けられている、しばらく前に彼らのアーマーも《ミョルニルアーマー　Ｍｋ―Ⅵ　ＧｅｎＩ》に更新されＵＮＳＣ経理部署がてんてこ舞いにになり海　軍　情　報　局（Office of Naval Intelligence）がほくそ笑むよう

になってから久しくなった

「後で謝らなきゃね」

そんな申し訳程度な事を言うがフルフェイスヘルメットを被る０５８の表情は何ら変わり無い無表情であった

一頻りぶつくさと孤高の狙撃手に文句を垂れ流した後に《ノイルホーン》《カーディ》《ドゥリン》の３名はドクターからの指示で移動するとそこは激戦区の真っ只中、まさに鉄火場のような熱気に包まれていた

熱気というのも気迫や気合いなどの精神的な話しではなく物理的な温度のことを比喩した状況にある、赤熱化した鉄柱と焼かれ、燻されたような惨事にカーディは思わず鼻を摘まむ

その瞬間直ぐ側の通りを横切るように赤い光線が瞬間的に映し出された

光線の直撃を受けた重装兵と数名の兵士及び暴徒を貫通し廃墟に着弾したところで光線は消滅、赤熱が貫通した人体は文字通り炭化し、装甲や衣服などは大半が融解してしまった

根元を探すとロドスの者たちにとってファーストコンタクトであった１０４が背中

にどういう原理でくっついていた物を構えていた

『ボシュウウウ・・・』[104]

間違いない、アイツだとすぐにわかった、その物から熱を放射しているのか排気音と揺れる蜃気楼が発生していたのである

一体どれだけの熱量を発生させたのかは謎であるが兵器としての猛威が存分に発揮されているのは嫌でも理解させられた

その名もＷｅａｐｏｎ／Ａｎｔｉ Ｖｅｈｉｃｌｅ Ｍｏｄｅｌ６ Ｇｒｉｎｄｅｌｌ／Ｇａｌｉｌｅａｎ Ｎｏｎｌｉｎｅａｒ Ｒｉｆｌｅ

通称、スパルタンレーザー

ＵＮＳＣ内の歩兵用火器として最強の破壊力も持つスパルタンレーザーはスパルタンⅡと同じ時期に開発プロジェクトが始動しスパルタンⅡの完成とほぼ同じタイミングで開発が完了した由来からスパルタンレーザーと呼ばれている

スパルタンにしか扱えないわけでないので安心してほしい、夥しい熱エネルギーを直線に照射するこの光学火器はＵＮＳＣにおいて歩兵用火器の中でも最強の単発火力という名を欲しいがままにしている

呆然として立ち尽くすレユニオンに発射口を向け再度発射の為の充電が開始され発射口から照準用の早い感覚で『キンキンキン』という異音と共に点滅する赤く細い光線

が戦場を駆けてゆく

それを見て蜘蛛の子が散るように逃げ出すがもう踵を返した瞬間に光線が発射され数人のレユニオンを蒸発させた

命からがら逃げおおせた戦闘員に０８７が奇襲を掛ける、至近距離にはショットガンで吹き飛ばし距離が少し開けばフルメタル徹甲弾ジャケットが装填されたＭ２０サブマシンガンの高速連射で確実に息の根を刈り取る

遮蔽物に身を隠した重装兵には１１７が上下に銃身が割れた銃を向ける、割れた銃身を繋ぐように光の輪が幾つか連なると『パゴオォン!!』という凄まじい轟音と共に磁気を纏った青い光が飛び出す

遮蔽物を抉り抜き隠れた重装兵の装甲を貫くと鈍い破裂音が耳に入る、着弾した重装兵がくしゃりと倒れ込むと隙間と言う全ての隙間から黒煙が漏れた、ドクターはそれ遠巻きに見て《高い貫通力を持ち、弾が内部から破裂し破壊する兵器》と見た

実際はアシンメトリック（A）・リコイルレス（R）・カービン（C）―９２０と呼ばれるＵＮＳＣ傘下のアケロン・セキュリティ製の携行型レールガンである

Ｍ６４　１６ｍｍ×６５ｍｍ　ＦＴＰ―ＨＥ（高性能炸薬弾）が１発のみバッテリーパックに納められておりそれごと交換することで飛翔速度マッハ９の炸薬入りスラグ弾を投射する事ができる

ただしこのレールガンは携行できる弾数に限りがあるのだ、生産数は多くはないが備蓄分は十分であり、現代のスマートフォンを5～6枚程を重ね合わせた大きさに対して約8ｋｇというかなりの質量を持つ重水素発電式バッテリーパック1つにつき1発の投射体が納められた複数個持ち運ぶにはかなりの負担になってしまう

現に117も所持可能な6発の内3発を使用していた、104のレーザーキャノンも最大充電時であっても4射分しかチャージできないため2射してしまったがまさに《切り札》といえる性能を秘めていた

「・・・圧倒的だね」

「・・・はい、ロドスのエリートオペレーターも、各地の傭兵でも、ここまで洗礼された者はそうそういないでしょう」

ドクターが戦場から僅に離れた指揮場から潜めた声でそう言った、まだ実力は未知数だがこの短時間でドクターはスパルタンに対し一騎当千に等しい実力と強いコンビネーションを持ち合わせた戦場のエキスパートと判断する

各自所持する得物（武器）の性能も然ることながら極めて高い戦術性でこちら（ロドス）の指揮の邪魔をすることも無く効率的に生殺与奪を行う姿はロドスのオペレーター達からも不可思

議な高揚感が更にアドレナリンを分泌させる

このチェルノボーグ（地獄）から1人たりとも欠けず帰還できる――と

それにしてもスパルタンの動きには違和感を感じる、ドクターがそれを知るのはもう少し先の話しになるがドクターよりも現場を知るＡｃｅはそのドクターが想う違和感を朧気ながら形を作り、組み立て、想定した

（奴らの動きは迎撃・防衛に重きを置いた動きではない、戦闘員を片付けるだけに止まらず周囲の施設や兵器、ありとあらゆる物も破壊し尽くす・・・恐らくだが奴らの特性は少数精鋭による強襲と掃滅（そうめつ）のソレだ）

Ａｃｅの考えはあながち間違ってはいなかったがスパルタンⅡは本来は隠密偵察・破壊工作・テロ主導者捕獲・要人警護・システムハッキング・暗殺など対テロリスト用の戦術兵器としてＵＮＳＣと海軍情報局共同の元開発されたものであり幅広い作戦行動に対応している、オリオン・スーパーソルジャー計画とはよく言ったものだ

「・・・うん？」

なにやら様子がおかしい

何か、ナニカが迫るような、そんな感じ
なんだろう

「・・・なんだがさっきと雰囲気っていうか、なんか物々しいな」
「確かに、腹の底が震えるっていうか・・・」

不明瞭な言葉の数々にアーミヤに介護されるわんぱく女騎士のニアールは霧の中に何かがこちらに向かっている事に気がついた
敵襲?!ニアールがそう思い口を開く前にソレは霧の中から飛来するや否や

「うわぁ～なぁにアレ～?」

寝ぼけ交じりのオペレーターから気の抜けた声がいの一番に飛び出す
ロドスの物とは全く違う3機の謎の飛行装置は機体の先から１０４が射ち出した物と同じ赤い光線を吐き出しレユニオンの群れに直撃した
次の飛行装置は胴体下から凄まじい連射力の機関砲(30mm弾)を光線から逃れたレユニオンに浴びせると破裂するように次々と人であったような物が出来上がる

阿鼻叫喚の断末魔と爆発音が奏でる気味の悪いオーケストラをロドスの者はただ固唾を飲み、せめて苦しまず死ねるよう見守った

― 方舟 ―

数間秒の間にレユニオンをこれでもかと痛め付け、最後にロケット砲で粉微塵に変えた謎に満ちた飛行装置

胴体の両脇には悠々自適に翼を広げる大鷲の紋章が描かれている

ロドスにも飛行装置は存在するがこれほどの火力を詰め込んだＵＮＳＣの飛行装置はさぞや高額で希少な最新型なのだろうとロドスの飛行装置で空を飛んだことがあるオペレーターは思うだろう

３機の飛行装置はゆっくりと道路の真ん中に堂々と降り立つと操縦士と思わしきスパルタンⅡに似た装甲服の人物が３人、１人が白基準とグレーのアクセント、一人が黄色基準と緑のアクセント、一人が黒基準と赤のアクセントと色が違うだけで全く同じ造形の装甲服を纏っていた

「同部隊で色が違うという訳でもなさそうだが、何故色分けされてるんだ？」

「各部隊からの実力順さ、あの黄色のヤツは前にウォーゾーン（VR戦闘システム）の模擬戦でやり合った事がある」

スパルタンⅣの装甲服の色の違いに気がついた角が２本生えた女性の先陣オペレーターに対して斜め前にいた１０４が顔の位置を変えずに口を開いて答えた

いい加減前述してきた単語の説明が無いまま新しい単語をポンポンと発言するのは辞めて欲しい、『崖の隙間を通る瞬間に０５８がパイロットキルして輸送機ごと墜として全滅したから始まる前に終わったけどな』とカラカラと笑いながら語っていた

（笑い事じゃないだろう・・・どれだけ狙撃の才を花咲かせるつもりだ・・・）

教官として十人十色、百人百様、千差万別なオペレーターを育成してきたがこれ程まで純粋な殺しに特化した者はスパルタンⅡが最初で最後だとドーベルマン教官は後々そう語る事になる

圧縮した空気が抜ける音と共にカーゴハッチが開く、中は思ったよりも小さく見えるがこれが輸送機なのだろうか

そんな事をアーミヤが考えているとスパルタンはさっさとペリカン輸送機に飛び

乗っていく

「ロドスまで送るけど、どうするのかしら?」

０８７から言い渡された相乗りの提案、渡りに舟とはこの事だろう、たがこうも簡単にホイホイ釣られる形で信じて良いものだろうか?

視線がアーミヤとドクターに集まる

これに乗ればロドスなんで目と鼻の先だろう、何を躊躇(ためら)う?そんな視線

確かにその通りだ、スパルタンⅡが属する組織の飛行装置に同乗させて貰えればロドスまで一時間も掛からない、しかし徒歩で移動することになれば移動都市の外に隠しておいた補給物資を使用してもどれだけ早くても1日では帰れない

・・・視線が痛い、今こうして戦場に居るのはわかってはいるが女性陣は皆１０~２０代の者しかいない

アーミヤはニアール(ニアール)に目配せするが当の本人は『?・・・??』といった様子でアーミヤを見返した

『早く帰りたい、熱いシャワーが浴びたい、ベッドで休みたい、レーション(携帯食糧)ではなく温かい食事を取りたい』

言葉に出さずともなんとなくだがアーミヤはオペレーター達の思考が読み取れてしまった、それ以上に徒歩ではこのチェルノボーグからの脱出前に時間切れで災厄に巻き込まれかねない

ならば私が言うべきは・・・

「皆さ――「載せて貰っても、いいんじゃないかな」

アーミヤが口を開こうとした瞬間にドクターが先に口を開らきアーミヤは驚愕した

あぁ・・・ドクター・・・なんというか、こう、もう少し疑いというモノを・・・

こんな状況になってはオペレーター達の箍(たが)は効かないだろう、責任者の1人がOKサインをすんなりと出したのだ

無言の視線による圧にアーミヤはもう致し方ないとペリカンから眺めてくるスパルタンに体を向ける

「別に何か要求する訳でもないわ、ただロドスについて詳しく教えてくれればいいの」

「その通り、企業機密を言えって訳じゃないぜ？面接前に面接先を調べるようなモンさ、そっちからすりゃ企業のアピールになるしデメリットは無いだろ？」

こちらの気も知らず簡単に言ってくれる
高い殺傷能力を持つ兵器を満載した飛行装置は数機所有しているというだけで小国の軍事力を覆す技術力の証明にもなり得るのだ
スパルタンは意図していないだろうがロドスにとってスパルタン達の行動次第では十二分に脅威となるだろう
そして先も言ったが今は時間があまりにも無い、後の事は後の事だ

「・・・わかりました、ロドスの社概要でしたら機内にてお話しさせて頂きます」
「・・・いいんだな？アーミヤ、ドクターも」

Ａｃｅが後ろから声を掛けてくる
ドクターは「確信は持てないけど、彼らは悪い人じゃないと思う」と言いアーミヤは顔だけをＡｃｅに向け軽く相槌をするとＡｃｅも「・・・わかった」とだけ言った
完全に着陸せずに５０ｃｍ程のホバリングをしているＵＮＳＣのペリカン輸送機に次々と飛び乗っていくロドスのオペレーター達
恐る恐るといった者

安堵のため息をする者
警戒し尻尾が逆立った者
高所恐怖症で尻込みする者

（なんつーか、愉快な連中だ）

口にすることなく《移動動物園》と思うだけの１０４
それに対して１１７が「口には出すなよ」と釘を指してきた、思うだけならタダなんだぜ？チーフ
ひとまず収用を完了し飛び立とうとするペリカンのパイロットから機内通信が入る、チーフはそちらを向いた

「・・・マスターチーフ、西方３００ｍの廃墟ビルから所属不明の人物を３名確認、指示を」
「・・・モニターを見せろ」

マスターチーフがそう言うとカーゴ内の天井から円盤状のテーブルのような物が降

りてくる、吊るしワイヤーもドローンのようなローターも無くふわりふわりと浮遊している

どのような構造なのだろう・・・

モニターもフレーム無しで投影式、円盤の外枠になぞるように鮮明に写し出されたモニターの向こうには確かに近場のビルに3名の人がいた

その内1人が叫ぶより怒鳴るような仕草で両手をひたすら振り続けている

「ズーム、指向性集音レーダーを向けろ、3番機は崖のスナイパーを先に拾え」

『オーイ!!コッチに気付けーー!!』

服装からして学生のようだ、女子3名が助けを求める中ペリカンの内1機がチェルノボーグを離れる、この3番機は移動都市郊外の崖を陣取るスナイパーを拾う為にスラスターを水平にし高度を取りながらその場から離れて行った

それをこちらに気付いていないのかと思ったビルの3人は更に身振りを多くしてこちらに存在をアピールする、中々に口が悪いのはこのウルサスの血筋の類いなのだろうか

『ハァ!?オイ何だよ!あぁっクソが!!コッチ見えてんだろーー!!?』

『なぁチーフ、置いてけぼりも何だ、拾ってやろうぜ』
「２番機はダメよ、600kg弱 700kg弱 私 とチーフで1トン以上重量取ってるわ、700kg強 １０４の１番機ならまだイケるわ」

隣の１番機に搭乗する１０４から笑いの入った震え声の通信が入る
無視するには流石に罰が悪いのだろうか０８７も１０４の肩を持った

「ＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱは市民に貢献――でしょ？」
「それはＵＮＳＣに登録されてる植民地惑星の正規市民のみだ」
「屁理屈言わないの、まだ子供よ？１番機パイロット、寄せてカーゴを開けて」
『おい、俺に押し付けるのか？』

そんな不服そうな１０４に言い出しっぺの法則は知ってるかと０８７が言うとそれに納得したのか『む・・・』と口を閉じる１０４
正直な所０８７はスパルタンの中では比較的高いコミュニケーション能力がある１０４に初めから押し付けるつもりであったのだ、１０４も０８７が何故あの暴れ熊娘を押し付けてきたのかを何となく把握した

（０８７のやつ・・・俺達はこの星の住民ではありませ～んって説明しろって？冗談キツイぜ・・・）

ビルの屋上に機体を付けカーゴハッチを開ける、助けが来た事で喚き散らしていた熊耳の茶髪と前髪にメッシュを入れた学生が先程よりは明るい表情になった

ロドスのオペレーター達に手を借りてペリカンに乗り込む３人の熊耳娘

しかしどうだろうか、カーゴのど真ん中に陣取る２ｍを優に越える巨人を見た途端に１人が斧を振りかざしてきた、しかしそれを「お？」と、言いながら悠々と避ける１０４

「えぇっ!?ちょっと《ズィマー》おねぇちゃん?!なにやってるの?!」

ロドスのオペレーター達はそれを見てざわざわと騒ぎだした、そんな事知るかと言わんばかりに振り下ろされた斧を返し切り上げてきた所を１０４は腰から大型の肉切り包丁にしか見えない巨大なコンバットナイフで斧を受け止めた

「かきんっ」

金属同士が重なり火花が散る、ズィマーの手は力が込められているのか震えているのに対し１０４は普段と何の代わり映えもなく相棒（ナイフ）を握っている

「ハイハイ、お前は・・・ズィマー・・・だったか？この輸送機は俺らＵＮＳＣの所属なんだが？」

それに加えて「まだ続けるなら降りな、出口はあっちだ」そう言うと斧を持ったズィマーはムスッとした顔で舌打ちしつつ空いている座席にドカッと座り腕と脚を組んだ

「はぁ、なんだかな・・・」

一体俺らが何をしたっていうんだ

ナイフを指先で軽く回し仕舞いながらそんな文句を１人ごちた

「えっと、たぶんおにーさん（１０４）を暴徒の人と勘違いしちゃったんだと思います」

「あ？俺が、暴徒？・・・あー・・・そうか・・・そういうことか、すまなかった」

「・・・？」

「こっちの話だ、ほらもう動くから席に座ってな」

そういうこと?１０４に謝罪を入れた《グム》はその言葉の意味が分からなかった

１０４が他のスパルタンと合流する前に行っていた用事とは周辺に彷徨うレユニオンや暴徒といった放っておけはスパルタンとロドスに対して必ず害になる危険因子の排除である

ビルの屋上からアーマースラスターを併用したグランデング・バウンド（高速落下攻撃）と時速８０ｋｍ／ｈから繰り出される飛び膝蹴りで蹴り飛ばし自慢のナイフで頸動脈を刺しては切り付けるを繰り返したにも関わらず全ての敵を仕留め切れていなかった故に数少ない生存者に被害に及んだ

ロドスとの接触時における自身に割り当てられた仕事のミスだと１０４は詫びの言葉を発したのだった

（・・・）

そんなやり取りを見ていたＡｃｅと少し陽気な男性オペレーターは気付かされる、一見奴らは悪魔かと思うような隙の無い研ぎ澄まされた剣刀のような時もあれば、こういった微かに人間臭さも多少は残されているのを知る事ができた

誰かの傷を知る者はその為に力を振るえると

１０４の謝罪内容がどういった意味合いがあるのか自体をＡｃｅ達が理解するのは暫し先になるのだが・・・

チェルノボーグを離れて数分、完全に霧を抜けた頃チーフはミョルニルアーマーの通信機よりも強力なペリカンの通信機を使用しインフィニティへコンタクトを取っていた、曰くペリカンの通信波長を変更すれば霧の内側と外側で遮られていても通信が可能になるとの旨であったがもう過ぎた事だ

「シエラ１１７よりインフィニティ。ブルーチームはロドス・アイランドの責任者２人と接触、協力体制協議の言質（げんち）を取得。これよりペリカンで直接ロドスへ向かい協議に向け情報収集を行う」

『・・・こちらインフィニティ艦載ＡＩローランド、ロドスとの協議と情報収集の件了解しました、インフィニティもペリカンの位置情報を元にロドスへ移動させます。何か必要な物は？』

「・・・ある程度こちらで収集した鉱石病（オリパシー）という不治の病に関するデータを送る。何かしらの成果があれば交渉の席で使えるかもしれない、解析班と医療チームの見解が知りたい」

マスターチーフから送信されたデータを粗方流し読みするローランド、テラの衛星軌道に引き寄せられたあたりからローランドも独自に調査をしてはいたがやはり半月間しっかり練り込まれたデータには僅かな差で敵わなかった

ＵＮＳＣトップクラスの性能を持つローランドは少しの悔しさとロドスの脆弱性を調べるよりもロドスの鉱石病に対する取り組みを重点的に調べていた事に感心する

１０４の記述・・・手の内を粗探しして亀裂に鑿（ノミ）を突き付け脅すのはもっての他だ、同じ知的生命体として最低限の助力ができるのであればそうするべきである

０５８の記述・・・その上でこちらも慈善事業で軍を運営している訳ではない、あくまでロドスとの共生をインフィニティのスリップスペースエンジンが修復されるまで続けていかなければならない

０８７の記述・・・幸いな事に中世のような世界ではなく現代社会に近しい技術と《オリジニウム》による技術とある程度発達した技術を複合した技術が存在するテラの人々がいた事に安堵する

１１７の記述・・・鉱石を使用した技術は後々ＵＮＳＣに恩恵を与えることになる、それらを習得するためにロドスとの技術交換を行い必要であればＵＮＳＣからの技術譲渡・戦力提供も必要と判断

特に鉱石病については入念な調査を行い成果を出せば交渉の材料として重宝するだろう

マスターチーフの計画にしては少し珍しい方針だがその調べと真相が正しければロドスとの協議を有利に進められるだろうと考えた

……

「・・・ドクター？」
「うん？」

ペリカン輸送機に静かに揺らされるロドスのオペレーター達の話し声の中にまた２人の声が混じりだす
少しばかり低いトーンの少女の細々した声、輸送機の僅かなエンジン音と風切り音で擦り切れてしまいそうな程

「ドクター、もう済んだ事を掘り返す気はありません、ですが１つだけ教えて下さい」
「・・・何を？」
「ＵＮＳＣ（スパルタンⅡ）を、受け入れた事です」

機体側面の風防から外観を眺めていたドクターは視線をアーミヤに移した

「・・・正直、自分も今になって思い返すと正しいのか正しくないのかわからない選択だった気がするよ、けど・・・なんて言うんだろうね・・・」

「彼[117]に、何故か心が引き寄せられてしまったのかもしれない」

「私は・・・この先ＵＮＳＣが介入することによって、世間をより一層騒がす事態が起こり得る気がして・・・」

どことなく寂しそうな少女の顔にドクターはマスクの下で僅かに目を細める

アーミヤはカーゴの床に視線を落とす、少し腰を浮かせて再度深く座席に座り直す

「でも、心のどこかで私は・・・・・・いえ、何でもありません」

そこでアーミヤは口を紡いだ

ドクターと同じだった

心のどこかであの無口（マスターチーフ）な男に引き込まれていた

先の戦いの中心に居た訳でもないのに

不思議と沸き上がった高揚感

背中を見ている内に、ぽっと湧いて出た信頼感

「カリスマ性――だろうな」

アーミヤの隣の座席に座っていたニアールが答えた、いつの間にそこに座っていたのだろうか

「・・・幼少の頃に何度も聞かされた寝物語だ、どこにでもいる平凡な少年が優秀な騎士になり国を救った英雄になる物語だ」

ニアールがぽつりぽつりと御伽噺（おとぎばなし）を始めた
曰く少年は赤茶色の丸刈り頭で
そばかすと隙っ歯が目立ち、笑窪（えくぼ）が印象的な少年
勉強も、才能も、平均的な普通の少年
騎士になりたかった訳でもない
国がそれ（普通）を許さなかった時代
気が付けば、いつの間にか、勝手に騎士になっていた

騎士教官が言う「お前達は、特別なのだ」と
騎士見習いとして宮殿近衛兵でさえ裸足で逃げ出す訓練を
騎士見習いとして聖堂神官でさえ首を傾げる難解な座学を
訓練で見習いが何人も死んだ
座学で見習いが何人も狂った
部屋で見習いが何人も自殺した
逃げ出した見習いが何人も処刑された
雷槌の鎧を与えられる為に魔術師達に身体を魔術で強化された
雷槌の鎧を与えられた見習いは騎士となった
そんな名誉ある騎士達は8年かけて育成された秘密裏の存在だった
恋沙汰する若者と、家の手伝いをする若者と同じ歳の騎士達
だがそんな彼に与えられたのは国に反する者達の暗殺
影に潜み命を刈り取る、死より深い闇の使者達
だが程なくして戦争が始まった
果敢に戦い、仲間を失い、窮地に立たされ、敵を葬る
戦争に勝利した我が国は国土も人民も疲弊していた
嘗て少年だった彼は英雄として語られた

彼は「私は騎士だ、やるべきことをしたまでだ」と言った
「私は、英雄ではない、これまでも、そして、これからも」
《伝説の剣を携えた勇者》や《誰もがひれ伏す大賢者》や《街ひとつを地図から消せる魔法使い》にすら成し得なかった英雄の称号
英雄の称号を得た、ごく普通の国に従順な騎士
しかし彼を知る者達(騎士)は皆こう語る
「彼は良くも悪くも普通だった、だが、誰にも負けない強さがあった」
「幸運の女神様が嫉妬してしまう程の運の良さと・・・決して折れず何度でも立ち向かう勇気が、彼にはあった」と――

「以上だ、あの男がそれに当てはまるかは、知り得ないがな」[117]

ニアールの知る普通の騎士の英雄譚
その騎士は傲ることなくただひたすらに戦う使命に従順であったこと

「英雄になる男は背中で語る――そういうものだ」

不思議な話だ、とドクターとアーミヤは聞き入った

「カリスマ、かぁ」

「カリスマ、ですか」

２人の声が重なるといつの間にか纏わりついていた不安は払拭された気分になっていた

（意外な所で単純なのだな・・・）

ニアールはそんな２人を致し方無いかのように見つめていた

「話は済んだか？」

そこで話が終わるのを待っていたかのように１１７が話し掛けてきた

待ちわびたように感じてしまうがその言葉に棘は一切感じられなかった、純粋な意味

で良いタイミングを見ていたのだろう

「はい、問題ありません」

ドクターがそう返す、彼らにはこの飛行装置の中でロドスについて話しておく約束をしていた、決して忘れていたわけではない

「簡潔にで構わない」

「わかりました・・・改めて、私はアーミヤと言います、こちらはドクターです」

「先程までのあらましはご存知かと思いますので、私はロドスのＣＥＯを務めています」

「正式な名称は《ロドス・アイランド製薬》製薬会社と名を売っていますが、詳しくは後述します、私達ロドスは致死率１００％の治療法が存在しない感染症――鉱石病（オリパシー）の治療と研究を行っています」

アーミヤは一度息を整え再度語りだす

「感染者の保護や治療も行ってますが様々な地域や種族からもロドスにやって来る感染者も数多くおりロドスの局員として所属しているのです」

アーミヤはここまで言うと周囲の座席に座ったオペレーター達を見る

「・・・全員が鉱石病なのか?」

マスターチーフが合間を割って入る

「いいえ、感染してなくとも私達ロドスに手を貸してくれる人々はいます・・・そこにいるドゥリンさん・・・レンジャーさん・・・アンセルさんも非感染者です」

マスターチーフは小さく頷く、「話を続けてくれ」という意味だろう

「鉱石病感染者の人々は、医学的な社会からの迫害や蔑視を行うがあまり感染者と非感染者の衝突も多くこのテラで社会問題になっています」

「私達ロドスは、そんな不安や、やり場の無い怒りに染まった感染者たちの鎮圧なども業

務の1つとして承っています」
「時には制圧や強襲などの強行手段も辞さないケースも最近は多々ありますが・・・」
「誇るべきか、恥じるべきか・・・先も申し上げましたがロドスは製薬会社ではありますが非常に優秀かつ熟練の戦闘員なども募集してます、感染者絡みの事案が発生した際には適切に編成したオペレーター達を出動させ感染者の捕縛も行います」
「ですが無償での治療は行っていません、ここにいる戦闘オペレーターの皆さんからは戦う事で治療の対価として受け取っています」
「・・・」

マスターチーフは微動だにせず依然として黙り込んでいる
全てを遮断するヘルメットのバイザーの奥の彼は一体何を考えているのか一切が不明だったがヘルメットが僅かに動くと彼から言葉が出た

「なら、子供であっても貧困なら戦え、と・・・?」

彼がそれを口にした瞬間場の空気が文字通り一変する
凍てつく真夜中の凍土に投げ出されたような寒気は確かにマスターチーフから溢れ

ているのがわかった
緊迫した空気をモロに浴びたアーミヤは悟る
彼――いや、彼等に対して子供を戦地に送り込むというのは決して触れてはいけないキーワードだったのだと
その実、０８７は奥で腕を組み彼を止める事なく壁に背を預けている

（回答を誤れば――殺される・・・！）

場に圧倒され固唾を飲む――タルラを単独で撤退にまで追い込み直属の部下を殲滅した狂ったかのような戦闘力を持つ戦略兵器が目の前で怒りを露にする
だがアーミヤもここで折れる訳にはいかなかった、正直この場で「二度と子供を戦地に行かせず無償での治療を約束する」――そう言ってしまいそうな程、彼の拳が悲鳴をあげてしまう程、『めりめり・・・』と聞こえるくらい強く握られていた

「確かに・・・残酷かもしれません」
「・・・」
「ですがこれは私達（テラ人）の領分です、私達なりに、生き長らえる為の、《死》への反抗でも

あります」
「・・・もしこのテラもあなた達ＵＮＳＣの植民地であったなら話は別です・・・」
「教えてください、なぜ・・・どうしてそこまで子供に固執するんですか？」
「・・・こちらの話だ、関係はない」
「そう、関係はないんです」
「・・・」
「・・・いつか、時が来た際でも構いません、ロドスに心を許した時にでも話して下さい、私にだって子供を送り出す事に対する呵責も葛藤もありますから・・・」
「時代を紡いだ大人も、これからを担う子供も、糾弾されてる感染者も、感染に怯える非感染者も、みんな平等な命なんです、死んで良い人なんていません」
「私は、そう思って今まで立ち向かって、きました・・・あなたは、違いますか？」
「・・・」
「それに、何も全員が戦闘要員になっている訳でもありません、ロドスは鉱石病の治療を施し、治療を求めて来る人達もロドスに協力してくれてるんです、戦闘オペレーターとして1年実績を積めば後方支援にも転属ができるようにもしています、これはお互いが・・・双方が納得できる方法の1つなんです」
「・・・分かって、頂けましたか？」

「・・・理解はした」

チーフはバイザーに隠れた目を一度閉じる

この星の事情は確かにこちらには関係ない、しかし静観することもできなかった、本来であればこの事項はＵＮＳＣ上層部が判断を下すケースであった

かといって不必要に介入するわけにもいかない、いくら作戦参謀に意見進言できる最先任上級兵曹長という立場(階級)であっても両者共々同意した契約でもあるロドスとオペレーターのｗｉｎ　ｗｉｎな関係性

彼等スパルタンⅡにとって戦地に赴く子供は過去の自分達と嫌でも重ねて見えてしまう、昔を彷彿とさせてしまうからだ

マスターチーフは自分達がクローンと入れ替えられた翌朝の《メンデス最先任上級兵曹長》に意見していた既に死んでいるスパルタンⅡ候補生の言葉を思い返した

『僕たちが戦えば、もう、誰も悲しまなくてすむの？』

子供が戦い、死ぬのは自分達(スパルタンⅡ)で最後かと思っていた

そもそも人類とルーツが異なるこの星(テラ)の住民と相反するのはチェルノボーグに投げ

出された時から分かっていた筈だ
このテラで必死に生きようとする人々からすればそれこそスパルタンⅡの意見なぞ余計なお世話かもしれない
彼らの因果に、余所者である我々(人類)が押し入ってしまって良いのだろうか？
マスターチーフはそこまで考えた後、拳から力を抜き一歩下がった
・・・彼女(アーミヤ)の覚悟は見せて貰った
ならば、深くまでは関与はしないが、せめて同じ部隊として派遣される際は、1人でも多く命を護れるように我々も尽くそう、と

パイロットから通信が入る
大きな箱のような物が見えてきた

「あれが・・・ロドスです」

悪魔を説き伏せたアーミヤは、少し誇らしげだった――

― プロファイル ―

【組織】ユナイテッド（U）・ネーションズ（N）・スペース（S）・コマンドー（C）

・銀河系と呼ばれる遥か彼方の星系から《スリップスペースエンジン（ショウ・フジカワ光速機関）》という光が２年と１ヶ月かけて進む距離を２４時間で移動することができる特殊な出力機関の異常によりテラへとやって来た

・極めて高い技術を保有し鉱石を由来とした技術は一切存在しない模様、一部ではあるがロドスへの情報関連と技術の譲渡が約束されている

・その技術の対価としてそのスリップスペースエンジンの修理に必要な資材の提供を望んでいる

この提案が飲めなければＵＮＳＣはレユニオンにすら手を貸す事も厭わないというのが彼らの条件の１つだそうだ

・旗艦インフィニティ級戦艦を始めとした強力な火器を搭載したこれがスパルタンⅡ

の組織拠点となる
・その戦闘能力は未だに謎が多くインフィニティはロドス上空にて追従し、インフィニティを母艦としたストライデント級重フリゲート艦を１０隻は半数がテラの衛星軌道で待機している

【所有兵器】
【インフィニティ級戦艦】
・ＵＮＳＣの総旗艦
全長５，６９４．２ｍ
全幅８３３．３ｍ
全高１，０４１．２ｍ
・装甲　チタニウム―Ａ３戦闘用装甲
インフィニティの主装甲、５０ｃｍの厚さでロドス・アイランドの特殊外壁の装甲厚に匹敵するそれをインフィニティは最も装甲の薄い場所で４ｍ９０ｃｍ配分されており艦正面は倍以上の装甲が施されるとされ決戦要塞に相応しい防御力を発揮する
・我々ロドスが聞き得た情報はこれのみであり今後に小出しにされるとの事

Ｎｅｗ！　第二資料

最新情報が追記された、インフィニティにはＷＡＲ　ＺＯＮＥと呼ばれる仮想戦闘訓練システムがあるとラスキー大佐から伝えられた。

このＷＡＲ　ＺＯＮＥはスパルタン部隊だけでなく生身の海兵隊員でも使用できるとの事でブルーチームとの更なる連携力の向上と扱いに専門的な知識が必要な物を気軽に扱えるようになると合同訓練を打診してきた為それを肖らせてもらう事になった。

【ケルシー　個人備考】

正直なところＵＮＳＣに喧嘩を売ることは破滅願望かあるに等しいと考えられる、はっきり言うがやつらの持ち得る技術はテラとは一線を越えた異質かつ異常と言える。

アーミヤ達を連れ帰ったあの飛行装置もＵＮＳＣの代表との協議の際に百機以上、その他装甲兵器もあのバカデカイ船に収容しているとの事だ、全くもってふざけているのかと言いたくなる程の軍事力だ、あの船だけでも文字通り惑星テラに正面切って喧嘩を吹っ掛け勝利するのも容易いだろう

何せその気になれば我々では一切手出しできない衛星軌道なる遥か上空からも攻撃が可能だと堂々と言われたからだ。

２５９００発もの大型長距離誘導兵器を持ち、７０ｍｍ弾を１秒間で１１発も発射できる２問式機関砲を８３０基、１万７０００人もの兵員兼乗員がいる、恐らくだがまだ隠し球を持っている可能性がある為要調査が必要だ、以上。

【新規雇用人員について】アーミヤより。

・ＵＮＳＣからスパルタンⅡをロドスの戦闘オペレーターとして一時的に雇用しました。

基本的に４人１組のチームで４つに別け様々な部隊への編成にも対応した戦場のエキスパートです。

ＵＮＳＣの意向により望むなら一部の戦闘教導と技術譲渡に当たって車両の操縦法や扱い方の教導も行うそうなので希望者はその旨を人事部に通達し、発行された書類に

サインし提出すること。
　新入り扱いになりますが彼らは仮にも正規軍且つ軍内に於いて最高戦力として扱われる方達です、くれぐれも失礼の無いように心がけてください。（本人の職業教導を優先するように！　）

【コードネーム】Ｓ（シエラ）―０５８

【本名】リンダ・プラヴディン
【ボイス】朴璐美（不明の為似合いそうなイメージ）たぶん折笠　富美子さんじゃないかな～って思いますが
【性別】女
【職業】対装甲狙撃手
【戦闘経験】不明（１５年以上と推定）
【出身地】地球軌道コロニー「ヴェレント」
【誕生日】３月１９日

【種族】人類
【身長】２１３ｃｍ
【体重】機密
【専門】スナイパー
【鉱石病感染状況】メディカルチェックの結果、非感染者に認定。

能力測定
【物理強度】優秀
【戦闘機動】優秀
【生理的体制】卓越
【戦闘立案】標準
【戦闘技術】卓越
【アーツ適正】皆無
【特性】①同マス全ての敵に跳弾ダメージを与える（１体命中する度に威力―１５％）
②４発毎にリロードが発生する
③飛行型を最優先とし、以降は防御力が高いエネミーを優先する
④一定時間攻撃を受けずにいるとエネルギーシールドがリチャージされる

【素質】「カウンタースナイプ」敵の狙撃を受けた際３０％の確率で回避する、回避成功時５０％の確率で射ち返し攻撃力２００％のダメージを与える
「ゴールデン・アイ」友軍にスポッティング情報を提供し味方狙撃オペレーターの攻撃範囲を前方に＋１マス与える
「ペネトレーション」ありとあらゆる防御力とバリア・シールド、回避率を無視しダメージを攻撃力数値をそのまま与える

※例：ジェシカ

□□□□　　□□□□□
■□□□　↓　■□□□□
□□□□　　□□□□□

※例：ロサ

□□　　□□□
□□□　　□□□□
■□□□　↓　■□□□□
□□□　　□□□□
□□　　□□□

【攻撃範囲】

□□□□□
□□□□□□□
□□□□□□□□□
□■□□□□□□□□
□□□□□□□□□□
□□□□□□□
□□□□□□
□□□□□

【攻撃速度】普通
【出撃コスト】３２
【ＨＰ】３８００
【攻撃力】９３０（全ての防御力を無視する）
【攻撃方法】ＳＲＳ―９９　Ｓ５　ＡＭＮＦによる狙撃
【防御力】７００
【術耐性】０（エネルギーシールド残存中耐性１５０）
【スキル】
Ｓ１　ＳＰ３「ノルンファング」（攻撃回復）（自動発動）
マガジン最後の１発が榴弾になり同マス全ての敵に対する跳弾ダメージが防御力を

無視した攻撃力１００％を与える
Ｓ２　ＳＰ２４「ブーストスナイプ」（攻撃回復）（手動発動）
攻撃速度が「かなり速い」に変化し３マガジン分（１２発）を高速連射する、絶え間なく全弾射ち尽くした際にエネミーが健在の場合ＳＰが半分リチャージされる
Ｓ３　ＳＰ８０「神の眼」（自動回復）（自動発動）
戦闘エリア全域に攻撃範囲を広げ、攻撃力が２３０％になる（退場まで効果継続）

個人履歴　第一資料
ＵＮＳＣに所属するＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱであり別名《人類史上最強のスナイパー》
使用アーマーは《アーガス（守り手）》
非常に優れた狙撃能力を持ち数キロメートル先からの精密射撃を意図も簡単に行う
過去に右腕のクローニング移植手術を受け数時間以内に病院から逃走、２４時間以内に部隊に復帰し宙吊りのまま右腕のみで狙撃を行い数ｋｍ先の不規則に移動するコヴナント軍航空機目標にフルマーク（全弾命中）を叩き出すという狙撃に対する執念を見せる
マスターチーフとフレデリックからは狙撃の腕は《芸術的》と賞されており寡黙なローンウルフ（一匹狼）である
ラテラーノ人のアンブリエルは彼女を親しみと敬意から《姉貴》と呼んでおり本人（リンダ）も

これといって気にしてはいないようだ

Ｎｅｗ！ 第二資料

スパルタンⅡがテラに赴いてから概ね２ヶ月程が経過していた、そこでちょっとした座談会を開いた。

最初こそはあまり関心を寄せずにいたが「突っ込んだ事は聞かない」という約束の元、次第に口を開くようになり彼女の相棒である「ノルンファング」について少し語った

曰くＭ２３２ １４．５×１１４ｍｍ ＡＰＦＳＤＳ弾と同型徹甲榴弾を使用する全長１６１．３ｃｍ、重量１５．６ｋｇ、フル装填されたマガジンは４．５ｋｇの重量で合計２０ｋｇを越えるセミオート式の大型アンチマテリアルライフル。

ロドスのオペレーター達が是非とも聞きたいのは「何故ラテラーノ人でもないのにそんなバカデカイ銃を、それも数キロもの射程がある物を扱う事ができるのか」だ。

それを聞いたリンダは僅かに首を傾げた、彼らＵＮＳＣの大半の銃はニトロセルロースとニトログアニジンを主としたダブルベースの無煙火薬を雷管で発破させて打ち出すテラで良く知られる銃とは違ったのだ。

大昔には黒色火薬という硫黄や硝酸カリウムなどを利用した火薬で使用していた時期もあったそうだが歴史として古いだけで地球圏の人類はニトロセルロース、ニトログ

リセリン、ニトログアニジンを使用した期間の方が長い、と。

１つのニトロを使用した場合はシングルベース、２つのニトロを使用した場合はダブルベース、３つのニトロを使用した場合はトリプルベース・・・そう呼ぶらしい。

テラでの銃についてはアンブリエルがある程度解説したがそれらは当然ラテラーノ人の核心のような物だ、易々と話してはいけないだろう内容だ、もちろんリンダと二人きりの時に耳打ちするように伝えた。

しかしリンダ自身からしても銃としての技術は地球人類独自で確立されている為気にする程でも無いらしく単なる意見交換の小話程度に終わった。

【リンダ０５８の印】

彼女が愛用するＳＲＳ９９（スナイパーライフルシステムシリーズ）　Ｓ８　Ａ（アンチマテリアル）Ｍ（ノルンファング）Ｎ　Ｆ

様々な状況に応じて徹甲榴弾に加えＡＰＦＳＤＳ弾も所持している、この弾丸は薬莢のボルトネックケースよりも小口径であり弾丸に風の抵抗で分離する装弾筒（サボット）がガスの圧力を受け推進力を得る仕組みだ、弾丸の質量が同じでも弾丸が細長くなるほど風の抵抗を受けずに飛翔するため貫徹距離は延びるが着弾の衝撃に耐えられず折れたり飛翔体の推進を安定化させるための安定翼も横風の影響を受けやすくなるため何でもかんでも細長くすれば良い訳ではない。

徹甲榴弾はかなりの特別製なのか薬莢は黄金のように磨かれ輝いている、弾丸の先端は遅延信管が取り付けられた独特な形状をしている。

この高性能な炸薬が詰め込まれた大型の弾丸なら1発でパンケーキ100枚分の値段なのも納得だ。

・・・研究の為に何発か貰えないだろうか？

【コードネーム】S（シエラ）―087

【本名】ケリー・シャドック
【ボイス】本田　貴子
【性別】女
【職業】特殊工作兵
【戦闘経験】不明（15年以上と推定）
【出身地】植民地惑星「インバー」
【誕生日】9月21日

【種族】人類
【身長】２１１ｃｍ
【体重】機密
【専門】スカウト
【鉱石病感染状況】メディカルチェックの結果、非感染者に認定。

能力測定
【物理強度】優秀
【戦闘機動】卓越
【生理的体制】優秀
【戦闘立案】標準
【戦闘技術】卓越
【アーツ適正】皆無
【ブロック】２
【特性】①同マスの敵にダメージを与える
②５発毎にリロードが発生する
③１５％の確率で敵の攻撃を回避する

④一定時間攻撃を受けずにいるとエネルギーシールドがリチャージされる

⑤「フルメタルファイア」（S1のみ）

フルメタルジャケット弾を装填する、相手の防御力が高いほど貫通力が高まる（相手の防御力の数値に対し攻撃力×０．６５を算出し、その数値を攻撃力に加算する）

【素質】「ペレグリン・チャージ」攻撃範囲内に敵が1体居る場合のみ攻撃力が１７５％に上昇する

「攻勢継続」再配置が極めて速く、再配置時のコスト上昇が上がらない（再配置：８秒）

「インファイト」接近マス配置時敵をブロックしている間に攻撃速度が1．７％上昇する

【Ｍ４５攻撃範囲】（高台、前線に配置可能）

□□
□□□
■□□□
□□□

□□
【Ｍ２０攻撃範囲】（高台、前線に配置可能）
□□
□□□□
□□□□□
■□□□□
□□□□□
□□□□
□□
【攻撃速度】やや速い
【出撃コスト】２７
【ＨＰ】４０００
【攻撃力】９００（Ｍ４５Ｄ）・７５０（１５０×５）（Ｍ２０　ＳＭＧ）
【攻撃方法】Ｍ４５Ｄ　ショットガン・Ｍ２０サブマシンガン（Ｓ１時のみ）
【防御力】７５０
【術耐性】０（エネルギーシールド残存中耐性３００）

【スキル】
Ｓ１　ＳＰ―「ガンランナー」（攻撃回復）（自動発動）
Ｍ４５Ｄショットガンから Ｍ２０サブマシンガンに持ち替え戦闘を行う。通常攻撃時５回毎に、攻撃力が２５０％まで上昇（通常攻撃が５連射に変化）
※Ｓ１設定時、特性①及び②は除外され、専用特性「フルメタルファイア」を得る
Ｓ２　ＳＰ１６「ブレイズ・オブ・グローリー」（自動回復）（手動発動）
周囲５マス内の敵全員を攻撃方向にかなりの力で突き飛ばし、攻撃力の３００％の物理ダメージを与える
Ｓ３　ＳＰ４５「ステルスクローク」（自動回復）（手動発動）
姿を２０秒間消し攻撃力＋１５０％、スキル発動中回避率１００％

個人履歴　第一資料
ＵＮＳＣに所属するＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱであり別名《ウサギ》
使用アーマーは《エルメス》（快速）
優れた機動力を発揮するインファイター
スパルタンⅡ内で最も足が速くスラスターを併用すれば１００ｋｍ／ｈを維持したまま数時間疾走可能

コヴナント大戦時ケリー０８７がトンネル内に敵を誘き寄せ、同行していたスパルタンⅢが敵の猛攻により予定より早くトンネルに設置した爆薬を発破せざる得なくなり発破するもトンネル崩壊よりも早く脱出しスパルタンⅢに「あなたの判断は正しいわ。さぁ、残りの敵を蹴散らしましょう。」と、さも平然としていた

Ｍ４５Ｄショットガンと Ｍ２０サブマシンガンを装備している

候補生時代は髪を青色に染めていた時期があるそうだ

Ｎｅｗ！　第二資料

彼女を語る点で決して書かせないのが走力だ、ミョルニルアーマーを身に付けていれば走り出しから１２歩、アーマースラスターを併用すれば３歩で彼女のトップスピードである時速１０１ｋｍ／ｈに到達する。

アーマーを身に付けずとしても５０ｋｍ／ｈに到達するこの速度は一言で言えばクランタやループスなど機動力に自信がある者からは少々劣る程だ、しかしそれでもロドス艦内での鬼ごっこでケリーは一度として捕まったことがないのである。

それ足らしめるのは正に反射神経と動体視力だ、ただ走るだけにあらず、敵の位置、自身の位置、速力、周囲の環境や足元の状態などの情報を彼女は走りながら瞬間的に収集しそれを元に走り抜ける、そのバイタリティーは惑星リーチという彼らスパルタンⅡが

訓練してきた惑星がその素となっている。
ケリーは惑星リーチの標高９０００ｍ級の山を最低限の軽装で走り抜ける、往復を僅か数日でだ、山中の薄雪のクレバスや雪崩、天候変化による視界の悪化すらも物ともしない。
それを可能にしているのが集中力による周囲の観察眼と瞬時に最適かつ安全なルートを導き出す彼女の真骨頂である。

【ケリー０８７の印】
２０ゲージのショットガンシェル
弾種はバックショットと呼ばれる小さな丸弾が２０個収められた対人弾だが幅広いターゲットに対応しており命中時の衝撃力は凄まじい
赤色のケーシングが施されておりまるで血の色を彷彿とさせる

【コードネーム】Ｓ（シエラ）―１０４

【本名】フレデリック・エルズワース
【ボイス】土田　大
【性別】男
【職業】超重壁手
【戦闘経験】不明（１５年以上と推定）
【出身地】植民地惑星「バラスト」
【誕生日】４月３日
【種族】人類
【身長】２２６ｃｍ
【体重】アーマー合わせて７００ｋｇ強
【専門】ＣＱＢ・戦闘指揮
【鉱石病感染状況】メディカルチェックの結果、非感染者に認定。

能力測定
【物理強度】卓越
【戦闘機動】卓越
【生理的体制】優秀

【戦闘立案】卓越
【戦闘技術】卓越
【アーツ適正】皆無
【ブロック】３
【特性】①ブロックする数が増える程防御力が上昇する（２体目＋２０％　３体目＋４０％）
②一定時間攻撃を受けずにいるとエネルギーシールドがリチャージされる
【素質】「我流格闘術」ロードローラー等の複数ブロックが必要なエネミーのブロック数を全て１としてブロックする
「集中攻撃」Ｓ―１０４の後方に配置したオペレーターは攻撃力が１５０％付与される
「遠慮すんなよ」シロアリ系統のエネミーをブロック可能
「装甲・傾斜流し」Ｓ―１０４のＨＰに対して一定の割合の威力を持つエネミーから受けるダメージを６０％カットする

【攻撃範囲】
■□□□

【攻撃速度】やや速い
【出撃コスト】３８
【ＨＰ】６５００
【攻撃力】７９０
【攻撃方法】Ｍ６Ｈ２　５０口径マグナムピストル
【防御力】１６００（チタニウム―Ａ３の廃材を利用した約９００ｋｇの重盾）
【術耐性】０（エネルギーシールド残存中耐性３００）
【スキル】
Ｓ１　ＳＰ６０「装甲展開」（自動回復）（手動発動）
油圧駆動によりチタニウム―Ａ３戦闘用装甲製シールドを変形させ地面にアンカーを打ち付ける、攻撃をしなくなるが最大７体までブロックが可能になり防御力が３５０％上昇する（退場するまで効果継続、再度スキルを使用すると解除。なお特性の防御力上昇は３体目で上限とする）
Ｓ２　ＳＰ５０「エンド・ゲーム」（自動回復）（手動発動）
スパルタンレーザーによる攻撃を行う、防御力を無視した攻撃力７００％の術ダメージを直線上の全ての敵に４回与える、発射まで２秒弱のチャージと３秒の冷却が必要になる

Ｓ３　ＳＰ９５「久々に暴れるか！」（攻撃回復）（手動発動）
本気を出す、シールドを正面に投げ捨て正面ラインの敵全員に攻撃力の３００％の物理ダメージを与え戦闘スタイルをナイフ二刀流に変更する、攻撃速度は「かなり速い２連続攻撃」になり回避率２０％付与、ブロックは２が上限となる、ブロック数に応じて攻撃力が１体あたり＋２００％上昇する（盾は作戦終了後に拾いに行っているそうだ）

個人履歴
ＵＮＳＣに所属するＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱ
使用アーマーは《セン[百人隊長]チュリオン》
近接格闘戦に於いてはＳ―０５８　Ｓ―０８７　Ｓ―１１７の３名が同時に掛かろうと容易く返り討ちにしてしまえる実力を持つ、しかしＳ―１０４は非常に「目立つのを嫌う」性格な為か本気を出したことはコヴナント大戦中でも数回しかなく階級も大尉と部隊を指揮をすべきだがブルーチームの実権をマスターチーフに投げ捨てている
そのアーマーのヘルメットとインナースーツの靴底を抜いた彼本来の２２６ｃｍという巨体からは信じられない程身軽で機動戦も得意である
ブルーチーム曰く「ヤツ[104]が本気になれば間違いなくスパルタンⅡで全ての能力に於いてＮｏ．１の実力がある」らしいが本人は笑いながら否定している

シールド以外の装備はナイフ2本、レーザーキャノン、艦載機用の２０ｍｍガトリングガンを装備するつもりだったらしいが取り回しが悪く、弾丸の補充が困難とロドスでの作戦と相性が悪いと決断した結果左手に重盾を構えながら右手にＭ６Ｈ２マグナムピストルを装備している

スパルタンⅡを２０名規模の指揮を取る事はもちろん一般的な海兵隊一個連隊の指揮も可能でありスパルタンⅡの中ではかなり高いコミュニケーション能力も備える

大型のナイフ2本を携えておりタイマン戦における戦闘力はＵＮＳＣ――いや、人類随一と言える

親しい者からは《フレッド》と呼ばれているらしい。

Ｎｅｗ！　第二資料

彼がどのような人物か――それを知る者は意外な事に多い、あんなスパルタンⅡの仲間と同じどこか協調性が足りないように見えて彼は意外と話の解る人で、どこか飄々としていて、掴み所が無いようで、接してみれば簡単に掴める、そんな男。

人を観る事に優れた者達は、その上で「何故自分を偽り生きているのか？」と口を溢す、掴み所が無いのを持ち前の前向きさで補っている。

悪い意味ではないそうだ、とどのつまり彼は自身が目立つのを嫌がる、これの一言に尽きる。

戦事(いくさごと)に関してありとあらゆる面で極めて高い能力があるスパルタンⅡ。その実力はスパルタンⅡ全員が何かしらに極限まで特化した技能がある中でそれらを差し置いて全てのスパルタンⅡのトップに立てるとマスターチーフに言われる程に完成された存在だ。

彼はそれ故に事ある毎に軍(UNSC)上層部や海軍情報局(ONI)から自身に白羽の矢が立てられるのをほとほと面倒と捉えておりそれを回避する為に彼が取った行動が、全ての技能試験を2番手になるように手加減するといった信じがたい事実だった。

だがどれだけ加減しようとも徒手空拳含めたあらゆる近接武器を使用した格闘技能だけは手を抜こうとも身体が勝手に反応しトップに君臨している。

一癖二癖もあるオペレーター達からの当たりも悪くはなくガヴィルやハニーハント、ブレイズ、マウンテンのような近接戦のスペシャリスト達を同時に格闘訓練を対等に行う。

暴れ熊耳娘(ズィマー)からは「悪(わる)イヤツじゃねーのは分かってんだよ、けど気に入らねぇ！御澄(おす)ましツラ(顔)でアタシをガキ扱いだ！」と怨嗟の火を燃やさせ。

サリアからは「久方ぶりに血が沸き、肉が踊る。極限まで脳をフル回転させながら戦った、意思もまるで鋼鉄のように硬い」と、鍛練の好敵手として目を付けられ。

将軍ことヘラグは「ナイフの太刀筋に一切迷いが無い、逆手持ちでの袈裟斬りと見せ

かけて順手持ちに変え目にも止まらぬ連続突きを急所に放つ。体術も恐ろしく速いにも関わらず直に受ければ大型車両をぶつけられたかのように凄まじい衝撃に襲われる、身のこなしも相まって常軌を逸脱する程高いレベルにまで昇華されている」と、評価され。

グレイディーアからは「本気でぶつかり合えば、どちらも無事では済まないでしょう。——人間の極致とも言えますわ。」と答えられ。

ガヴィルは「アイツ(フレデリック)とヤッ(戦って)てみな、今までの経験と知識がまるで役に立たなくて飛ぶぞ（咄嗟の判断力な意味で）」とイマイチよくわからない言葉を連ねられた。

【フレデリック１０４の印】

テラでは見たこともない希少な鉱石を使用したチタニウム—Ａ３製ナイフ用の砥石、かなり良質な砥石であり彼が研ぎを済ませてその場から離れると物好きなオペレーター達がこぞって研ぎクズを集めに来る

本人(フレデリック)はそれを面白そうに隠れ見ているが近い内に小さめな欠片くらいは研究用に提供しようか考えている

【コードネーム】Ｓ（シエラ）―１１７

【本名】ジョン

【ボイス】谷　昌樹　ｏｒ　小山　力也

【性別】男

【職業】スーパーソルジャー（前衛・先鋒・特殊）

【戦闘経験】不明（１５年以上と推定）

【出身地】植民地惑星「エリダヌスⅡ」

【誕生日】３月７日

【種族】人類

【身長】２１８ｃｍ

【体重】アーマー合わせて７００ｋｇ弱

【専門】戦闘・兵器運用

【鉱石病感染状況】メディカルチェックの結果、非感染者に認定。

能力測定

【物理強度】卓越

【戦闘機動】優秀

【生理的体制】卓越

【戦闘立案】優秀

【戦闘技術】卓越

【アーツ適正】皆無

【運】驚愕

【ブロック】２

【特性】①各種兵器を要請できる

②高台、前線に配置可能

③一定時間攻撃を受けずにいるとエネルギーシールドがリチャージされる

【素質】「英雄」戦闘エリア全ての味方オペレーターの全ステータスを１２５％上昇させる

「不屈の勇気」体力が０になっても退場せず２０秒後に復活する、その間被攻撃判定とブロック判定は消失しマスの判定は残る、それまでの貯めたＳＰも維持される

「豪運」ありとあらゆる攻撃に対する回避率６５％付与、エネミーのリジェネ

レーション時・無敵時以外のエネミー回避率―７０％
「モーショントラッカー」配置場所に関係無く攻撃範囲内であれば拠点に近い敵を優先し攻撃する

【攻撃範囲】（高台、前線に配置可能）
□□□
□□□□□□
□■□□□□□
□□□□□□
□□□
【攻撃速度】普通
【出撃コスト】４０
【ＨＰ】５９００
【攻撃力】９００（３００×３）
【攻撃方法】ＢＲ８５ＨＢバトルライフルによる３点バースト射撃
【防御力】６５０
【術耐性】０（エネルギーシールド残存中耐性２５０）

【スキル】

Ｓ１　ＳＰ５０「ウィップ・ラッシュ」（攻撃回復）（手動発動）

ＡＲＣ―９２０レールガンによる攻撃を行う、攻撃力　＋１０００％　攻撃速度は「かなり遅い」に変化し直線上にいる全ての敵に５発発射し物理ダメージを与える（チャージ１秒　リロード２．５秒）

Ｓ２　ＳＰ１１０「切り裂き蟷螂」（攻撃回復）（自動発動）

ＨＲＵＮＴＩＮＧ／ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ　Ｍａｒｋ　Ⅸ　マンティスを空いている２×２マスにランダムで要請し、搭乗する

性能はマスターチーフのステータスを参照しＨＰ５００％　防御力４００％　攻撃力４００％加算される

Ｍ６５５　２０ｍｍ機関銃とＭ５９２０　３５ｍｍミサイルランチャーの攻撃を行う、配置マスに接触した敵に対して攻撃力５００％の踏みつけを行う

耐久力が尽きるとマスターチーフは元いたマスに帰還する

Ｓ３　ＳＰ１６０「鋼鉄の蠍」（自動回復）（自動発動）

Ｍ８２０スコーピオン戦車を要請し、搭乗する

要請すると空いている6×4マスにランダムで落下し下にいる敵に攻撃力２０００％の追突ダメージを与える
（マスに空きがなければ要請できないがオペレーターの配置場所を上手く使う事により意図的に落下場所を絞る事が可能）
※スコーピオンが落下した高台・配置不可位置は潰れて通り道になってしまうので注意
性能はマスターチーフのステータスを参照しＨＰ１５００％　防御力１５００％
攻撃力１４００％加算される、ブロック可能数５
Ｍ９９０電熱化学式１５０ｍｍ滑腔砲に装填された多目的高性能榴弾で砲撃を行い攻撃マスの周囲８マス以内にいる敵にもダメージを与える《装填時間３．５秒》
耐久力が尽きるとマスターチーフは元いたマスに帰還する
極めて高いヘイト性があり攻撃を受ける面によって耐久力減少に差がある、車体正面が最も装甲値が高く全ての攻撃に対し複合装甲（爆発反応装甲）とＥＲＡにより７０％ダメージカットが適応される、車体左右は３０％のカットが適応され後方と上空からの攻撃に対してはダメージカットが適応されない

個人履歴

ＵＮＳＣに所属するＳＰＡＲＴＡＮ―Ⅱであり５０年に渡り続いたコヴナント大戦を終結させた第一人者

使用アーマーはＭｋ―Ⅵ

コヴナント軍からは「緑の悪魔」、人類軍からは「英雄」と評されておりその戦いぶりは正に一騎当千

様々な状況に対処が可能で各種兵器や火器の扱いに長けるがスパルタンⅡ内での戦闘評価は高水準値とされている。

彼には常に《幸運》が味方に付いておりどのような危機的状況も運と諦めない心で乗り越えてきた。

コヴナント大戦が終結し金がかかるスパルタンⅡはＵＮＳＣ上層部と海軍情報局からは破棄が行われようとしているがＵＮＳＣ海軍太陽系防衛艦隊総司令官である《テレンス・フッド卿》は親元から無理矢理引き離され人体改造と洗脳を受け造り上げられたスパルタンⅡ達を「ＵＮＳＣとＯＮＩは彼らの人生を奪ってしまった、せめて先人である大人として行く末を見届けたい」と、まるでスパルタンⅡ達を我が子のように擁護しているため現在もスパルタンⅡはＵＮＳＣ最強の地上戦力として温存されている。

Ｎｅｗ！　第二資料

マスターチーフ・・正式な階級はＭＣＰＯ、マスターチーフペティーオフィサー、極東の言葉で言えば最先任上級兵曹長に該当する。
その階級は戦場で叩き上げられた百戦錬磨の精鋭にのみ送られ、最大規模時のＵＮＳＣ内でも野球ができる程度の人数しか存在しない称号（階級）である。
マスターチーフ含むスパルタンⅡを教導したフランクリン・メンデス上級曹長も曾てはスパルタンⅠプロジェクトの被検体であり身体に夥しい量の放射線を浴びてしまったがスパルタンⅡ候補生の教育の為に作られたＡＩデジャと共にスパルタンⅡを最強の兵士へと仕立て上げた。
メンデスとデジャもフッド卿同様にスパルタンⅡ候補生達に対して深い罪悪感を感じており、メンデスとフッド卿にとっては自身の子のように扱うがデジャはスパルタンⅡが２５２６年に正式な部隊として認可される頃には耐久年数を大きく超えておりメンデスに放射線によるニューロイリジウムの破壊処理を任せ事実上のＡＩとしての生涯を終えた。

【ジョン１１７の印】
ヘルメットに挿入可能な破損したデータチップ
１人の時は大体これを指先で優しく、何かを思い出すかのように触れている

ただ言えるのは我々(ロドス)がそれに干渉すべきでないことは確かだ

【新規情報】
スパルタンⅡ共通機能
・エネルギーシールド
コヴナントと呼ばれる多種族エイリアン同盟軍が使用していたエネルギーシールドをリバースエンジニアリングによりスパルタンの装備に搭載した人類軍仕様の光学防壁
コヴナントの光学火器に対抗するためにコヴナント軍の物より運動エネルギーよりも熱遮断に重点を置き、それが幸いしてか術師の攻撃に対する強大な耐性を持っているそうだ
特質すべき点は運動エネルギーに対してもある程度の遮断が可能であるが着弾の衝撃によりエネルギーシールドの波長パルスが変動し物理ダメージに対しては多くは耐えられない事が判明した
再充填が可能な防護壁というだけで我々ロドスにとって頭がクラクラする事には代わりないが・・・

【アーマースラスター】

・ミョルニルアーマー各部位に設置された小型スラスターはスパルタンの機動力を大幅に向上させる

よもや両足が地に付いていない位置からある程度軌道を変更したり速力の足しにしたり格闘戦で自身を瞬間的に加速させたりと用途の幅は広い

アーマーに搭載されている小型核融合炉から動力源を供給され噴射可能でありその小型核融合とやらの残量が尽きる、もしくは噴射口が融解しなければ永続的に使用可能らしい

【マグブーツ】

・アーマー脚部に装備された磁気吸着機能

無重力空間や逆さまの状態でも金属面がある限り重力を自身の真下にすることができる奇妙な機能だ

宇宙船が破損し酸素が宇宙に吸い出される際に自身を繋ぎ止めるために使用したりするらしいが彼らはしょっちゅう宇宙に吸い出される経験をしているのだろうか・・・？

【アーマーロック】

・ミョルニルアーマーの脳波感応磁気随従システムを完全にロックすることにより装着者を衝撃などから防護ができる

過去には衛星軌道からの直接降下などの際にスパルタンⅡが使用していたそうだが現在はアーマースラスターがあり地表を滑空しながら滑り込むように着陸をしているため咄嗟的な絶対防護に使用されている・・・本当に?・・・あっ、本当なんだ・・・人類って、変人しかいないのか?

ブルーチームエンブレム

― 艦長 来訪 ―

― ロドス・アイランド ―

「着陸体勢、乗員の遠隔ベルト固定完了。ノズルＶＴＯＬモードへ移行」

ロドスの最上層にペリカンを寄せるパイロットの指先がせわしなくパネルのスイッチやツマミを弾く

すぐ側の格納庫にはロドスの飛行装置が駐留されておりそのメンテナンスクルーや騒ぎを聞き付けた職員達が何事かとポートへやって来ていた

「ランディングギアチェック。エンジン出力着陸モード、誤差修正。３・・・２・・・１・・・タッチダウン。出力低減。全ランディングギア接地確認。ベルト固定解除。カーゴ解放」

ロドス・アイランド直上に侵入してから僅か２０秒もせずズレの無い着陸を決めたパイロットはロドスのクルーが騒ぎ立てる中を気にも止めず操作を行った

「よし、ばあちゃん家に着いたぞ。後が問てるんだ、さぁ行くぞ」

１０４がふざけながらオペレーター達に降りるよう促す

パイロットと通信士以外の全員が降りると次のペリカンが着陸できるようにと直ぐに離陸し飛び去ってゆく

かなりの技量を持ったパイロットだと飛行装置の関係者達が舌を巻いている内に次のペリカンが既にＶＴＯＬモードに移行しポートへ近づいている

「なんだなんだ?!ウルサスの新型か!?」

「知らないのか?さっき連絡来たろ?アーミヤＣＥＯが連れてきた新しい資金提供者

らしいぜ」
「資金提供ですって？アタシは大陸の反対側から来た名無し国家って聞いたわよ？・・・でも確かに高そうな飛行装置よね・・・」

スパルタンとペリカンを見る彼等は「なんだか話と食い合わない」と情報を持ち寄り井戸端会議になった
オニ達の古里である極東には３人寄れば文殊の知恵という諺があるらしく不安と好奇心でざわざわしている
ここで悲しいお知らせ、アーミヤがロドスに近づく前に送った無線連絡は様々な部署をただでさえ慌ただしい中あちこちに情報が渡り歩いている内に伝言ゲームのように途中で内容が湾曲していたのだ
やれ《ロドスの新しいパトロン》だとか
やれ《大陸の反対側から来た異邦人》だとか
やれ《目覚めた旧先民がノアの方舟に乗せる種族の選別に来る》だとか
前者２つはともかく最後のはさすがに無いだろ、と突っ込みを入れられていたが・・・
そんな話に惑わされ「ふてぇ野郎だ、面の皮が厚いヤツらを拝んでやろうぜ」と完全に行き違った考えを持った人員が最上層に足を運んでいたのだった

ところがそんな彼等の目に飛び込んで来たのはロドスの飛行装置よりも小振りだが洗礼された流線形のボディが目線を引く《Ｄ７９Ｈ―ＴＣペリカン》である
コックピットを守る風防は２つ、丸みがあり見た限り強化ガラスを使われているように感じる
実際にペリカンはスリップスペースはできないが代わりに高度１００ｋｍの《カーマンライン》を越えて衛星の軌道に乗りコロニーや静止軌道にある基地に出向くほどの出力は備えている
その為面で押し寄せる圧力に耐えられる程の硬度もあるがさすがに側面からアンチマテリアルライフル等の点の圧力で狙われてはひとたまりもない硬度でもある
飛行装置よりも戦場に特化したスタイルとエンジンの甲高い咆哮を奏でるペリカンはどちらかというと《ペリカン》よりも《鷲》の方が似合っているような気がした
あくまで《輸送機》なのでペリカンというネーミングがピッタリなのだが彼等がこれが輸送機に武装を施した物だということはこのペリカンに乗り込んでいた戦闘オペレーター以外一切知る余地もない

「本当にＣＥＯが降りてきた・・・ドクターもいるぞ！」
「みんなあの天災の中から戻ってこれたのね！今夜は徹夜で呑むわよ！」

ポートに降り立った戦闘オペレーター達を盛大に称えるロドス社員達をアーミヤは静かに見詰めた

こうして無事に戻ってこれたのはＵＮＳＣのスパルタンⅡとペリカンの功績が非常に大きい、ドクターを救出するまでは小規模なゲリラ戦を転々としてドクターを救出できた

しかしそこを脱出してからがこの作戦の肝であった、想像以上な厄災による隕石の雨霰(あられ)によって予定していたルートを大きく迂回した結果暴徒やレユニオンとの戦闘を避けることが出来ず多くの怪我人を拵え、剰(あまつさ)え本来存在するはずの無い者達に助けられたのだ

・・だが、無事に全員で戻ったのだ、少しくらいなら、社員達に微笑み返しても、罰は当たらないだろう・・・

そう考えた矢先だった

「・・・アーミヤ取締り代表、早々だが協議を場を至急用意して貰いたい」

「――え？もう、ですか？まだあなた達（スパルタンII）の面接も――」

「インフィニティ艦長、トーマス・ラスキー大佐が直接会って、協議に望みたいそうだ」

「え・・・？・・・えぇー・・・」

さすがのアーミヤも今回ばかりは鳩が豆鉄砲を食ったような締まりの無い顔を晒した――

…………………………………

― アーミヤside ―

あぁ、まさかこんなことになるなんて・・・

現在私はドクターとケルシー先生を呼んで応接室に居ます

戻るなり直ぐこんな話をしたせいか、ケルシー先生はイキナリ呼び出された事もあり、あからさまに不機嫌になっています

大丈夫かとは思いますが、彼ら人類の決戦要塞の艦長に抜擢される程の人物に、露骨な嫌味を言い出さないか少し心配です・・・

そんなこんなでロドスに戻ってから既に半刻ほど経過しスパルタンⅡの117さんから数分前に「ロドスが見える位置まで来ている」との事を呟かれました

ここまでの案内はロドスでも相当な手練れであるエリートオペレーター《ブレイズ》さんが担当する手筈になっています

・・・なんだか外がまた騒がしくなってきました、今日のチェルノボーグといい、スパルタンⅡといい、ドクターが記憶喪失を患った事といい・・・胸騒ぎがしますね

…………………………………………

―　ケルシーｓｉｄｅ　―

たったさっきの出来事だ、何処の所属かもわからない飛行装置が３機ロドスにやってきてアーミヤ達を降ろしてすぐに飛び去ったのは

その時私はラボにいた、だが何が起こったのかは監視カメラから通じたモニターで概ね見ていた

オペレーター達が全員帰還できたのは確かに喜ばしいことだが、見慣れない連中がいるのもすぐにわかった

明らかに雰囲気が違うソレは体を左右に振り、爪先に体重を乗せ踵は２～３ｍｍ程浮くような前傾姿勢で歩いている

それに加え僅かに背を丸くさせるといった突発的な戦闘に備えた動作

・・・戦い慣れている、それもブレイズやレッドとも対等以上に渡り合える、所謂トップエースだろう

アーミヤに直接聞く為に椅子から腰を上げ扉に手を掛けるともう既に息を切らせたアーミヤがいた

どうやら走って来たようだ、急ぎの要件だとか言っていたが恐らく・・・やはりそうだ「緊急性のある面接」とか言っていた

少し落ち着いたらどうだ。そういうとアーミヤは深呼吸をした後あらましを口にし始めた

―――――――

―――――――

「で、その異世界人・・・ＵＮＳＣだったか?その代表とお前達を連れ帰った奴らが協定とやらでここに来る・・・　と?」

アーミヤは肯定する

あくまでも私は医療部門の責任者だ、好きにすればいい。そう言いかけた時だ

「彼等が人の脳細胞を利用したＡＩと、鉱石病について話しているのを小耳に聞きました」

決め手――と言いたい訳ではないが脳細胞を素材としたＡＩか・・・生き物を素材にする事に関しては正直面白くはないがＵＮＳＣのオリパシーに対する見地を知るのは興味深くはある

ここは１つテラより優れた技術を持つＵＮＳＣとやらの仮説を聞かされてみるとしよう、何かしら発想の起点になるやもしれない。気まぐれながらにそう考えた

アーミヤが私を心配するように《ちらり、ちらり》と見ている

・・・確かに今、不機嫌そうな顔をしていたせいかもしれない、口には出さないがこっちも２日も徹夜しているんだ、湿気た顔もしたくなる

・・・それにしたって外が騒がしい、徹夜明けだというのに、こんなにも騒がれたら余計に頭が痛む

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

― ブレイズｓｉｄｅ ―

え～と？はじめまして・・・かしら？
私は《ブレイズ》、アーミヤちゃんから頼まれてあなた達の案内をするように頼まれたの、早速でアレなんだけどちゃんと付いてきてね
え？畏まるタイプに見えない？
わかる？実はね・・・
『お前は短気な癖に強情っ張りだから言っておく、些細な行動１つで破滅ってのは以外と簡単に訪れるんだぞ、くれぐれも粗相な真似はするなよ？　ｂｙ医療オペレーターＹ．Ｐ』
ですって！全く失礼しちゃうわよね！
まぁ自覚が無いと言ったら嘘になるけどね
それにしても、あなた達って異世界人なんでしょ？
私を含めたエリートオペレーターには先駆けて情報が寄越されたけど、あなた達の世界はみんな団結して迫り来る脅威に立ち向かったのよね？

ホントびっくりしたわ！あんな大きい宇宙戦艦、漫画や映画でだってそう簡単にお目にかかる事無いし！

ん？うん、少し羨ましいかなーって

星の人々全員が一同機を介するように集まって団結して命運を賭けた戦いをしてたんでしょ？

あ、このエレベーターに乗ってね

――って、重量オーバーじゃない！私と艦長さんはこれで行くから護衛のお２人は階段で来てね♪

・・・今テラはね、あなたが見てる通りの世界なの

鉱石病のせいで秩序の均衡が崩れて《感染者》と《非感染者》のいがみ合いが此処彼処で起こってるの

回りくどいのはナシ、率直に聞くわ

あなた達はそれらを解決できるの？

・・・・・・・・・そうよね

本来あなた達はこのテラには存在してはいけない存在なのかも知れないしね

・・・・・・・え？「解決は出来ないかもしれないがきっかけを作る事は出来るかもしれない」？

自信満々ね・・・じゃあ、ちょっとだけ期待させて貰おうかな！

――こうして私は後々アーミヤちゃんに「艦長さんに無礼は無いように、と言いましたよね・・・？（真顔の圧）」と、キツくお叱りを受けてその晩、朝までヤケ酒をした

もちろん二日酔いもセットでね・・・うっぷ・・・

……………………………………………

「では、協議を始めたいと思います」

アーミヤの一言でロドスの今後が左右される協議の幕が開かれた

先程の騒ぎはどうやら現在このテラ付近に存在するＵＮＳＣ所属艦である旗艦、巨大宇宙船（インフィニティ）であったらしい

雲の隙間から頭角を徐々に現すその巨大さたるはまるで空飛ぶ城塞、ロドス・アイランドですら大きな豪邸と荒んだ小さなプレハブ小屋、その後者といわんばかりだった

更にインフィニティに随従する小型・・・いや、あくまでこれは比喩、実際は５００

m級の重フリゲート艦

このフリゲート艦にも驚かされた、まさかあのフリゲート艦がインフィニティの船体内に十隻も収容されているとは微塵にも思わないだろう

ＵＮＳＣの代表(ラスキー)は「インフィニティは、あれが最初で最後です」、そう言った

正直信憑性がない、嘘をついて実は十数隻就役してる。そう言われても嘘だとは思えない

ロドスの者全てが息を飲んで見上げている中クロージャはぎゃんぎゃんと大手を振りながら大声を上げて大喜びしていた、まさかあの宇宙船を模倣して《無限(インフィニティ)の彼方へさあ行くぞ》する気ではないだろうか

初動のペースを完全にＵＮＳＣに握られてしまった

「ＵＮＳＣインフィニティ艦長のトーマス・ラスキー大佐です、まず始めに特殊機甲隊(スパルタンⅡ)が世話になったと聞いています」

世話になった?それは此方のセリフだ
ご丁寧と言うべきか、白々しいと言うべきか

「ロドス・アイランド製薬代表のアーミヤ、と申します」
「えー・・・私はドクターと、呼ばれているようです?」
「・・・医療部門代表のケルシーだ。アーミヤ達がチェルノボーグで世話になったようだな」

簡単な自己紹介を済ませておく、ラスキーは3人の各代表を見据えると懐に手をやり妙な装置を取り出した
少なくとも爆弾などの類いではないだろう、それならば艦長本人も、護衛として追従していスパルタンⅣも此処には居ない筈だ
０５８と１０４はインフィニティに武器・弾薬を補給しに一度インフィニティに帰投しているが補給は済ませておりあと数分もしない内にロドスに戻ってくるらしい
ラスキーがその装置をテーブルに置くとなんとそこの上にオレンジ色の人物が現れた

なにやら古めかしい服装を身に付けた人物に見えた、これが１１７が言っていたスマートＡＩとやらだろうか

「彼はローランド、インフィニティに搭載されているＡＩです」

ラスキーの紹介にローランドは「どうぞ宜しく」と言い《休め》の姿勢から簡略した宇宙海軍式の敬礼をピッと見せるとまと休めの姿勢に戻った

このローランドやＡＩといった存在も本当に驚かさせる、まるで人そのものではないか

《技術部》に見せたらローランドはさぞ人気者になれるだろう

「マスターチーフから粗方話は聞いていると思いますが、我々ＵＮＳＣはインフィニティのＳＦＦＴＬ機関を修復するためにこの惑星テラで資材を求めています」

「・・・１つ聞かせて欲しい所がある」

ケルシーの一声でラスキーは目線をケルシーに合わせる

「何故ロドス・アイランドにその話を持ち出すか、だ」

「この星の住民の中で比較的高い技術力を所有し、一国に属する事もなく1つの組織であるが故です、国が相手では国によってはこちらは足元を見られ核心技術まで要求されかねない、・・・我々人類には《過ぎた力は自らを滅ぼす》と言う言葉が古来より存在しています、光速技術ことFＴＬやA・N・G・S、重水素核融合、相対性理論・・・それだけに留まらない、このテラには未だに存在していない技術のようだが強化人間、自己先鋭化現象、重拡散光学防壁技術、複合超合金技術、レールガン技術、指向性エネルギー技術、静止軌道居住技術・・・どれもテラに於いて、一度手にすればこの星を我が物にできる正に神の思し召し・・・」

ラスキーは一度息継ぎをする

まだ知らない言葉の羅列を吐き出すのかとアーミヤの頭の中はパンク寸前に達している

現にロドス側の護衛のコートの女性と九尾の女性は呆然としていた、馬鹿な話を聞いたような反応ではなく

『彼らはそんな喉から手が出るような高等技術をさも当たり前かのように使役しているのか』という意味合いである

「それに対して相手がロドスのような確かな地位を独自に築いてきた組織なら技術のやり取りであっても必要以上に片側のみにメリットのある取引を抑止する事にも繋がる」

「それは高すぎる技術の圧力と脅しがあってこそだと、知った上での台詞だと私は捕らえるが」

「だからこそだ、こちら(UNSC)が相手の背に合わせる事ができる」

「いいやそれは詭弁だ、後からどうとでも力で屈服できる」

「まぁまぁお2人とも落ち着いて、こうもピリピリしていては互いが納得できる協議なんて私の寿命が先に訪れたとしても一向に出来ませんよ?気の抜きすぎはもっての他ですが、多少は楽にしておかないと」

まさかのまさか、ケルシーとラスキーの争いに口を突っ込んだのはアーミヤでもドクターでも互いの護衛でもなくローランドだった

「あと、ブルーチームが持ち寄った鉱石病の件ですが進展が・・・」

ローランドがそこまで言うとケルシーが反応を示した、表情にこそ変化は無かったが彼女の頭から生える耳は確かにピクリと動き目線がローランドに向けられる、それをローランドは（狙った通りだ）と表情に出さず大きな魚が餌に食い付いたのを歓喜するそれと同時にアーミヤとドクターも反応を示す

「その話、お聞きしても構いませんか?」

「私も気になるなぁ、如何せん記憶が無いせいで世間に疎くて・・・」

「ローランド・・・その情報はまだ出さない予定だっただろうに・・・」

「御三方（おさんかた）に良い印象を与える為の材料ですよ艦長、ケルシー女史は如何（いかが）ですか?」

女史・・・ローランドはケルシーに対して医療随従者としての敬意を持って語りかける

ケルシー本人がそれをどう思っているかまでは分からないが

「・・・聞こう」

ローランドはＵＮＳＣが織り成した鉱石病の対処法について語り出した

……

「ねぇねぇ！キミ達はどれくらい強いの？あ！私ブレイズっていうの、宜しく！」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「耳は本物なのか？」
「あの、私はフェンと言います、先は皆を助けて頂いて――」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「気にすんなって」

「あのスナイパー、女だったのかよォ・・・!」
「落ち着けノイルホーン、一杯奢るからよ・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「お前男だと思われてたんだな」[058]
「君らの装備すごいねぇ、良ければ私(クロージャ)に預けてみない?!絶っっっ対に後悔させないから!」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「ノーコメントだ」

ラスキーの命令により応接室の近くにある広間で待機していたブルーチームに次から次へと人がごった返す
普段新人が1人2人加入したくらいではここまで人集りになったりはしない、その理由が先の武勇伝である

目指し方と理由はどうであれ力を求める傾向が強いテラの住民にとってスパルタンの身体能力や装備の性能など強さの秘訣は是が非でも聞き出したいのだ
それにロドスで面談をして雇用してもらうつもりではあるがまだ正式に雇われた訳では無い
そんな中０５８　０８７　１１７は無視を決め込んでいる、２ｍを越える身長は相手を視界に入れず明後日の方角を見るにはうってつけだった
――が、１０４が中途半端に相槌したり小さく手を振り返したり不用意に近づいたペッローの男性オペレーターの耳を触るなどするせいで『話しかけ続ければ何かしら反応してくれる』と刷り込まれてしまったからだ
１０４に斬りかかろうとした熊耳娘もさほど遠くないベンチから感謝と警戒の葛藤が混ざった何とも言い難い睨みを効かせている

「「お前ら・・・」」
「げえっ?!ドーベルマン教官にＡｃｅさん!?逃げるッ――」
「うっへぇ!トンズラするぞ!」
「ヤバイのが２人、来るぞユーマッ!」
「逃がすか!」「逃がさんぞ!」

突如現れたドーベルマンとＡｃｅの2人、アーミヤがあれ程失礼が無いようにと言っていたのにも関わらずコレだったオペレーター達に渇を入れに来たのだ

逃げ出そうとしたオペレーター達を鞭で器用に絡め取りできる限りの人数を拘束したドーベルマンとまるでフォルテ種かのようなパワーでＡｃｅはオペレーターの塊を壁に押し付ける

「うぎゃあ！鎖骨折れるぅ！」

「うおー！ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ」

「逃げられなかった・・・」

「全く、このバカ共は・・・」

「よう、ウチ(ロドス)の奴らが迷惑かけたな」

逃げきれなかったクランタの女性オペレーターはさめざめと一筋の涙を流した

ニアールも走ってＡｃｅに付いてきたが残念ながら束縛大会には間に合わなかったらしい

………………………………………………………

「――以上がＵＮＳＣからの協定の材料です」

「・・・・10ml の血液と僅かな皮膚だけで人体の複製が可能なんて・・・」

「・・・凄いとしか言いようが無いね」

ドクターはローランドが提示した資料を見ながらメモを取り会話に付いてきていた、

記憶喪失とはいえ元から頭の回転が早かったからか途中で躓く事も無かったようだ

それよりも現在で最も大事なのは《医療部門責任者》のケルシーだ

彼女を如何に取り込むかによって我々（ＵＮＳＣ）の待遇が大きく変動するだろう

肝心のケルシーは目を閉じたまま思いに耽っている

「・・・《コールドスリープ》・・・《クローン移植》・・・本当にそれが可能なのだな?」

「可能です、完全な生き物の複製は重罪になっていますがそれは脳も複製し自我を持たせた場合です、クローニング移植は必要な部位のみを複製させ移植するので人権もクソもありませんよ」

ローランドは中々辛辣な言葉を放つ

過去にスパルタンⅡを造り上げるために完全なクローンを造りそれと入れ替えるように本物を軍の施設に収監していた事は避けておく

「ですが脳に結晶がある者についてはどうしようも無い、脳はいくら複製しようも短期間で細胞が壊死し狂った生き物になってしまう」

付け加えるようにローランドが言う

オリパシー患者の一部には脳に結晶が発生した者も少なくはない

１０の自身の脳をクローンで造りそれを材料に自身のクローンを作り出したキャサリン・ハルゼイでさえ脳のクローニングは苦労したと報告書に記載されていた

ラスキーは初めてその報告書を見た時は悪寒すら覚えた
正気の沙汰ではない、そのハルゼイ博士により純粋な子供達は人体改造と洗脳による戦闘軍団を造り出した
そして完成したのがスパルタンⅡ
今となってはスパルタンⅡのお陰で人類は勝者となり今も種が残されているがハルゼイ博士はそれを理由に自身を棚に上げ正当化しようとした

『スパルタンⅡは新たな人類――』
『スパルタンⅡは人類の未来――』
『スパルタンⅡは次なる人類のステップである――』

結局のところハルゼイ博士は子供をクローンで入れ替え拉致して改造したマッドサイエンティストとして名が知られた
《英雄》として知られるスパルタンⅡとは逆に汚名を着させられて・・・
懐かしいものだとラスキーは思い出す
そうだ、自分もそのスパルタンⅡによって命からがら生き残ったのだ
彼女が完全な犯罪者だと言えた立場ではない

ハルゼイ博士が、スパルタンⅡが、マスターチーフが居なければ、トーマス・ラスキーはこの世に居ない筈だったのだから

「・・・認めよう、理論も、理屈も、実証も、成果も、経過も、証明も・・・私からは何も言うことはない、そのハルゼイ博士とやらは文字通り天才のようだ」

ケルシーが首を縦に降った
アーミヤは少し意外だと感じていた
ラスキーは安堵した
ローランドは資料を片付け始めた
ドクターは1つ気になるのかローランドに聞いた

「これだけの技術を借りて、こちらからの見返りが修繕用の資材なのは何故?」

その問いにはラスキーが答えた

「・・・正直なところあなた方に手を尽くす謂われなんて無い、好きに採掘して、邪魔

が入れば潰して、修繕しこのテラから足早に去るつもりでしたが・・・スパルタンⅡが、マスターチーフがそうすべきと言うからそうするのです」

「・・・余程彼(チーフ)に入れ込んでるんですね」

「それはもう、彼が私に道を示してくれたからです、そのお陰で私がいる」

「・・・分かる気がしますよ、でしょ?アーミヤ」

「わ・・・私にも振るんですか?・・・確かに117さんは特別な何かを持っているようには感じますが・・・」

先ほどまで陰険だったケルシーと護衛以外の皆顔が少し緩んでいる

ローランドが知る限りラスキーの緩んだ顔は初めてだがＵＮＳＣの者達がマスターチーフを語る時は必ず僅な微笑みがあったのを知っていた

「おい、話は終わってないだろう」

「あっ、すいませんケルシー先生・・・」

「そうだね、なら早速チーフ達を呼ぼうか、面接しないといけないしね」

「そうですね、わかりましたドクター」

マスターチーフのお陰か
はたまた鉱石病に対する反撃の狼煙が立ったからか
応接室は少しだけ和やかになった

そう、スパルタンⅡの狂ったかのような潜在能力を知るまでは――

― 例のブツ ―

― ロドス・アイランド　リクリエーションルーム ―

やあ諸君、俺の名前は《ヘンリー・グラスマン》
率直に言えば科学者というやつだ、インフィニティで開発主任を任されてる
今はロドスに赴いているがね
先日コールドスリープから叩き起こされたと思ったらどうやら我々は未知の惑星に降り立ち協力者達の為に新型の防護マスクを作って欲しいと艦長から要請があった
この星の住民の調査をしてみたいと思ったが事態は複雑らしくにっちもさっちもいそうだ、艦長命令に不服な者は皆テラから離脱するまでの期間は再凍結されてしまっている
さて、折角の異星人との交流だし俺は命令に従いながら折を見て調査申請をじっくり

していく事にした
まず透過フィルターだ、コレについてはスパルタン用の備蓄がたんまりある、問題はデザインだ
個人用ではなく誰もが使える、隣のロッカーから間違えて手に取っても大丈夫な革新的なヤツだ
まぁ問題はデザインとは言ったが本当はデザイン自体は候補が幾つか決まっているんだが・・・
何せ我々科学者というのは極限を突き詰めたくなる性がある、君たちもそうじゃないか？
一度クリアしたゲームのクリアタイム更新やアイテム収集したりするアレさ
今俺達が突き詰めているのは可変サイズ機能だ、機能美というのは機械の華だし大事なものだ、そうだろ？
構想としては装着するとマスク自体が可変して装着者の骨格に合わせて一切の隙間を無くす、喋ったりしても二重構造の与圧機能で肌に密着する機能だ
子供の頃に見た大昔の日本アニメの青いタヌキの秘密道具にあった頭に装着するプロペラのくっ付く機能を参考にしている
テラの住民達は良く動くらしい、ヤンチャな子供みたいにね

だからしっかりと吸着するように可変機能が必要だと思いそれを盛り込んだ、アフターサービスとして固定用バンドも付けられるようにしてある

そのおかげで戦闘や会話に夢中になってもマスクを付けている事を忘れるくらいには可変機能もスムーズだ

だが与圧のせいで肌にマスクを付けていた跡がクッキリ残ってしまうのが難点だな・・・マグ(磁気)ホルスターが存在する現代でマスク跡が残るのは機械として美しくはない

始めこそテラ人用のミョルニルアーマーのヘルメットを作ろうとしたんだ、これも誰でも使えるしテラで主に使われるボウガンや弓矢などなら数発は耐えられることも判明した、だがテラ人は角や耳など生えた我々人類とは異なる生態系を歩んできている

つまりそのテラ人1人1人の角やら耳を配慮すれば口だけを覆うタイプが必然的になる訳だ

ということでマスクタイプにしたついでに試しにローランドにも聞いてみた

『そうですな・・・個人用のフェイスフレームを作ってそれにマスクを当てると可変部がフレームと接続され密着するシステムというのは?若い女性や顔も毛が生えたオペレーターにも配慮してフレームの取り付けはお湯で溶ける肌に優しいバイオジェルで良いでしょう』

という返答が来た

ＳＦチックで考え自体は悪くないと思ったが顔に付けるフレームとそのフレームに合わせて可動するマスクを作るくらいなら初めから個人用のマスクにすればいいという結論になってしまった

本来ならもう数日かけてプロトタイプを作るつもりだったが艦長からは巻き(急ぎ)で制作するように言われている

科学者として様々な機能を搭載したかったがいつも時間というものは有限だ

少々惜しまれるが今回ばかりはローランドの案を使う事にしよう、フレームを用意すればマスクを只管(ひたすら)に量産すれば良いだけだし俺はどこぞの子供を人体改造するマッドサイエンティストとは違うからな

――――――

――――

――

「と、云うわけで試着してみて欲しい」

「はぁ・・・」

２日という時間をかけてバリアブルマスクＶｅｒ．１は概ね完成した
とりあえず角や耳で空間を必要とするオペレーター達をある程度の人数をアーミヤＣＥＯに頼み集めてもらった、フレームと肌を接着するバイオジェルもケルシー博士により安全を保証してもらったから大丈夫だろう
さぁ１人目はヴィーヴルの《バニラ》、話しによるとワイバーンらしい
隣はマスクには一際拘りがあるオニの《ノイルホーン》

「バニラです、よろしくお願いします」
「ノイルホーンだ、よろしくな」
「ああ宜しく。よし、まずはそのバイオジェルを少し指に取ってフレームに満遍なく塗ってくれ、そしたらこの部位を顎に合わせて顔の輪郭に沿って装着する」

バニラはグラスマンの指示に従いながら顔にフレームを合わせる
ノイルホーンは顔を見られたくないのか壁に近寄り誰も横にいないのを確認するといつものマスクを外して付け始めた
口と鼻を覆うようにフレームを付け１０秒ほど乾燥させて動かない事を確認すると

今度はマスクを手渡す

「スチームパンクなデザインですね」

「俺のは随分とメカニカルだな」

「どうせ付けるなら無駄の無い洗礼されたデザインがいいだろう？２人に渡したのはとりあえず幾つかある中の１つでね、ここから出る時にそのタッチパネルの中から欲しいデザインのを２つ選んでくれ、同じ物を２つでもいい、後日ロドスの各部屋に届ける手筈になっている」

「はい、わかりました」

「なぁコレはオーダーできんのか？」

「デザインオーダーメイドか・・・ふむ、悪くないな、善処しよう」

そう言いながらフレームとマスクを合わせるとマスクが『カチャカチャ』と音を立てながら可動し輪郭に合わせるために動いている

完全に合わさったのかマスクから小さく『プシュー・・・カチッ、チキッ』とフレームとマスクの隙間の空気が抜かれて固定される

それを見た後方のオペレーター達は「おぉ・・・」と感想を漏らす

「どうだい付け心地は、喋ったり顎を動かしてみてくれ」

ノイルホーンはマスクを触ったり口を大きく開けてできる限り顎を動かす、バニラは息を整えてから発声練習を始めた

時折「カチャ、カチッ、キチキチ」と音を立てながら口とフレームに合わせてマスクが可動する音が聞こえる

よし、動作は問題なし、可動音が少々気になるため今後はそれらを配慮して更にスムーズな機構にしよう

「スゲェな、ズレてる感覚が全くねぇ」

「吸収官が見当たりませんが、どういう仕組みなんですか？」

「マスク側面の吸入口からだ。排気口は顔にかからないように下部から排気される、フィルターは一応オリパシーの原因になる粉塵やその他危険な環境下でにもを９９．９９８％シャットアウトできた物をロドス用に改良した新型だから更に効果があると思ってくれ」

「分かってると想うがこれは粉塵化したオリジニウム粒子の空気感染を防ぐ物だ、鉱

石で傷を負って接触感染する場合の対策にはならないぞ」

９９．９９８％よりも更に効果がある、リクリエーションルームの中にどやどやとした声が広まる

おーい、後半の話を聞いてたか？

ＵＮＳＣの透過フィルターは軍事複合体企業産と民間企業産が主であるスパルタンⅣ用のミョルニルアーマーＭｋ―Ⅵ　ＧｅｎⅡはメーカーの特色で様々なフィルターがあるが基本的に宇宙空間でもしっかり機能しないといけない規定がある、宇宙空間以外にも有害ガス惑星などの状態下であっても例外ではない

本来はミョルニルアーマーの小型核融合炉によって酸素が供給されているがその素を作る為にはフィルターを通して外気を取り込む必要がある

その取り込んだ外気をアーマーに溜め込んでおけば宇宙空間でも極限生存モードにしておけば数日間なら宇宙遊泳も可能になる仕組みだ

「・・・いっそのことロドスにスパルタンⅣプログラムを譲渡してオペレーター達をスパルタンⅣ化させた方が早い気もするが・・・」

元々スパルタンⅣとは過去の強化手術に失敗し下半身不随になった《ムーサ０９６》が主導となり計画された物だ
炭化セラミック骨格の転換作業は完了したが下半身の炭化セラミック骨格が強化薬剤の拒絶反応により液状化してしまった為リハビリなんぞ一切の無駄でありムーサは一生車椅子を余儀無くされていた
そんなスパルタンⅣになるには条件がある
まず始めにＵＮＳＣ海軍に所属している事
時代が進み強化薬剤が改良され性能向上性は著しく下がったが安全な物になりそれを体内に注入する事、骨格と筋繊維が増強されＵＮＳＣ海軍所属の１８０ｃｍの男性が薬剤の副作用で再度骨格が成長し３週間で１９７ｃｍまで身長が伸び筋密度が１８０％向上した
スパルタンⅡ用の物は１０００％以上の向上性が見込めるが先のように拒絶反応が発生しやすい等大変危険な薬剤だが
次に所属がＵＮＳＣに登録されてしまう事
つまりテラの住民をスパルタンⅣ化すればＵＮＳＣがテラから離脱する際にテラ人のスパルタンⅣを人類圏に連れ帰る規約があるという事だ、理由はもちろん兵役であり今後も戦死率が高い生身の海兵隊が上陸出来ない戦地へ配属される可能性もある

（・・・これはあまり良い選択じゃないな）

マスクの性能で喜び合うオペレーター達を見ながら1つの候補を削除する

次の候補はテラ人の身体の頑強さに賭けてミョルニルアーマーＭｋ―１　パワードアサルトアーマーを再生産するかだ

生身の人間では制御どうこうよりも装着者が軟弱過ぎてスーパーボールのように跳ね回ってしまう

そのため元は成人兵士から志願者を募り膨大な放射線を含む強化が行われたがコストに見合わないと、採算が合わずスパルタンⅠプロジェクトはご破算となった

後釜のスパルタンⅡも大概だが・・・

そうなると最後の候補はスパルタンⅢだ

コヴナント大戦で増える一方の戦争孤児に復讐の機会を与えて強化薬剤だけを投与して強化し安価なミョルニルアーマーを着せて戦地に向かわせる

孤児な上に本人が戦うことを望んでいるなら止めてやる義理もないのだ

単価も安い上にこう言っては悪いが復讐のみを糧に自決特攻すら辞さない故キルレートも存外高く替えも利く

このテラにも孤児は多いだろうし案外上手くいくかもしれない

・・・スパルタンⅡにこの考えがバレたら殺されるのでこの案は初めから実行する気は毛頭ないが

ふと俯いた視線を正面に戻すと殆どのオペレーターが試着を済ませていた

どうやらローランドの案は上手くいったようだ

あとはこのフレームとマスクを量産するだけだ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ロドスの射撃訓練場では普段聞き慣れない発砲音が響いている

『キャボン、キャボン、キャボン』

何事かと集まる狙撃オペレーター達はその音の原因を探ると今話題のスパルタンⅡとやらが拳銃を構えてトリガーを引くのを見た

「たしかＵＮＳＣから譲渡される銃の教導やってんだったよな・・・にしても、変わった発砲音だな」

「でも威力はスゲェぞ?アレ見ろよ、木製とはいえ的が粉微塵だぜ」

一頻り射ち終わりマガジンから弾が空になりスライドがロックされると拳銃を持った１０４が振り返り説明をしていく

「これがＵＮＳＣから譲渡される火器の１つ、Ｍ６Ｈ２　マグナムピストルだ、１２．７×４０ｍｍの弾丸を１２発マガジンに装填できる」

慣れた手付きでマガジンを抜き取りマガジンを再度装填する

「照準はスマートリンクで投影されるから概ねの狙いでも十分機能するし残弾も数字で投影される優れモンだぜ？」

「誰か射ってみないか？ん？」と１０４はＭ６Ｈ２マグナムピストルの教導を行っている、そんな教導希望を申請したオペレーター達を焚き付けようとしていた

それに対して１人のオペレーターが挙手した

「なら、私が」

白銀というよりは蒼白銀に近い髪色をポニーテールにして２対の角が生えた女性オペレーター

左胸の名札には《リスカム》と書かれていた

彼女もまた１０４と同じようにエッチング弾を装填した拳銃と盾を使用する重装オペレーターのひとりでありＢＳＷから派遣されている社員だ

１０４は男性も入り交じる教導希望者から一番先に名乗り出たリスカムに好感を持った

リスカムは元々は新人が拳銃を持った重装エリートオペレーターと聞きどのような人物かを見る為に来ただけであったが１０４が発砲する大型拳銃に興味を示した

大型で銃身先に取り付けられた物と光を真っ直ぐ放ち的にピッタリと赤点を付ける独特な機構とグリップを覆う形状のトリガーガード

１０４から手渡されたＭ６Ｈ２を触ってみる

正直な感想を言うと、思ってはいたがやはりかなり大きい

グリップを右手で握り込んでみると片手で持つには手に余る

この銃のマガジンはダブルフィード型を採用している、そのせいかグリップとマガジンは厚みもあり１２．７×４０ｍｍと弾丸大きさも合わさってグリップそのものが非常に大回りなのだ

「あー・・・大丈夫か?」

「・・・少し頑張れば持てます、ご心配なく」

（心配なく・・・ねぇ・・・）

正直心配しているのはリスカムではなく反動で手からすっぽ抜けて落下の衝撃で破損する可能性があるＭ６Ｈ２だ

しかしながらヴイーヴルは強靭な肉体を持っていると聞き及んでおり脱臼や肩を痛める要素はないと１０４は踏んだ
ＵＮＳＣの銃器はそんな柔な作りでは無いがスマートリンクはそこそこ精密機械でありこのＭ６Ｈ２もＵＮＳＣからの配給物なので来るべき時に備えてリスカムの後方に移動する

―　リスカムｓｉｄｅ　―

スパルタンから受け取った大型の拳銃は中々に重かった
どのような材質と構造を取り入れればこうも重量が嵩(かさ)むのだろう
それにこの人[104]に見くびられている気がしてならないし・・・
そんな事を考えてるとスパルタンが私の後ろに移動していた
ああ、そういうことね
スパルタンが後ろに移動した理由が何となくわかった

「そんなに信用が無いですか？私は」
「保険だ、ほ・け・ん」

むっ・・・言ってくれるわね・・・
なら目にものを見せてやるわ
いつも通り右手で銃を握る要領でＭ６Ｈ２のグリップを握るとスマートリンクが作動し光学照準が映し出される
スマートリンクを的に向けていると小さな赤い点が見えた
何かと思い体勢を少し動かすとなんとその赤い点も動いた、しかし銃口は間違いなく的を狙っている

（・・・なるほど、これは確かに便利ね）
この赤い点は着弾地点を記す機能と判った
覗き込みが少しズレていても赤点を的に合わせていれば後はトリガーを引くだけで的に命中させることができる
それではお待ちかねの実射だ

想定以上にトリガーは軽く撃鉄があと1ミリ動けば弾丸の雷管を叩くであろうことが直ぐにわかった

「・・・」

「キャボン」

1射目、15メートル離れた的の中央に命中

周囲から静かな歓声が湧く

・・・これはまた想定外、反動は私が使っている物よりも強いが殆ど変わらない

その癖に的はエッチング弾よりも大きな風穴を開けている、その薬莢の大きさは伊達じゃないってことね

もしも弾薬代がエッチング弾より安価ならサイドアームやストッピング(衝撃)パワー(力)が必要な時に使うには重宝するかもしれないし私はヴイーヴルだから重さもそこまで気にならない

残りの弾で的を射とう、『キャボン、キャボン』この発砲音も慣れればそこまでは悪くないと思う

スマートリンクには9という数字が見えている、これは残弾数ね。乱戦中に射った数

を忘れてもマガジンを直接見ずとも射ちながら見れるからわかりやすい
そして全ての弾薬を射ち終わり空のマガジンを抜き銃とマガジンをテーブルに置く、スパルタンの思惑は外れたということ
どうだ。そう思って振り向きスパルタンを見ると頭を小さく縦に振ってサムズアップをしたスパルタンから「やるな、普通に満点だ」と、素直な感想を頂いた
（・・・まるで私が意地を張ってたみたいになってない？）
近くのベンチに座り指をほぐしながら前に戦術の足しになるかと思って読んだ「亡霊部隊近未来兵士（ゴーストリコン）」という小説を思い出す、たしか主人公の名前は『ジョン・コザック』彼の両親はウルサス人だけど移住したクルビアで生まれたクルビア軍特殊部隊所属のウルサス人という変わった出生があったっけ
その小説で読んだような非現実的ながらどこか現実的な機能がたくさん盛り込まれた銃火器は確かにＢＳＷである私にとって魅力的な物だった

（次は、連射できるようになりたいな）

…………………………………

「へぇ、それがＵＮＳＣとやらの痛み止めか」

「おっ、なんだもう来たのか《ガヴィル》」

「ああ、ＵＮＳＣの格闘戦教導に出てたんだよ。本職を優先しなきゃならないから途中で抜け出して来たぜ」

医療ラボには数人の医療オペレーターが集まっていた、一ヶ所に集まって小さな長細いガラス瓶を眺めていると更に１人のオペレーターが到着する

アダクリス（ワニ）のガヴィル

既に居る他のオペレーターは

コータスのアンセル、ヴァルポのパフューマー、サルカズのワルファリン

そしてエリートオペレーターことブレイズに先日酔い醒ましを処方したＹ．Ｐと名乗る４名、医療オペレーターは他にもいるが各自の業務や現場に急行できるようにとワートホグという装甲車両の教導を終えてから合流という流れになっている

「ほう、それでそっちはどうじゃった?」
「へっ・・・連中(スパルタンII)、かなりの腕利きだったぜ。単騎でタルラを退けたってのもあながち嘘じゃねーみたいだ」
「結局彼らが何者か分ったんですか?」
「収穫ナシだ、それに1番強えーヤツ(104)は拳銃の教導に行ってて格闘教導(格闘戦教導)には来なかったしよ」

溜め息を吐きながらガヴィルは寄せられた椅子に座るとUNSC製バイオフォームを見る
今日はこれからこの薬品の研究を行うところだった、医療オペレーターがいれば傷なぞあっという間に治るが逆に居なければ到着まで待たなければならないという意味でもある
この薬品を1人1個でも所持しておけば緊急時に痛覚を遮断することができる、戦う以外にも逃走時に使用すれば痛みを耐えながら走る必要もない
だがあくまでコレはUNSCの人類用に作られた物だ、テラの自分達にとって悪影響がないか調べねばならない

構成物質を知るべく1本取り出してアンプルカッターで開封する

「うーん・・・それらしい匂いはしないわね」

パフューマーが鼻を近づけて嗅いでいる、医薬品に精通した彼女が匂いで異常がないというならバイオフォームはテラ人に使用しても5割は問題ないとみて間違いない

「うむ。アンセルや、妾がアンプルの成分を見て伝える、書記を」

ワルファリンの言葉にアンセルはボードとペンを取り出して「わかりました」という

ワルファリンはケルシーと共にロドスの医療現場を支えてきた最古参の1人といっても過言ではない

他の者も彼女はサルカズでも特殊な出生であるブラッドブルートと知ってはいるが現段階ではバイオフォームに集中しているのかさして気にしている様子は無かった

常識外れな趣味が発動しなければ、だが――

「まず《亜酸化窒素除去済みポリエチルトリホスフェート》・・・亜酸化窒素？聞いた

こともないのう・・・それと《発泡媒体モルホフェタミン》、ふむ、どうやらこれは店頭でも合法的に購入できる物らしいのう」

「発泡媒体を医療薬に、ということは外気か患者の傷口に触れて少しすると泡になる薬品ということでしょうか?」

「多分そうじゃろうな・・・人類は妙なものを作りよる・・・ん?小さく文字が・・・ふむふむ・・・《塗布後カプセル化された医療用化合物を放出、凝固を促進し創傷を消毒、痛みを麻痺させる》・・・《短時間の後、塗布されたフォームは固まり内部で半硬質の多孔質の塊になり空気にさらされた体の領域に硬化した皮膚を形成する》・・・これも加えてくれ」

「一定時間外気に晒されると発泡化して膨張すんのか・・・顕微鏡にセットする前に気がついてよかった、下手すりゃ一台オシャカだったな」

「だな、先生に知られた日にゃ大目玉だぜ」

「このバイオフォームも無限にある訳じゃないものね、数が安定するまで大切に使わないといけないわね」

その後しばらくバイオフォームを調べていると続々と医療オペレーターが集まり、最終的に先日傷を負って帰還した前衛オペレーターにこのバイオフォームを使用する流

れになった

感想はと言うと

《傷口に蟻が這っているようだった》とか《針の塊を傷口に押し込まれたみたいに痛い》という効果＝痛みという結論に至った

緊急時の麻酔薬としては上出来であったが好んで使用する物ではないと散々な結果だ、パフユーマーは「医療術師がいないＵＮＳＣの兵隊さんは、あれを使わなきゃいけないのよね、不憫だわ・・・」と人類の技術の高さに対して融通の効かなさを嘆いていた・・・

……

「皆よく励んでるみたいだね」

「そうですね、ドクター」

カフェラウンジでマグカップに口を付けるアーミヤは譲渡技術に関する調査報告書

に目を通していた

《拳銃》、《麻酔薬》、《高機動装甲車両》、《格闘技術》等の詳細が数日分記載されている

この中で最も教導申請数が多かったのはワートホグ装甲車両であった

譲渡される現物はＭ４１軽ガトリングガンがオミットされた輸送型で運転手、助手席、荷台に４人と計６人乗りが可能でボンネットの下には前方に収容された薄型の液体冷却水素注入ＩＣＥ　Ｉ　／　Ｃプラントと無限可変トランスミッションが搭載されている

操作性も全輪駆動であることからピーキーで慣れるまで横転させたりと苦労するが４７度の急勾配でもガシガシと登り最高速度は時速１２５キロ、水素エンジンにより満タン時の移動可能距離は７９０キロメートル、バッテリーパックを搭載可能でパック数×移動可能距離が可能だ

タイヤは耐破裂性の単一ユニットナノチューブスケルトンを採用している、この比較的大きなオフロードタイヤは《Ｍｉｃｈｅｌｉｎ―Ｖａｎｃｅ社》と《ＡＭＧトランスポート・ダイナミクス社》の共同プロジェクトによって開発された

ＵＮＳＣのエンジニアによりテラの環境に合わせてサスペンション、スプリング、ダンパー、ギアボックス、車高もダート（未舗装路）に対応しソフトにカスタマイズされ移動都市郊外において荒れた足場が多いテラにはばっちしオッケーだ（すぐに操縦をマスターしたク

リフハート談）

水素燃料についてだが合成カーボンシリコン触媒を使用して非常に高い温度で燃焼し、ガソリンよりも遥かに優れた燃料消費を実現している

この水素エンジンはすべてのＵＮＳＣ地上車両の標準的技術であり、約４００年前に化石燃料ベースのエンジンの使用に取って代わる程になった

「ロドスの外では０８７さんが助手席にに乗り込んで皆さんに教導しています、ローランドさんも教習に一役買って出て下さってるので助かってます」

「へぇ・・・私も教導を受けてみようかな」

「ドクターはそれよりもお仕事をなさってくださいね（ニッコリ）」

「アッハイ」

今日のコーヒーはなんだかしょっぱく感じた

「それとブルーチームのプロファイルも完成しました、見てみましょう」

「おお！いいね」

1枚目はスパルタンⅡに関する情報、ここらへんはチェルノボーグで見た通りの内容だった

「わからない単語が沢山出てきましたね、引用や脚注を同時に見るのが大変です」

「だね、でもラスキー大佐から別に用意された資料もあるからわかりやすいよ、ローランドの通信端末もレンタルできたから質問とかもできるし、デスクワークも艦長としてもしっかり仕事ができる人なんだなぁ」

2人はまだ知らなかったのだ

スパルタンⅡが身体能力も戦闘能力も優れているのは直接見た者として知ってはいた、つもりだった

体力テストでアーツ関連以外の全ての科目を大幅に更新した彼らは、未だに真の実力を発揮していなかった事を・・・

― 回想　チェルノボーグ事変　―

――11日前

― チェルノボーグ　市街地　―

引火した車両から燃え移り肌が焼け焦げた年輩の男性
倒壊したコンクリート製の建築物の下敷きになり虚ろな表情のまま溢れる血溜まりに濡れた若い女性
背中から切り付けられ俯せに倒れる警察官
静寂と破壊の爪痕のみが木霊する賑やかであっただろうかつての街並み
二次災害により死亡した未曾有の人々

先ほどまで街で買い物をしていたであろう家族、子を母が抱きしめて庇い、子と母を体で覆い庇う父親の骸
まだ人っ子1人居ない未知の外惑星に取り残される方がマシだと思える、見るも無惨な惨劇の広場
その時マスターチーフの後方から微かに声がした
チーフが振り向くと腹部と頭部にひどい裂傷を負ったチェルノボーグの民間人が街路樹の植え込みの影から最後の気力を振り絞り声を出していた
男か、女か、それは植え込みの影でわからない、だが薬指にエンゲージリングを嵌めていた
生死を確かめるべくチーフは近づく

『・・・っぁ・・・ぅ・・・』
『・・・・』
『・・・・ぁ・・・ぐ・・・た・・・けて・・・・』
『・・・・』

チーフは動じなかった、どのみちこの傷では助けたところで長くは持たない

脱出時ならともかくこれからスパルタンⅡは作戦を行わなければならなかった
チーフは選択を選ばなくてはならない――

踵を返しアーマーの重量感がありありと伝わる足音を鳴らしながら離れる

『・・・づぁ・・・まっ・・・で・・・』

取った行動は、置き去りだ

『いいの？チーフ』

『・・・足手まといになる、どのみちＵＮＳＣに登録された植民地惑星の正規市民ではない、最期を看取る必要も・・・義務も無い』

『全くもって酷な話だがな、ケリーには悪いが俺もチーフに賛同だ、ロドスと接触する前は特にな』

『フレッドまで』

『相手が善か悪かの違いだけで、これから俺達がやろうとしてる事もレユニオンと同じ虐殺なんだ、虐殺するレユニオンを虐殺するから因果応報ってだけだが・・・』

『ハァ・・・そうね、その通りよ』

足を進めながらケリーは振り向く

・・・生を懇願した弱々しい命は、既に事切れていた

『ご免なさい、成仏して頂戴ね』

ケリーは誰にも聞き取れない程度に呟いた

脳裏に写し出される鮮明な惨劇

今でも忘れる事は、決してない

忘れる訳にはいかない、あの日――

西暦２５５２年　１０月　２０日

ＵＮＳＣ　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　Ｐｒｉｏｒｉｔｙ　Ｏｒｄｅｒ　０９８８３１Ａ―１

第１項

国連宇宙司令部　非常事態優先命令事項　０９８８３１Ａ―１

暗号化コード：　赤

公開鍵：　ｆｉｌｅ／　Ｆｉｒｓｔ　ｌｉｇｈｔ／

送信元：　ＵＮＳＣ／ＮＡＶＣＯＭ艦隊司令官ワード

送信先：　全ＵＮＳＣ要員

主題：　司令官　命令　０９８８３１Ａ―１

分類法：　制限　ＢＧＸ　ダイレクティブ

ＵＮＳＣに属する者は、それを《コール議定書（プロトコル）》と呼ぶ

地球軌道のアウターコロニーと地球を守るために全ＵＮＳＣ所属艦船とステーションはコヴナント軍をＵＮＳＣコア・エリアへ導く可能性のある無傷のナビゲーションデータベースを奪われてはならない。

もしコヴナント軍に拿捕される可能性がある、又は接近してきた場合、以下の事項を直ちに実行しなければならない

１．　艦船上の全データベースにおいて惑星間データネットワークを消去する

2．　全データが消去されたことを確実に確認するため３回のスクリーンチェックとバックアップを開始する

3．　ウイルスデータスキャナーを処分すること

4．　惑星もしくは敵軍から撤退する場合は必ずインナーコロニーと地球以外の方向のランダムに生成された座標に向かってスリップスペース入りしなくてはならない

5．　コヴナント軍に拿捕される可能性のある艦船は自爆もしくはＡＩの除去を行わなくてはならない

この命令に対する違反は反逆罪に該当する。ＵＮＳＣ軍事法ＪＡＧ　８４５―ＰとＪＡＧ　７５５６―Ｌに従って処刑、又は厳罰に処される。

このコール・プロトコルが発令されるにあたってもう１つＵＮＳＣが執り行っていたことがある

それはＵＮＳＣ海軍艦及びＡＩを搭載した全ての艦船は太陽系から離脱後、再度太陽系内への侵入を固く禁止するというものだ

わかりやすく言えば軍属と一部業者の艦船は地球に戻ってきたら処刑。という意味である

そんな中太陽系の座標を知るわけもないコヴナントは地球にやってきたのだ

コヴナントが人類の本拠地、地球に攻撃を開始し、それを阻止するべく政府が発令した《地球防衛作戦》
攻撃を行ったコヴナントは偶然地球に転移してきたほんの一部でしかなかったが、それでもＵＮＳＣにとって大規模な物量であった
しかし人類もただやられていた訳ではない、地球に到来していたコヴナントに対して地球の軌道を漂う数百機近く配備されたＭｋ―５　スーパーＭ・Ａ・Ｃ　の攻撃により一時敵にコヴナントを押し込んだ事もあり本隊への報告が遅れたこともあり太陽系の座標の流出は地球防衛作戦の水面下にて大きな犠牲を伴い抑えられた
コヴナント大戦自体が各植民地惑星と地球を含め４００億という人類の総人口の内３８０億人以上が死者を出した大戦だがそれは別の機会にしよう

チーフ、ケリー、フレデリックの３人は当時の記憶がフラッシュバックされる
マスターチーフはヘルメットの中で目を細め、強く歯を噛み締めた
ここで脚を止めるつもりはない、止めてはいけない、進み続けなければならない
決して後ろを振り向かずに
目の前にいるのは、たった１人の弱者だが
彼等の後ろには、大勢の弱者がいるのだから――

―

―

―

―　３０分後・・・　―

『・・・Ｏｌｙ　Ｏｌｙ　Ｏｘｅｎ　Ｆｒｅｅ』

チーフが小さな声で発する

この言葉はスパルタンⅡが幼少の候補生時代から使用されてきたスパルタンⅡのみが知る《現在地の安全を仲間(スパルタンⅡ)に知らせる》暗号だ

この言葉を皮切りに２人のスパルタンが現れる、１人は既に移動都市の外にある崖に配置済みだ

『あーあ・・・それにしたって、ひっでぇモンだな』
『移動都市1つを植民地惑星としてカウントすれば住民は3万人そこいらよ、アウターコロニーや《惑星リーチ》に比べればかなり小規模だけれど良い気分じゃないわ』
『だな・・・どうにも《惑星リーチ防衛戦》と地球防衛戦を思い出しちまう』
『お喋りは終わりにしよう、行動開始だ』

マスターチーフが号令を出すとブルーチームは早急に行動を始めた

ケリーはスラスターを吹かし、瓦礫を飛び越えブルーチームが事前に入手した《ロドスの者達が向かう》であろう施設へ走り抜ける、主な仕事はロドスの者が侵入・脱出しやすいようにある程度破壊工作をしておく事だ
フレデリックは廃墟を見上げると腕力とスラスターでわずかなタイルの繋ぎ目やコンクリートのひび割れに指を引っ掛けまるでアメリカン・コミックスの《ミスター蜘蛛男》のように十数階立ての建造物をよじ登ってゆく、割り振られた仕事は《アルテミスの生体レーダー》を使用し半径2ｋｍ内の暴徒やレユニオンを排除する事である
リンダの仕事は超長距離からロドスの者達への狙撃支援、勿論此方からロドスに接触

するまでは狙撃を悟られてはならない、そのためロドスの後方の対象のみに狙撃を行う手筈になっている

『・・・シエラ117、ミッションコード。ブルーチーム各員に通達』

『事前に入手した情報を頼りにレユニオン・ムーブメントの首領タルラの撃退、もしくは時間稼ぎを行い周囲の危険因子の排除、並びにロドス・アイランドと接触及び安全区域までの直警を行う』

チーフからの最終確認が入る

ブルーチームの3名は各自割り振られた役割を全うするべく行動を始めた

『オペレーション《ファースト・インプレッション（第一印象）》開始』

『『AXIOS（我に価値あり）』』

―　レユニオンｓｉｄｅ　―

―　チェルノボーグ　Ｄ―３地点　―

「おい、お前は聞いたか」
「あ？何をだよ」
「偵察部隊の事さ、応答も帰還した奴も居ないんだとよ」
「ンだよ・・・どうせお楽しみでもしてんだろ？」
「その偵察部隊を見に行って戻ってきた部隊の話しじゃ、あの悪魔が出たらしいぜ？」

チェルノボーグの市街地を移動する大人数の内の２人が会話をしている
この質問を投げ掛けたレユニオンの上級構成員は暫し前から偵察に出ていた部隊から完全に応答が無くなっていた事をレユニオン前哨基地から漏れ聞いていた
この偵察部隊には偵察後、直接強襲を仕掛けられるように特殊な戦闘員がいた

「たしか・・・ヴェンデッタとか言われてる奴らの１人らしい」

一切の身分や経歴は不明とされるレユニオンの中でも特に高い戦闘力を持つヴェンデッタ、その1人は偵察部隊の1つに編成されていた筈だ、と

「偵察部隊のヴェンデッタ？・・・あぁ、アイツか・・・なーんも喋らねェのにやたら殺意と実力だけはマジなヤツだったな」

「――でだ、ソイツがな・・・死んだって話しなんだよ」

それは予想外だ、確かにロドスの□□□□*スラング*共に高い戦闘力があるヤツがいるのは知っている

それでもヴェンデッタはそんな簡単に死ぬようなタマか？

少々信じがたいがその悪魔という奴らがどれだけ強いのだろうか考えてみる

別に他所の奴らを見くびっている訳じゃない、贔屓目に見てもヴェンデッタの実力はレユニオン内でも間違いなくトップクラス、レユニオン幹部に比例できる奴らだ

それだけの実力主義者が？死んだ？つまらないジョークだ

「で、何で死んだって判んだよ？」

「得物(武器)が瓦礫に突き刺さってて、赤いマスクとミンチ肉が混ざった何かが、外壁に張り付いてたとよ、他の偵察部隊の死体と一緒に・・・」

オマケに得物には柄を握ったままの両腕が残ってたそうだ

という言葉も付けた

「・・・バケモンかよ・・・」

「それ以外、何て言えるんだ?偵察部隊とはいえヴェンデッタ含めた中規模部隊を簡単に壊滅させられるヤツらに・・・」

2人は歩きながら固唾を飲むが進行の足音にそれは消えていた

しかしその小鳥の囀(さえず)りのような会話を聞いている者がいた

――それがこの上級私兵部隊を引き連れたレユニオン・ムーブメント首領、タルラだった

龍のような角と美しい白銀の髪が揺れる

少し前から噂には聞いていた悪魔がこの地(テラ)に残した傷痕はまだ深くはない、だがどこまでも続くような長く浅い傷痕を確かに悪魔は残していた

（フン・・・悪魔・・・か）

（面白い、少々面倒だが終局点に待ち受ける障害が多い方が欲しいものを得た時の喜びと栄光はそれ相応に増すものだ・・・）

（そして旧先民よりも古代に存在する兵器を手中に収め、ウルサスこそが、このテラの覇権を手にする・・・）

「もう間もなくだ・・・ガーディアンを・・・必ずやこの手中に・・・」

タルラはどこか焦点が合わない笑みを溢した

あぁそうだ、なんてことはない

ボス(タルラ)に付いて行って指示に従う

ただこれだけのこと
そうなる筈だった
あの悪魔が現れるまでは・・・

―――――――

―　ロドス・アイランド　資料室　―

「1つ質問いいかな?」
「ええドクター、何でしょう」

ドクターがローランドに問いかけ、ローランドが映像を停止する
現在ロドスの資料室でマスターチーフがチェルノボーグでミョルニルアーマーのヘルメットの映像を保存した作戦記録を確認していた

この場に確認できるのは
ロドス陣営
《アーミヤ》《ドクター》《ドーベルマン》《Ａｃｅ》《ニアール》《ブレイズ》の６名
チェルノボーグ事変の関係者から階級や関係性が高い者を集めたがブレイズは勉強の為と称してＡｃｅの肩に拳を「うりうり」と当てながら無理やり付いてきた、よほどタルラを撃退した強者のやり方が気になるのだろう
ＵＮＳＣからは小型端末から姿を映すローランドのみ、ラスキー艦長はインフィニティのクルー達とＳＦＦＴＬ機関に付きっきりであるため欠席している
当のブルーチームはインフィニティに一度戻りミョルニルアーマーの点検を行い各種アップグレードされた装備の選別と補給をしているらしい

「これはスパルタンⅡがこちらと接触する前の出来事なのはわかったけど、どうしてレユニオンがチェルノボーグに進行していた情報を知っているんだい？」
「ブルーチームはテラに漂流した後、独自に調査を進める途中にある人物を拘束し取り調べをしていたそうで・・・その人物の供述に『チェルノボーグにレユニオンが来る』という話をされた訳ですな」

ローランドは息継ぎをして続ける

「そこでブルーチームはレユニオンの存在を認知したらしくその人物もレユニオンに武器を流していた裏商人だったことも判明、さらに調査を進め内通者を探し当て、口を割らせて後始末、レユニオンを妨害しロドスに接触する――という流れです」

「取り調べにしては・・・物騒だな」

「ＵＮＳＣではテロ加担者への取り調べ＝拷問・抹消なのでテラの皆さんにとって些か見聞が悪いでしょう、テロリストの侵入手引きをしておいて逃亡する内通者を野放しにしないあたりスパルタンⅡはまるで容赦がない」

ハハハ・・・まるで《ターミネーター》だ

そう言い笑うローランドを何ともいえない顔で見るロドス陣達を他所にローランドは映像をタルラの部隊と交戦するシーンから再生した

――――――

――

『クソッ!クソッ!なんなんだアイツ!こっちの攻撃が全く当たら――ごびゅ』

チーフが放つボウガンの矢が４０メートルはあろう距離からレユニオン兵の頬骨を貫く

次の矢を装填せず投げ捨てるといつ用意したのかコンパウンドボウを瓦礫の中から拾い上げる

構え

走り

放ち

飛び

壁を蹴り

更に高度を上げ

スラスターで勢いを付け

地を殴りつけ衝撃波を放ち
浮いた瓦礫を掴み、腕力で砕き散弾銃のように投げ、無差別に当てる
まるで、言葉に表すなら――《災害》
生き物では到底太刀打ちできない暴虐の風は猛威を振るい、正に《悪魔》の名に相応しい
粒揃いである筈のレユニオン部隊は瞬く間に悪魔の雄叫びに呑まれ、潰れたカエルのような断末魔と共に事切れてゆく
再度矢をコンパウンドボウに添えて引き絞る、テラの中の筋力ランキングをゴッソリ塗り替える程の膂力で引き放たれた矢は『ボンッ』と空気を切り裂く轟音を纏わせ、化物が獲物の喉を食い千切らんとばかりに風穴を開け前衛と重装兵、合わせて２０人近いレユニオン上級兵を壊滅させた
未だに悪魔の毒牙に掛からず生き残っている者は口にこそ出さなかったが次に死ぬのは自分かも知れない、こんな理不尽に殺されるのは嫌だ――と、誰もが同じ事を思いながら悪魔に対峙する
スパルタンⅡを知りつつ、彼らを良く思わない者達はスパルタンⅡを《脳筋の擬人化》《ハンター（レクゴロ種）と同レベルな単細胞》と宣（のたま）う者もいるがスパルタンⅡという《戦術兵器》は百戦錬磨と評される元スパルタンⅠの《フランクリン・メンデス上級曹長》からの戦闘訓

練と優れたスマートＡＩ《デジャ》から受けた士官候補学校より遥かに密度の高い座学を受けた文武両道のスーパーソルジャーだ

前線を壊滅され気圧され微動だにしなくなったレユニオンの兵を瓦礫の上から見下ろす、迷いのない暴力が、今振り下ろされようとしている

弱者から搾取するならば――

強者から搾取されるのは道理である――

――――――

――――

――

対峙したるは《紅蓮の炎》
対峙したるは《魔窟の主》

打ち出すは《灼熱の焔》
打ち出すは《鉛の魔弾》

見据えるは《怪物の眼》
見据えるは《恒星の瞳》

一進一退も許さぬ眼前の肝比べ
鍔迫り合いを思わせる領域の技

炎の壁を造るも悪魔は臆せず真正面から食い破る
至近距離で放たれた鉛弾を熱で蒸発させる

風の壁を纏った拳が顔面を通りすぎる
片刃の剣を拳の甲が火花を散らし受け流す

時間にしてものの数分だが体感した時間は1時間以上に感じた、それ程まで濃厚な隙の探り合いであった
事前に打ち合わせをした舞のような舞踏は、その場で見るものが居れば行きを飲むフィクション作品のように見えるだろう

だが今宵の戦場はタルラとマスターチーフの２人舞台
悪魔の蹴り込みを剣で受け飛び退くタルラ
その心は死と隣り合わせの戦いに感化され脳内でアドレナリンが分泌されている
久方ぶりだろう、ここまで心行くまで想わせる強者は――
だがそれでもこの悪魔の狙いは私を殺す事ではない、十中八九時間稼ぎだろう
もしくは、私を退けるのが目的か
どちらかが死ぬまで凌ぎを削るのも悪くない、しかし私には死ぬことなく成就させねばならない目的がある
そしヤツも私を殺す事ではなく、チェルノボーグから離れさせるという目的がある
今のままではどんぐりの背比べにしかならないだろう
私とて災厄の隕石を防げる手立ては流石にない
今回ばかりは、ヤツの思惑通り引き下がるとしよう、おめおめと引いては良くない尾びれがつくかもしれないが、それについては後々考えれば良い
熾烈な戦いであったのは間違いないのだから脱出に専念していたと言えばなんとでもなる

『・・・今は時間が惜しい、癪だが今回は引く事にしよう』

『・・・』

『なに、また再戦の機会もある・・・だろう?』

『――リクレイマー』

『――!!　何故その言葉を知っている』

『答える義理は無い』

チーフはタルラに問い詰めようと走り出す

だがタルラが造った炎の壁をスパルタンチャージで食い破るも、既にタルラは身を引いたのか其処には居なかった

『・・・何故、リクレイマーを・・・』

『・・・コルタナ・・・』

チーフの複数の感情が入り交じった声に答える者は居なかった

そこでログは終了している、続きはロドスとの接触――ブルーチームとの合流からだった

― 龍門 ―

― ロドス・アイランド　資料室 ―

「んで？ローランド君だったかしら？教えて貰おうじゃないの？」

「えーと、あの・・・Ｍｓ．ブレイズ・・・？私、何かやらかしてしまいましたかな・・・？」

たじろぐローランドに詰め寄るブレイズ

何故そのようなテンションなのか気になるがまずは落ち着いて貰うのが一番だとローランドはブレイズを宥めるが効果はいまひとつのようだった

ブレイズが知りたいのはリクレイマーの件や初めて会った筈のマスターチーフとタルラがどこかで一度すれ違った事があるかのような会話の端々などの事だろうか？

「ブレイズ・・・お前、何か変だぞ・・・どうしたんだ」

「ハイハーイＡｃｅは黙ってて！――勘違いしないでねローランド君、私は別に怒ってる訳じゃないの」

怒っていないという割には声色はいつもの《爆裂フェリーン》な彼女に比べて随分と低くなっている

私が一体何をしたんだ?!とローランドは徐々に萎縮しているが、実はブレイズ以外の皆も何故ローランドに詰め寄るのかは理解できていないという

ブレイズは一度ローランドから離れると何かに絶望したかのようなポーズを取り声を荒げて言った

「私一昨日チーフから格闘教導受けたのよ!?なのに！手加減された!!映像のチーフは更に強かった!!!なのにチーフは『俺よりもフレッドの方が強い』とか言ったの!!!」

「えっと・・・ブレイズさん・・・？」
「わかってるアーミヤちゃん！こんな話し今は場違いだって!!でも納得いかないの!!!
本気になったチーフよりも平生（へいぜい）な時のフレッドの方が強いとか!!!!!」

「チーフに再戦を挑んで！フレッドにも!!圧勝するっきゃないじゃない!!!」
ビリビリビリ

ブレイズの怒声で空気が、備品が、部屋が震えた
意識が吹き飛ばされそうになるもアーミヤ達は堪えたが戦闘の経験がないドクターは「ぬわぁぁぁ」と、耐えられずに椅子ごと後ろに倒れてしまう
ローランドは両手を耳に当てて目を強く瞑り歯をくいしばっている、本当にＵＮＳＣのＡＩは表情豊かだ

「・・・ブレイズ、一杯奢ってやるから静かにしろ・・・」
「・・・クルビアビール・・・極東風焼き餃子付き？」
「・・・ハァ・・・好きにしろ」

Ａｃｅとの短い会話でブレイズはやっと落ち着いたようだ
そこで流れを変えるようにドーベルマンが口を開く
「それにしてもだ、そのリクレイマーというのは何なのだ？上級曹長（チーフ）に対して発言したようだが」
「・・・正直に話すとレユニオンの首領がリクレイマーという単語を知っているのは想定していませんでした」
「・・・ここに居るのはロドスの中でも立場的に秘密の厳守もできそうですし、変に隠し立てるよりもキチッと話した方が良いかもしれないですな」

ローランドは少し渋い顔をした後周囲を１人づつ見る
まずはアーミヤ、ようやく起き上がったドクター、腕を組んだドーベルマン、耳をピコピコ動かすニアール、先ほどとは打って変わった真剣な眼差しのブレイズ、厳粛な姿勢のまま変わらないＡｃｅの６人

「・・・簡単に説明しましょう、リクレイマーとは厳密に言えばＵＮＳＣ――要は人類の事を指した言葉です、マスターチーフは現代人類であると同時にある任務中に１０万年前の旧人類の遺伝子を移植された事により、現代人と旧人類の遺伝子を合わせ持つ、

文字通りこの世に1人だけの新人類なのです」
「新人類・・・旧人類・・・？いまいち話が掴めない、もう少し分かりやすくならないか？」

ローランドの説明に対してニアールが不可解そうな答えを出す
確かにこの説明の仕方ではマスターチーフが新人類という事しかわからない、ローランドは要点を絞り答える

「コンポーザーへの耐性を得たのが一番大きいところでしょう、コンポーザーとは知的生命体を分子単位に分解しデータ化する広範囲の照射光線です」

その言葉に6人は驚愕する、生命体に光を当てるだけで無力化だけに止まらず分子にまで分解し消滅させる兵器が存在していようとは露にも思わなかった

「待ってくれ、データ化というのはどういうことだ？」
「・・・我々人類は過去、１０万年前に一度絶滅しているのですよＭｓ．ニアール・・・その絶滅した人類を我々現人類は旧人類・・・フォアランナーと呼称しています、コン

ポーザーはそのフォアランナーが使用していた現人類にとってのインフィニティやストライデント級などに該当する艦船に搭載されている高出力兵器です、コンポーザーは非常に強力で私達の母星・・・地球のニューフェニックス市に住む６００万もの住民と周辺に居た人々が一度のコンポーザー照射によりデータ化の後に灰になってしまいました」

「一度で６００万?!・・・そんな兵器が過去に存在しているのか・・・?」

「少し話を戻しましょう、マスターチーフが旧人類の遺伝子を引き継いだハイブリッドヒューマンに昇華された事でコンポーザーへの耐性を得て、スパルタンプログラムによって施された強化手術による遺伝子変異が三位一体となりマスターチーフは本当の意味で、旧人類・現人類・強化人間の遺伝子を備え持つ完全な新人類となったのです、要約すればマスターチーフは銀河の後継者ということです」

コヴナント大戦のあらましをローランドは語る

重要な点や機密事項は濁したり口にはしないが彼らが人類の足跡を辿る為の物語を読み聞かせるならばそれで十分であった

静まり返る資料室はその静寂さから時計の針が動く音しか鳴らなくなる

到底信じられる話ではない、チェルノボーグの件もだが、ここ数日で驚きに対する耐

性が付いていたと思っていた――まさか小説や映画のような出来事が今まさにテラの、このロドス・アイランドを中心に、ショーに飢えた貴族が始めた舞台のように、それが起こっているのだ

事実は小説より奇なり――

そんな言葉がアーミヤの頭の中で何度も反復していた

ローランドも、コンポーザーに関与する兵器の中で1つだけ伝えていないことがあった

それはＵＮＳＣインフィニティに《エネルギープロジェクター》なるフォアランナー製の光学火器を搭載していることだ、ＵＮＳＣ海軍艦の主砲であるマグネティック・アクセラレーション・キャノン程の瞬間威力は無いがありとあらゆる物理的防御が意味をなさないプラズマ照射兵器である

コヴナントはこのエネルギープロジェクターを使用し、植民地惑星の大半と地球の各地に膨大な放射能を発生させる巨大なガラス結晶を生成し人類と歴史に大きな傷痕を残した

生き残った人類達はコヴナントから離反した一部のサンヘイリ族とアンゴイ族と人

類が共同で各植民地惑星のガラス除去を現在も行っている
それ程の兵器と兵力の暴力の物量を持った異星人(エイリアン)軍と５０年、人類は戦争をしていた
それだけで人類がどれだけの苦汁を舐め、血に濡れ、命を散らし、最期まで果敢に戦い、最終的には一部のサンヘイリ戦士と彼らの母星惑星サンヘリオスと同盟を組み銀河系の命運を賭けた決戦を迎え、大戦を終結させたか想像するのはそう難しくはない

「・・・ロドスは、今後必ずや大きな壁に指し当たるだろう、此度の参戦はそちらが望まぬものだったかもしれないが、私は５０年もの苦難を乗り越えた戦士等(ら)と同じ地を踏めるのを誇りに思うぞ」

唐突にニアールが騎士言葉でキリッ言い出した、腕を組み少し格好つけている、ローランドは頭上に《?》マークを浮かべた
それに続くように５名も同じような事を言うとローランドは初めてテラ人(異星人)と心の底から疏通できたような気がした・・・気がしただけだ

（・・・本来コヴナント絡みの事柄は艦長も同席した際にするべき話しだったが・・・さぁてどう艦長に報告したもんかなァ・・・）

ローランドは信頼を勝ち得たロドスの６人が見せる『これで君も仲間だ！』感溢れる表情をどこか遠い目で見ながら内心頭を抱えその場に座り込みたくなるくらいの後悔に陥った、特にニアールがローランドの説明をどう解釈して前述の言葉を発したのか気になって仕方ない・・・１時間前に戻りたい――

そんな折り、ブルーチームからの通信がローランドに入る

これからインフィニティをペリカンで出立し、ロドスへ戻るとのことだ

インフィニティ所属からロドスがＵＮＳＣに資材提供をする限りロドスのオペレーターとして着任する協定により、これで晴れてブルーチームもロドスのオペレーターとして編成される準備が整ったという意味である

スパルタンⅡを編成すればより危険度の高い鎮圧任務に、移動用の輸送型ワートホグがあればより多くの現場に向かえるのはロドスにとって有難いこと此の上無いだろう

「なら、彼らの部屋も用意しないといけないね・・・アーミヤ、何か策はある？」

「策ですか？・・・そうですね、そもそもスパルタンの皆さんは《何を必要とする》のでしょうか」

この話はブルーチームがロドスの大広間に辿り着くまで続いたそうな、戦場にて悪魔と呼ばれていても彼らスパルタンもまた人だ、ロドスに雇用されるならロドスの掟にある程度は従わなければならない

《郷に入れば郷に従え、でもちょっとくらいなら従わなくてもいいよ》

どうやらこの諺はテラにも、地球にも存在していたようだった

…………………………………………

―翌日・・・―

ロドス・アイランドに揺らされるブルーチームは今回の行動に合わせてブリーフィン

グをしている

ローランドがレユニオンの残した端末にハッキングし情報を吸い出した結果チェルノボーグの次はこの《龍門(ロンメン)》が目標にされていることを掴んだ

アーミヤはローランドの作った報告書の要点を纏めた資料を持ち龍門の指導者と接触するために舵を取った――が、これは裏の面であり表面では物資等の補給の対価として龍門の防衛を行う事となっている

ブルーチームはリスカム・《フランカ》と行動を取るに当たりまずはブリーフィングの復習として必要最低限の確認をしている

「ロンメン?リューモンじゃなくて?」

「そうよ、正確には《炎ー龍門(ヤン・ロンメン)》。ブルーチームの４人は知らないのも無理ないわ～。あとコレ、装甲服のどこかに付けておいてね～」

フランカはロドスの刻印と社名の入ったマグネットステッカーをブルーチームに配布する、これでスパルタンⅡがロドスの手の内の者だということがわかるだろう

黒地に青のアクセントと《ＲＨＯＤＥＳ　ＩＳＬＡＮＤ》と白い文字が入った物だった、ブルーチームは動きを阻害しない程度に調整された外衣(マント)を捲り何処に付けるかを吟

味する
ケリーの言葉にどこかおっとりした口調で返すフランカと「中国の言葉に近いのね」とステッカーをアーマーにくっ付けながら納得した様子のケリーはステッカーを外衣で隠す

「今から私達行動隊が会うのが近衛局のチェンっていう子、ドクターとCEOとケルシー主任が会うのが龍門代表者のウェイ氏、その後合流して都市内の警備兼捜査が望まれる流れね～」
「助かる、俺(スパルタンII)らは政治面で役に立つことはないだろうからな・・・動いてる方が性に合う」

フランカがそこまで言うと今度はフレデリックが口を開く、ケリーの疑問的な口調から一転してフレデリックは飄々としている

「けど本来の目的は龍門に潜んでるレユニオンの捕縛でしょう？情報無しに移動都市をくまなく探るのはアルテミスでも骨が折れるわ」
「実際には血眼にならずともチェンの言う通り動いてれば問題ないわ、それにスパル

タンという4人の存在は龍門にとって途轍もなく大きい壁になるの」

「・・・脅し、か・・・そんなことだろうと思ってはいた」

最後のチーフの言葉がフランカの図星を貫く

フランカはわざとらしく困った顔をして喋り続ける

「包み隠さず言うと上級曹長が正しいわ～、ロドスという感染者保護と暴動を働く感染者の制圧・収用を理由にした盾とスパルタンⅡという現テラでの最強の矛。『レユニオンの潜伏調査をさせろ、こっちは移動都市を容易に掌握・制圧できる戦力がある。』これが現ロドスが言えてしまう本音」

「さしずめアイギスの盾とグングニールをロドスは持ってるってことか」

「その話し気になるわ～後で教えて？――でね、それはＣＥＯが望む事ではないの、あの子（アーミヤ）は建前だとしても製薬会社の代表で感染に苦しむ人々の味方なんだから。ＵＮＳＣが武力介入するなら間違いなく龍門の矛はポッキリ折れて盾は石ころをポテトチップスに投げつけるくらい簡単に割れるわね～」

「それは同時に龍門と、龍門と同盟を組んでいる移動都市やらを敵に回すことになるけど。勿論ＢＳＷもね～」

フレデリックの茶々に興味を示しながら、フランカはそう付け足すと妖美な笑顔を見せた

「フランカ、碌でもないことを吹き込まないで」

「あら、リスカム」

仕度を済ませたリスカムが合流する、彼女の右太腿にはＭ６Ｈ２と予備の弾倉２つがホルスターに収められているのをリンダはいち早く気づく

「どうかしら？使い心地は」

「申し分ありません。欲を言えば小型化を希望します、このサイズでは私よりも小柄なオペレーター達が扱いに苦労してしまいますので」

威力と射ちやすさ、マガジン辺りの装弾数を兼ね揃え弾薬代もそこまで嵩(かさ)まないこともあってかマグナムピストルはリスカムもお気に召したようだ

だがそのサイズには些か不満があるらしい

実はロドスに譲渡されたＭ６Ｈ２、スパルタン向けに大型化された所謂アップサイズ

型なのだが一般の海兵隊員や将校向けにダブルフィード型マガジンからシングルカラムに変更した8発マガジンのダウンサイズが存在する
中にはP(ポケット)タイプという6発マガジンの護身用や潜入捜査官向けの小型バリアントも存在している
それを知るブルーチームはM6H2ダウンサイズが旧式(M6H)の需要がそこそこあり新型は希少品なのでリスカムにはそれを言わない方針で固めていた、言ったらきっと(必ず)欲しがるから
ブルーチーム曰くリスカムは「素直で優秀かつ堅実だがマニュアル主義で少し根に持ちやすいタイプだ」と結論付けた、リスカム本人が知ったら「そんなこと無いです」と不貞腐れるのは間違いない

「間もなく、炎国《龍門》に寄港。出撃指令を受けた各行動隊は速やかに降船し検問場にて待機せよ」

お喋りはここまでと云わんばかりにスピーカーから女性職員の声が聞こえてきた
マスターチーフは開くロドスの正面口に顔を向けて指揮する

「・・・ブルーチーム、行くぞ」

差し込む日差し――というものは一切なく空には暗がりが随所に見られる曇り空になっていた、曇り空はインフィニティが姿を隠すには好都合である、こ雨が降る前の独特な匂いが無いことからしてもう暫くしたら天候は良くなるだろう

ロドスと龍門を繋ぐ鉄の橋を越えると見慣れた顔が数名、アーミヤとドクター、チェルノボーグやロドス艦内で見た数人と初めて顔を合わせる者もいた

ケルシーは数日前から一足先に龍門に来ているため後程合流予定である

「CEO、ドクター」

「ブルーチームも到着しましたね・・・では皆さん、最終確認をしますので聞いて下さい」

アーミヤは前日に行われたブリーフィングを簡潔に復唱する、先ほどフランカが言っていた事と概ね間違ってはいなかった

しかし悲しいかな、不確定要素というのは肝心な時に限って悪い方向へと勝手に進路を取るものである

「お待たせしました、ロドス・アイランドのアーミヤと申し――」
「ロドスとの面会は１０時からのはずだ。そして今は１０時１４分だ、私の時間を１４分も無駄にした気分はどうだ？」
「・・・申し分ありません」

初手は龍門側に取られてしまった、返す言葉も謝罪のみでこれを貸しにするかはこの近衛局の者の匙加減となるだろう
リンダは周囲から驚きの視線が刺さる全長１７０ｃｍはあろうノルンファングを抱えたままヘルメット内で溜め息をついた、この近衛局の女にではなく１４分遅刻したロドスに対しての事だ
行動内容しか知らされていなかった上に正確な時間を伝えられていなかった件は勿論の事、遅刻は時間にシビアーさがモノを言うスナイパーの彼女からしたら非常にナンセンスだった
アーミヤも視界の端っこに映るリンダの溜め息にぐうの音も出ず口を悔しそうに紡ぐが「一応、私は雇用者なんですが・・・」と納得がいかない様子だった
だがアーミヤもリンダが時間を大切にしているからこそ超長距離（スーパーロングレンジ）を悠々と撃ち抜ける狙撃手である事は重々理解しつつその溜め息を静観するしかない、アーミヤは上司で

はあるが戦いに於いてスパルタンⅡはアーミヤやロドスのオペレーターよりも遥かに優れた歴戦の絶対強者であることは承知している

「・・・まぁいい、ついてこい。立ち尽くしていても時間が解決してくれる訳でもない、弊社のスケジュールが狭まっただけだ」

チェンはロドスの事などさして気にしている訳でもないのか坦々と、にべもなく言い放った、遅刻をしなければもう少し当たりは柔らかかったかもしれないがレユニオンが龍門を標的にしているのが判明している以上野放しにしておく理由も無かった

彼女の切り替えの早さはある意味スパルタンⅡに近しいものがある、スパルタンⅡは『迷う暇があるなら行動しろ』とメンデス教官から育成されてきたようだ

チェンが踵を返し歩き出す、アーミヤやドクターよりも早くスパルタンⅡも後に続くそんな時近衛局の職員がチェンに駆け寄ってきたフルフェイスヘルメット故に表情は見えないが様子から察するに良くない事だろう

「お忙しい所失礼します！暴動です！第3ゲートで感染者の集団が柵を越えて侵入しています!!」

「わかった、先に戻れ、私も直ぐに行く」

素早く引き返す局員を片目にチェンは振り向き何かを考える、何か思い付いたのかそれを口にする

「初仕事だロドス・アイランド、有用性を見せてみろ」

突然の発言に一瞬アーミヤはたじろいだが、その隙を伺っていたかのようにブルーチームは瞬間的に行動を開始する

「!!待ってください!まだ――」

「クライアントがご所望だ、せめて遅刻の汚名を挽回しようぜ?ＣＥＯ」

アーミヤの言葉をフレデリックは遮る

スラスターを併用した走力はクランタをも凌ぐ速度まで加速しつつも人の波を悠々とすり抜けてゆく

チェンは即時行動を判断したブルーチームに感心を示したようだった

「ほう、あの４人は理解(わか)っているようだ。何処(どこぞ)の無礼者と違ってな」
「――っ！　皆さん、ブルーチームを追います！ドクターはここにいて下さい！」

次に走り出したアーミヤの追跡を開始するロドスの面々を見送ったチェンはドクターを見る
その視線に気がついたドクターと目が合うと簡単な世間話をしだす

「ドクター・・・だったな。あの４人は相当なやり手だろう？瞬発力といい行動力もだが、真価は殲滅・・・或いは制圧に特化した強襲部隊か。製薬会社には惜しい人材だ」
「ええ。彼らは、ロドスの期待の星だからね」
「どこで奴らを？」
「訳ありだよ。少なくとも彼らは移動都市そのものとの遣り取りはしないだろうけど」

ドクターは坦々とＵＮＳＣの方針をチェンに悟られない程度に代弁する、彼らはロドスとだからこそ協定を結んだ

独自の力の付け方とその他様々な要因を含めてＵＮＳＣは万が一も無く炎国と話し合いの席を設けることすらしないだろう
国(移動都市)との取引ともなれば民の意見も尊重しなければならない、意見は荒れに荒れ時にはＵＮＳＣの全てを奪いに出る恐れもある
龍門もまた、ＵＮＳＣの存在を知ればあの手この手で取り入ろうとするのは目に見えている、唯一鉱石病を治療できるクローニング・トランスプラント、星を越えて数十億光年を渡れる星間航行技術など選り取り見取りだ
過去にもこれに関する話題はあったが、だからこその組織間との取引をＵＮＳＣは望んだ
組織なら主導者の一存で決定できる、意にそぐわない者は切り離すなり消すなりすればいい、世界(テラ)を敵に回す代わりに遥かに進んだ技術を持つ人類からの頂点への切符にありつけるのだ
「都市そのもの？フリーランス(傭兵)か？・・・まぁいい。追うぞ、私達もどのみち向こうが目的地だからな」
背を見せ歩くチェンを、ドクターはたじたじといった様子で追い始める

辺りを見回せば視界を埋め尽くさんばかりの人の壁が見えていた、感染者と非感染者を隔てる見えないのに余りにも大きな壁は、これから自分達(ロドス)が1番目に乗り越えねばならないと考えると少々頭が痛くなりそうだった

問題の第3ゲートはここから数分の場所だ、歩くに連れ騒音と喧騒で騒がしくなっているのを感じる

募る近衛局員を退かしてチェンはその騒ぎの中央に到着するや否や、何ら当たり障りの無いようにブルーチームに接した

「ほう、仕事が早いな」

ブルーチームが捉えた暴動の扇動者とその手下数人、感染者のボスと思わしき人物はフードを深く被っていたが男にしては線が細い、女とみた

チェンがフードを剥ぐように顎で指示するとケリーは躊躇いもなく外衣を引き剥がした

「っ――――!」

やはりといったところか、頭部から立派に生えた耳が特徴のザラック(げっ歯類)の女だった
右側のこめかみと左肩から左胸あたりにかけてオリパシーが見られる

「よし、でかしたぞロドス・アイランド。衛兵、連行しろ」

チェンの命令に近衛局員が暴動に荷担した15名と首謀者を連行すると騒ぎ立てていた民衆は直ぐに列を直し検問の列に戻った

「ご苦労様です、ブルーチーム・・・おかげて面目を立て直せました」

労いの言葉をかけるアーミヤとチェンに連れられて来たドクターが合流する、短い会話を済ませると近くのプレハブに入っていたチェンが窓から身だけ乗り出してこちらに声をかけてくる

「おい、その中に尋問――いや、拷問できる者はいるか?」

なんとも物騒な話だ
尋問から拷問へ切り替えたのは純粋に必要ならばどこまで残虐になれるかというチェンの思惑である
チーフは言われるがままにフレデリックを見やるとプレハブへ向かうように指示した
しかしそれをただ指を咥えて見ているアーミヤではない
辞めるように意見を切り出すもチーフは「責任はＵＮＳＣで受け持つ」そう言うとアーミヤへの視線をさっさと切ってしまった、かといって無理に制止すればまたチェンの機嫌を損ねる可能性があるためただただアーミヤは渋い顔をするしかなかった
暴動を企てたとはいえ流石に拷問は頂けない、残ったブルーチーム３名をその場に残し皆がプレハブへと集まる
「よう別嬪（べっぴん）さん。クライアントのご要望でアンタに幾つか質問しなきゃならない、答えてくれるよな？」
フレデリックの砕けた口調に対してザラックの女は口を固く結び沈黙を貫いた、まるでフレデリックがそこに居ないと認識しているかのような振る舞いだ

「他にメンバーは？誰かに依頼されたか？お前のバックにはどの組織が付いてる？」

数秒の沈黙の後、首謀者に向き合う男がこちらをチラリと見る

「良い度胸だ、やれ」

チェンの抑揚の無い冷淡な声と共にフレデリックが拷問を開始する

「はいよ」

しゃがみながらおもむろに首謀者の片脚を左手で掴み持ち上げる、ほんの一瞬だった、脚を持ち上げられたザラックの女も奇怪そうに「？」を浮かべる

フレデリックは腰に右手を添えたかと思った瞬間に動いたというのがかろうじてわかる程の残像が見え――

『ばつん』

「へい、一丁あがり」

男がプレハブ小屋の脇に、よく見慣れたサバイバル向けのブーツと膝の皿に擦り傷と包帯が残った脚が無造作に捨てられた

「――あ？」

投げ捨てられて地面に落ちた反動か綺麗に裁断された脚の断面から「ぶぢゃっ」と音をたてながら血が僅に吹き出た

「お前さんの右足は鮮度がいいな」

――――――

――――

――

現場(プレハブ小屋)は騒然と化した

先ほどまで頑なに口を開かず、どこか余裕まで感じていた風体だった首謀者がいきなり騒ぎ立てたからだ

仏頂面がワナワナとした表情に変わる、最初こそはアドレナリンが分泌され痛みは無いだろう

右膝と太腿の合間あたりから自分の脚がすっぱり消える事態を把握したのか、唐突に涙をボロボロ流しながら色気の無い声で喚く、そして今更訪れた痛みで縛り付けられた椅子ごと身体を揺さぶり地面に倒れ、惨たらしくのたうち回った

「あああああ!!あじっ!!わだじのあじっ!!わだじのあじがぁぁぁぁぁっっ!!!」

誰もがその元凶を作り出したスパルタンⅡを見やる

だがこの悪魔の内の1人もまた策も無しにホイホイと生きた人をバラバラにする程サイコパスではない

しかしどうだろう、そこにいたのはあくまで訓練された州兵(新兵)のような近衛局員と感染者問題にあの手この手で保護に走る製薬会社だ

『ヒュリン』

ナイフに付着した血を振って払うスパルタンⅡに白羽の矢に近い視線が向く――が誰1人その事に言及する者は居なかった、それだけフレデリックが躊躇無くナイフを振り下ろした事に、皆がなんとも言えない異質感を覚えていた

「さぁしっかりしろ」

フレデリックが椅子ごと倒れた首謀者の縄をナイフで裂き自由になった上半身を起こすと声を掛けた

「ほら、これをしっかり噛め、荒くていいから深呼吸するんだ」

「フーッ・・・フーッ・・・!」

痛みの捌け口を噛んでいる布に当て付けながら失った右脚を眺める首謀者に悪魔は、ある提案を掛け合い始める

「俺達(DNSO)にはあの脚を綺麗に繋いでさっきまでと同じように動けるように戻せる医療技術がある、そこで提案なんだが・・・」

「答えてくれるな――？」

首謀者のザラックが首を何度も縦に振るまでにかかった時間はほんの1秒もかからなかった

― 龍門上陸 ―

― 龍門　第3検問ゲート前 ―

「やれ、と言ったのは確かに私だが、中々に思いきりがいい奴らだ。何と言ったか？」
「・・・S(シエラ)―117、これ以上は明かす義務がない」
「ふん、本名でもなければコードネームすら暗号化(フォネティックコード)か。何か掴めるかと思ったが狡(ずる)い奴め」

チェンはロドスからスパルタンⅡを横取りできない事を知ると少し名残惜しそうにしていた
それはそうと何かを思い出したかのようにチェンはフレデリックに確認の為に1つ質問をした

「ところでだ、お前は・・・もしやコータスか？」

余りに素っ頓狂(すっとんきょう)な一声にブルーチームも、アーミヤ達も一瞬固まってしまった
あんな得体からしてコータスな訳ないでしょう・・・と呆れるアンセル
へぇ～そうだったんだぁ～、と相変わらず何処かフワフワしているクルース
人差し指と親指を眉間に当て何かに悩まされるような本来の年齢に相応しくないような様子で言葉を失うアーミヤ
その場にいたレム・ビリトン(コータス)出身の者達が、ロドスだ、龍門だ、関係無しに様々な意見を頭の中に浮かべた
それをリンダは面白がって肩をピクピクと震わせている

「なぜ、そう思う」

チーフはチェンがフレデリックをなぜコータス種だと判断したのかイマイチ理解できずにいた、古くから共に戦う人類の仲間がまさかテラの住人だったなんて思いもしないだろう
いや、もちろん違うのだが・・・

「知らん。だが、なんとなくそう思っただけだ」

何の根拠もない、よもや当てずっぽうに近い物言いにチーフは溜め息を付き、フレデリックはチェンの見当違いをカラカラと笑っていた

現在の状況に似つかわしくないタイミングで空から飛行装置が降下してくる、ＵＮＳＣのペリカン降下艇だ

ゲート付近は慌ただしくなるがチェンは飛行装置の側面にブルーチームのアーマーに刻印された大鷲のエンブレムとＵＮＳＣという聞きなれないクルビア語に近い文体の文字に気が付き近衛局員に静まるように命令すると再度こちらに近付きつつある飛行装置を見上げた

「・・・驚いたな。４人だけの少数傭兵かと思っていたが、よもや組織だった規模とはな」

ペリカンが降下するとロドスに降り立った時と同じようにギアを広げカーゴを開く、中から白衣を纏った医療チームが３人降りてブルーチームに近寄る

「あのプレハブの中よ、応急措置はしてある。復元が取引の条件になってるから手は抜かないで。オリパシーは本人の希望通りに、承諾した場合はテラとＵＮＳＣの間柄の手引きをしてもらうように・・・管轄はブルーチームよ」

ケリーはそう言い医療チームがプレハブ内で未だ離れ離れになった右脚を抱えながら涙をポロポロ溢すザラックの女性を担架でペリカンに載せた

応急措置の内約はＵＮＳＣのバイオフォームを両切断面に投与し雑菌からの感染を防ぐ処置だ、麻酔効果もあるため痛覚は遮断されてはいるが泣いているのは今まで過酷な環境で生きてきた中での大事な商売道具を後程復元できるとはいえ失ってしまった喪失感が原因だろう

カーゴを閉鎖し再び飛び上がるとペリカンは曇り空の隙間にあっという間に消えてしまった、そして意外なことにこのザラックの女がテラの住民で初めてＵＮＳＣの拠点に脚を踏み入れる者でもあった

「口を割る条件に脚を元に戻すと言っていだが、よくよく考えればあの女が脚を切られて、喋らされて、損しか無い。お前らも存外悪だな」

「序にオリパシーを治してやりゃあ恩を売ってこっち専門のバイヤーにできる、レー

トの良い金品と全(まっと)うな職にありつけるなら悪い取引じゃないだろうさ」

チェンはその話を何かの間違いではないのかと思った

オリパシーは治療不可能な難病(流行り病)だ、今現在ロドス以外にもライン生命や各組織でも治療方を模索するも役に立たないレポートがこれでもかと積み重なるばかりで進展は殆ど無い

テラの住民がオリパシーに関して目指すは《月》だ、しかしいつまでも山の頂上で燻(くすぶ)っている、山は頑張れば登れるが月はそれこそＵＮＳＣの宇宙艦艇がなければ辿り着けない、テラ人にとってオリパシーの治療法を探すというのはそれ程にまで困難ということだ

そんな停滞して長いオリパシーを治すだと?

だが良く考えればこの４人組は見たこともないアーマーに身を包み、それでいて屈強な身体にかなり高性能なラテラーノ人しか持ち得ない《銃》と飛行装置も所有する謂わば出土されたばかりの謎が深いオーパーツのような存在だ

本当にオリパシーを治療出来るとしたら・・・

――尚更欲しい

国(移動都市)とは協定を結ばないとドクターが言っていたがどうにか貸し出しという状況まで漕ぎ着けられないだろうか?チェンはヴィクトリア王立前衛学校を首席で卒業した少し脳筋が入っている優秀な頭脳をフル回転させようとするがロドスの事を忘れていたことを思い出す

先程までは苛つきが勝っていたがブルーチームの件もあり今は機嫌も割と悪くない

「ロドスを忘れていたな・・・約束は約束だ、会わせてやる」

「はい、ありがとうございます」

「話が纏まったら連絡しろ、私はロドスの局員に手順を指導する、お前達が戻ったら選別した人員だけを連れて優先事項をこなしに向かう」

「わかりました、ロドスの行動隊の指揮権を貴女に委ねます・・・皆さん、説明を良く聞いておいて下さいね」

アーミヤはブルーチームが飛び出した時から今まで存在を忘れられていたことを少々恨みながらも気を静めているチェンに安堵し、ドクターを連れて龍門代表の元まで局員に付いて行く事となった

初手から功績を挙げたブルーチームを2人2組に別けて先頭と最後尾に配置、合間に

チェンが選んだロドスのオペレーターとチェン、アーミヤとドクターを含め合計１７人の部隊を編成し選定を開始する

チェンに選ばれ手柄を立てるべく各オペレーター達は各々の牙を磨き始める

刀に荒い砥石を当て瞬間的な切れ味を確保する鬼やボウガンの矢を追加で用意するサンクタ人・・・予備の弾薬をマガジンに詰め込み慌てながらホルスターに納めるフェリーン、杖の調整を行いアーツの火力を最大限引き出せるようにする小人などなどだ

その中にはもちろんスパルタンⅡも混ざっている、彼らの装備もかなり気合いが入っているのか数日前とは違う得物を使用しているのがわかった、カラーリングが明らかに異なっているから見分けるのは簡単だった

基本的に白をベースに赤と緑のバイナルが施されたチーフのレールガンとケリーのショットガン、リンダはノルンファングというのは変わらなくフレデリックに至っては黒をベースに赤と緑のバイナルが入ったあのレーザーキャノンを用意していた

色が違うだけで何が違うのかは分からないが恐らくモデルチェンジを見分けやすくする為だろうと思わせた、なら間違いなくリンダ以外のブルーチームは各１人１つは上位互換といえる銃火器を選定した事になるだろう

マスターチーフはＢＲ８５ＨＢにマガジンを装填しチャンバーを引く、『バシャッ』と軽い鉄がぶつかり合う音はボウガンのスリングを引いた時の音ににている、厚く成形さ

れたＨ（ヘヴィーバレル）Ｂは銃身の加熱を抑制する効果があり、それらがもたらす効果は命中精度に関わるものである、その上ブルパップ式ということもあり実際の銃身はショートバレルの狙撃銃並に射程も確保されている、もう１つは初めて互いが接触を果たした際に所有していたレールガンも背中にくっ付けている

ケリーはＭ４５Ｄショットガンにシェルを込める、慣れた手つきで『シャコン・・シャコン・・・』と少ないチョークの隙間から空気が漏れるような音がしていた、最後にポンプ動作で初弾をバレルに引き込み背中のマグホルスターに納めると狭所にて威力を発揮するＭ２０サブマシンガンに６０発納められたマガジンを装填、予備のマガジンを５本持ち支度を終えた

フレデリックは巨大な鉄板のような盾の動作確認している、その大きさと厚さは一般的な重装オペレーターの持つ盾の倍以上の面積だった、彼の体格を隠すならばこの面積がなければ十分な防御範囲を確保できないのだ、厚さもテラの兵器事情と照らし合わせると装甲車両並みのＲＨＡ（均質圧延鋼装甲）だがこれはインフィニティなどの最新艦に使用される最新鋭のチタニウム―Ａ３戦闘用装甲の廃材を使用した２０２０年当時最強の戦車と唱われていたレオパルド２Ａ７Ｖや１０式戦車の主装甲に匹敵する超合金装甲技術の１つでもある

最後にリンダだが彼女はあまり代わり映えがないように見てとれた、ノルンファング

の銃身を肩に凭れ掛けるようにしながら丈夫なコンテナに腰掛けている、だがノルンファングのマガジンをいくつも全身のマグホルスターに吸着させて弾切れの疑念を払拭させる最適解を見出していたのだ、その総弾数は６つのマガジンと６０発分の弾丸にも及ぶ謂わば移動式長距離全自動砲台のそれだった、現場でマガジンに手作業で移すつもりで弾を多く所持しているのだろう

　禍々しいまでの濃厚な死を予感させる匂いを隠すこともなく辺りに漂わせるブルーチームは手早く仕度を済ませるとチェンの元へ向かう――が、既に先客が居たようだ

「・・・ＵＮＳＣのか」

「ケルシー医療部門代表・・・だったか」

「堅苦しい、ケルシーで構わない。君らがそれでいいならそう呼べばいい」

　そこにいたのはケルシーであった、確かに後々合流する予定ではあったがこのタイミングで会うとは流石のブルーチームも思いもしなかっただろう、それは何故か？アーミヤとドクターがウェイとの会談を始めて少ししてからケルシーはそこから離れた、そのままロドスに戻ると思っていたからだ

　ブルーチームとしてはケルシーと面と向かい合って会話するのは始めてになる、協定

を結んだ際のメンバーはラスキー艦長とローランド、護衛のスパルタンⅣのみであった

その後々もオペレーター達と波長を合わせる為のトレーニングや模擬戦はドーベルマン教官、食事や生活面はグムやマッターホルンとジェイ、医療に関してもパフューマーやワルファリンといった者達でケルシーに関する事柄は《話しに聞いただけ》の状態で後はスパルタンⅡの毛色の違う雰囲気を感じ取ったレッドやフランカのような場の空気に敏感な者が顔合わせと挨拶に来た程度だ

いや、本当はもっとかなりの数のオペレーター達が日替わりで押し掛けてきたが上記の者達は比較的接し方がマシな者達であった、

精々相互点があるといえばロドスの医療部門がブルーチームの健康診断を行った際の資料を手に取って一通り読んだくらいだろう、レントゲン写真も行われたがこれといって気に触るような事もなかった、一部の医療オペレーターは骨格密度がどうもおかしい、まるで鉄みたいだと勘繰っていたが身体を切り開いて検査する訳にもいかず終いだった

ブルーチームとケルシー、此処で初の顔合わせだからといってブルーチームはケルシーに関心が《有る》か《無い》かで言えば《無い》に近かった、ＵＮＳＣのクローン移植に粛々ながら強い関心を示していたのはラスキー艦長から聞いてはいるためブルーチームからのケルシーへの見方は《関心が無いといえば嘘になる》程度の存在だっ

た

少し取っつきにくい、所謂《ケルシー構文》をスイと流したところで仕度を済ませたオペレーター達が続々と集まってくる

「・・・私はロドスに戻る、アーミヤは頼んだ」

「・・・」

ケルシーの別れ際の言葉を聴覚だけで受け取ったマスターチーフは徐々に離れていく靴の鳴る音を気にする事も、その意味を理解できないまま目線を正面から外さずにいた

「何か意味があるようね、チーフ」

「何の事だか知らないがな――」

『アーミヤは頼んだ』

『アーミヤは』

は――

そこまで頭の中で『は』にイントネーションを付けていたケルシーの言葉を反復し、事の意味を多少なりとも理解した

「・・・上手いものだな」

「あの子（アーミヤ）に何か良くないことが起こる、そういゆ事かしら」

「まだ、確約は出来ないがな・・・ブルーチーム集結、秘匿回線を開け」

一ヶ所に集まったブルーチームは無言で向き合っている、二桁に迫りつつあるロドスでの生活の中でスパルタンⅡの話題は一週間近く尽きる事はなかった、実際今日の朝食時には３０人程のオペレーター達に囲まれていたのだ、マスターチーフだけでだ

リンダは一部の狙撃オペレーターに付きまとわれながらテラスで７割方無視しつつ、ケリーはクランタの脚力やペッローの嗅覚すら振り切り食事の配給を受けとるとさっさと部屋に戻ってしまうためオペレーター達を寄せ付けないオーラが充満している

フレデリックも少々問題だ、核心や情報の開示などはしておらず常に茶を濁すような受け答えを返しているせいでどうにか情報を引き出そうとしている者や単純に興味を持たれていたりとスパルタンⅡの中でもわりと高めのコミュニケーション能力が幸いしている

アーマーと盾の合計にして約１ｔを身に付けながら先鋒オペレーターのように身軽なのは何か裏があると見られている、特にペンギン急便の《エクシア》と《テキサス》が顕著だ

エクシアはＵＮＳＣの銃器に目を輝かせて目的を忘れ気味なので構わないが、テキサスは常に冷静かつ上手く情報を引きだそうとしてくる

あまりにしつこいからと耳や尻尾を触ろうとする素振りを見せると「わっ、おい、よせ！」と、スタコラサッサと逃げるらしい、触りたいわけではないがああも大層な反応を見せると触りたくなる。これはフレデリック談だ

これ以上こちらに関与をするならペンギン急便にも直接赴き熨斗（のし）を付ける必要があるだろうが話が脱線しているためここまでにする

説明が長くなったが、つまり《ここ最近少し馴染んだ者が互いに向き合い沈黙を貫いている》という現状をオペレーター達は気味悪そうに見ているということであった

「・・・一体・・・どうしたんでしょうか・・・？」
「未知との交信みたいな黙(だんま)り状態ですね」
「ラヴァちゃんはわかる？」
「はぁ?!アタシに振るなよ！わかるわけないだろ！」
「実は～、本当にコータスだったりして～」
「「「いや、それはない」」」

なんとも、言いたい放題である

―　ＵＮＳＣ秘匿回線　―

『インフィニティから入電だ、龍門の目的が概ね判明した』
『へぇ、詳しく聞かせて』
『龍門の狙いは龍門のスラム街に住む《ミーシャ》と呼ばれる少女の確保だ、まだ正確な情報ではないが、父親がオリジニウムの何かしらに関与していることも判明した』
『オリジニウム関連・・・ならＵＮＳＣはレユニオンがその少女を狙っていると？』
『要調査だな。で？そのミーシャってのがどうしたんだ？まさか龍門より早くＵＮＳＣが確保しようってか？』
『・・・そのまさかだ、ＵＮＳＣは龍門の勾留施設の不備と警備体制の隙間、そして近衛局の総戦力ではパッケージ（ミーシャ）がレユニオンに拿捕される可能性があると踏んでいる。潜伏場所についてだがＵＮＳＣの生体認証に登録がされていないため確定には俺たち（ブルーチーム）の目が必要だ。ローランドが龍門の監視カメラをハッキングし容姿は粗方掴めている』
『ハッキングとは大胆ね、結果は？』

『――種族：ウルサス　髪は白　身長１４０ｃｍ代　黒い服を着込み、兄弟がいる・・・そして感染者ということだ』

『・・・龍門の理念は《感染者の抹消》のはず、確保だなんてどうも匂うわ』

『金の実（な）る木か、それともオリパシーに関する何かがあるってことか』

チーフは少々気に悩んだ、ロドスと龍門の間柄を維持するために龍門にパッケージを回収させるか、レユニオンに奪われる未来が見えているならＵＮＳＣが回収するか、龍門の犯したミスをＵＮＳＣが実力を持ってして尻拭いの奪還を決行するかの３択

一番簡単なのはブルーチームが確保してインフィニティに護送し必要な度に人員を限定してインフィニティに行き来させることだ

もちろん現在はクライアントであるロドスに利益があるように行動するのが道理だろう、異星の軍組織に籍を置くスパルタンⅡにとってオリパシーの情報や人質ではないが今後様々な事柄を有利に事を進めるにあたってミーシャとその兄弟をインフィニティで保護できれば必ず守護（まも）ることはできるだろう、飛行装置（飛行装置）で接近しなければ近づく事さえも儘ならない上に、それらに対するカウンター（８３０基の７０ｍｍ機関砲）も用意されている

かといってＵＮＳＣで保護しようものなら龍門はよい顔はしないこと請け合いだ、ぽっと出の新顔に目標を奪われるだけでなく監視付きで往来もしにくい環境になり互

いの意見が食い合わなければスパルタンⅡと上位ランクのスパルタンⅣ部隊により移動都市を制圧されるかストライデント級重フリゲート艦のM・A・C・ガン（94B1E6／MAC）で龍門は移動都市ごと綺麗に消滅、笑えない、全くもって・・・

過去に何度もやり取りしたがUNSCは可能な限りを消費したくはないのだ、乗員の一名たりとも

《面倒臭い》と言ってしまえば聞こえも悪いが《テラから離脱したらコルタナの脅威に対抗しなければならない》と言えば仕方ないとも取れる、結局物は言い様だ

実際に《最終手段》としてM・A・C・ガンやハヴォック（TNT換算30メガトン級）戦術核のみならず地球であれば熱波だけで8割以上焼き尽くせるフェンリル級（TNT換算400ギガトン級）大型核などいつでも使用できるようにはしてある

テラそのものに嫌気が差したらインフィニティの主砲ことCR―03B（8代目改良型スーパー重M.A.C.）S8SHM・A・C・でテラの惑星軸を傾けて星ごと破滅させれば良い、1万トンの超密度投射体を秒速30万kmで投射するこの主砲なら着弾時に発生する450，000，000，000，000ジュールもの膨大なキネティック・エネルギーで楽に事を済ませられる

マスターアーム（安全装置）はローランドが管理しているがなんともおぞましい保険である

『――内容は以上だ』

『私たちがサポートして龍門に確保させて私たちが殿をしつつ護送ね、了解』

結局ブルーチームが選択したのは龍門にハッキリとわかるようにサポートしながら恩を売る形に決まった、もしもの時は尻拭いするが状況次第と念も加えておく、それにより龍門がミスした際にＵＮＳＣとロドスに貸しを付けることができる

もちろんその貸しの内容は感染者本人が希望すれば一時的に龍門で保護し、ロドスへ輸送する事だ

龍門は無闇矢鱈（むやみやたら）に感染者を蔑ろにできずロドスは感染者から優秀な人材を見積もることができる、ＵＮＳＣもロドスの選定から溢れてしまった者を仲介人にすることができればロドス以外にも積極的に感染者を雇用し生活の基盤を支える事業の確立もできるため一石二鳥だ、専門知識とブループリントの複製を提供すれば第二のレイジアン工業ともなり得る上にインフィニティでは生産が困難な大型火器の砲弾などの製造もできるようになるだろう

そしていつの間にか場はチェンが選んだ選りすぐりのオペレーターで満たされていた

（ロドスはいつの間にこんなマスクを作った?-全員口の回りに妙な機械を付けて、なにやら不気味だ）

バリアブルマスクの土台である部分を見たチェンは少し顔をしかめる、見た目も丸みのあるピンクだったり逆に毒ガスを吐き出しそうな仰々しい見た目など様々だった、それらがＵＮＳＣの余り物から生まれた産物だとは夢にも思うまい

チェンは一息付くと作戦のプランをある程度砕きながら説明する、時折質問を交えながら意見が交換されいつの間にかアーミヤとドクターも参加していた

３０分程のやり取りをした後に待ちに待った出撃指令を受け取り歩き出した、今日限り彼らは《ロドス・龍門共同実行部隊》としていまいちピンと来ない部隊名をチェンから拝命したのだった

一方その頃・・・

―　インフィニティ　医療ステーション　―

テラでは滅多に見れない独特な内装を横目に片足が欠損したザラックの女が清潔な患者着を身に付け診療台に寝かされている

まだ麻酔は効いているが時折骨が軋むような痛みにうめき声を隠せずにいた

寝かされて2分くらい経過しただろうか、突然スピーカーから音声が聞こえてきた、落ち着きのある男性の声だ

『ようこそＵＮＳＣ総旗艦インフィニティへ』

『話しはスパルタンⅡ部隊から聞かされている、情報提供の協力に感謝する』

協力もなにも私は脚を叩き切られ嗚咽混じりに無理やり頷かされていただけでは？と、ふと思った

『君の脚を切ったフレデリック大尉から幾つか質問のリストを受け取っている、まずは先に脚の再接続を済ませよう』

すると自分の口にテープに固定された酸素マスクのチューブが繋がる機械から『ごう

んごうん』という稼働音が聞こえ、徐々に目蓋が重くなるのがわかった、どうにも抗えない感覚は徹夜で工場に忍び込むプランを立て終わり仲間と「さぁ今は体を休めよう」とバネが飛び出した潰れたクッションのソファに身体を預けていた頃を思い出した

（あぁ、もう・・・耐えられ・・・）

「グゥ・・・ムニャ・・・」

麻酔の副作用で意識が麻痺し眠気となる、これは麻酔が使用されるようになった昔から変わらない事だ、都合が悪くなるわけでもない為患者には眠って貰ってた方がむしろ都合がいいのだ

機械のアームが脚の切断面を骨・神経・血管・筋繊維と順序良く繋ぎ合わせる、時間にして3時間にも及んだがあくまで丁寧なオペをするためだった

まだ麻酔は残っている、質問とオリパシーのあれこれについては目を醒ましてからになるだろう、オペが終わるまで作業に勤しんでいた声の主（ラスキー大佐）はオペの終了を告げる知らせを受け取ると既に冷めきっていたコーヒーを口にしながら「泥棒稼業の脚を切るとは、大胆なものだ・・・」とひとりゴチた

― 迷い（スラム）の森（街）へ ―

― 龍門　スラム街 ―

「ひ～、視線が刺さるよぉ、それになんか空気が『ヌメッ』とする～」
「カーディ、あまり文句言っちゃダメだって」

市街地の検問場から移動し約４時間が経過している、脚を進める度に外界の街並みが凄まじい早さで切り替わってゆく、言うなれば《舞台演劇の裏側》のようなものだった
スポットライトを浴びるメインの舞台はきらびやかでも客席を離れて裏方を眺めれば、それはそれは陰湿かつじめじめとした龍門の裏側が太陽に照された広大な草原のように顔を出してくる
ＵＮＳＣが管轄する植民地惑星でもここまで酷いスラムは存在しないだろう
――元コヴナント軍の難民街を除いてだが・・・

「余所見をするな、若い女は特に目を付けられるぞ」
「ヒィ～～！」

チェンの冗談を他所にブルーチームはバイザーに可能な限り情報を納めていた、ローランドから受け取った情報を元に衛星軌道から監視を続けるストライデント級6番艦から送られる龍門のデータを元に三角測量でサーチをかけてゆく
もうじき目的地に辿り着こう頃合いだがまだそれらしいアクションは起こっていなかった
先頭は即応性が高いケリー、瞬間的な遭遇戦の防御を目的としたフレデリック
最後尾はラッシュ力が高いチーフと援護要員としてリンダが控えている
行動予備隊Ａ1及びＡ4と行動隊Ａ4、ＢＳＷの2名がドクターを囲むように配置され、それらを更に挟むようにブルーチームが囲んでいた
少々数が多い気もするが隠密作戦でもなければ人手は多いに越したことはない、それが仮にも同盟といえる状態の移動都市での人探しともなれば人数に遠慮はいらないため尚更だった
予備隊の現地訓練にも持ってこいな上にエリートオペレーターの上位互換に近しい常勝不敗百戦錬磨の人類最強の歩兵部隊（ブルーチーム）がいるならば予備隊の親鴨（引率）役にもなる、一石二

鳥・・・いや、一石三鳥と言えた

「――さて、見立てと情報が正しければこの廃ビルで違いないが・・・」

「このビル・・・パッケージは今は居ない、人の気配はあるがどうも気は散漫としている」

チェンの言葉にチーフが答えた、確かに誰か居るがミーシャは外出している、そういうことだろう

その言葉にチェンは少々訝しむが嘘は言っていないだろうと信じ廃ビルの探索を取り止めた

「フム・・・なら周囲を当たるか」

「ケリー、近くの中規模以上の闇市を探れ。リンダは高所からカバーを。必要ならアルテミスを使え」

「了解」

チーフの指示を聞くと直ぐに行動に移った、スラムであの歳の子供が生きていくなら

やることは一つ、窃盗しかない、それ以外の食糧調達なら精々善良な市民達が行う炊き出しくらいだろう

だがこの廃ビルを中心に闇市は3ヶ所確認されている、小規模の闇市もあるが建物のドン突き(行き止まり)に薄汚い屋台が数店と鈍器とボウガンで武装した用心棒が数人、市場唯一の入り口は手作りのフェンスドアのみ、おまけに用心棒に守られている

此処に侵入し商品を盗み出すのは相当な危険を孕んでいるのは間違いない

手癖の悪い連中は人混みを好む傾向にあるのは人類と同じようだ、なら規模がそこそこある3ヶ所の闇市のどれかにミーシャが居ることになる

「パッケージは仕事を終えたら必ず戻る、そこをCEOとドクター、BSW、当部隊(ブルーチーム)から総勢5名で侵入、パッケージと接触し信用を得る」

「信用を得る?それができるという確証は?」

「スラムの者は血の繋がりが無くとも同じ穴の狢(むじな)には薄かろうが感情的だ、住民にとって龍門は敵だからな。信頼されずとも信用されれば必ず付け入る隙間が出来る、あとはその隙間をロドスというパテで埋めればいい」

チーフがそこまで言うとチェンが口を挟んできた、言いたい事は言う前から分かり

きっているためさっくりと切り返しの言葉も用意してある

「待て、目標はこちら(龍門)で引き取るのを忘れたか」

「建前での話だ、目の敵に施されるよりは手助けに躍起になっているロドスに付く、俺がスラム住民ならな」

「ふん・・・ロドスの面(つら)を利用した話術――ということか。どうして中々口が達者なものだな」

「・・・」

（私(クライアント)がいる真横で言うことでしょうか・・・）

どうやらチェンはチーフの言葉が皮肉だということに気が付いていないようだった、チェン自身が感染者に対してどういった感情があるのは未だに伺い知らぬが少なくとも感染者やスラム住民から恨まれる立場であることは把握しているようだ

アーミヤもチーフに悪意も無く建前のために言っているのを読んだだけに言い返すことが出来なかったようだった、フレデリック以外のスパルタンⅡからはロドスの印象は現段階ではあまり宜しくないらしい、悲しいかな

「フレッド、盾は俺が預かる、ＢＳＷと共にＣＥＯとドクターの護衛に付け」
「あいよ。という訳だ、宜しくな」
「ええ、宜しくね～」

フレデリックは盾の裏側にマグホルスターで吸着していたマークスマンライフル（Ｍ３９５ＤＭＲ）を右手で保持しマガジン２つを手に取り腰のマグホルスターに移した
本来マークスマンライフルは中距離から長距離に適応したセミオートライフルだがフレデリックは昔からこのＤＭＲシリーズを愛用していたこともあり近距離での扱いにも長けていた
尤も（もっと）近距離こそがフレデリックが最も得意とするＣＱＢ（クローズ・クォーター・バトル）のゾーンのため近距離で発砲することはない
手早く盾をチーフに預けアーミヤ、ドクター、フランカ、リスカム、フレデリックが廃ビル付近にて待機し、それ以外の者はスラムの住人を刺激しないよう近くの市街地へ移動する
その際に例のザラックの女が麻酔から目覚め約束通りレユニオンから金（龍門幣）で買われたことを自供した事をラスキー艦長から直々に報告された

ザラックの女曰く――

『あたし達は第三ゲートで暴れろって5万龍門幣で買われたんだ。レユニオン自体がその隙に何人紛れ込んだとか、そもそも何の目的があってゲートで暴動させたとかは一切知らないんだよ』

『他の者(仲間)については？』

『・・・スラムじゃ周りは皆敵なんだ。腹を満たしたい、雨風防げる寝床が欲しいとかさぁ、たまたま目的が一致したから仲良しごっこをしてる。仲間は家族なんてグラスゴーみたいな権力に対抗できる力や結束がある連中が言えるセリフさ、言ったろ？仲良しごっこってさ、残りが龍門の収容所でどうなろうが知ったこっちゃ無いね』

『フム・・・』

『あたしはその中で一番手癖が悪かった、頭(かしら)張ってたのも一番食扶持(メシ)を稼いでたからだよ。レユニオンからの依頼があった時は歓喜の嵐さ、たらふく飯も食えて□□□□(スラング)を滅茶苦茶にして復讐もできるってね』

『・・・あたしがガキん時は裕福でもなけりゃ貧乏でもないフツーの家庭だった、ある日・・・学校から帰るとオヤジはどっかのクソッタレに謀られて家は一文無しになった』

一度呼吸を整えて姿勢を直す、そしてまたぽつりと呟き始めた

『オフクロは男作って消えた、日々酒に浸るオヤジはあたしを・・・・・・・悪いけど、もう思い出したくないから言えないよ・・・』

なるほど、かなり酷い仕打ちを受けていたのだろう、ラスキーはその言葉に刺を立てる事もなくただ静かに耳を傾けて聞き返した

――――――――

――――――

――――

彼(ラスキー)にも家族がいたが西暦２５２６年のある日、ＵＮＳＣがコヴナントを正式に敵性知的生命体として登録し、全面戦争に突入したと同時に大きく歪んでしまった歯車に巻き込まれた

ラスキーは太陽系の外側にある惑星シルシニウスⅣのコルブロ軍事学校アカデミー

にて戦闘の彼是(あれこれ)を『ハスタティ部隊の一員』として学んでいたがラスキーは兵士ではなく普通の生活を望んでいたせいでこの学校に入学してからはチームメイトと喧嘩を繰り返しロクなことが無かった

父の消息は不明、おそらくＭＩＡ(作戦行動中行方不明)として処理された

母もコルブロ学校を首席で卒業した優秀な大佐でありハルシオン級軽巡洋艦の艦長を勤めた、シルシニウスⅣから生還後知った話だがコヴナント艦と交戦しプラズマキャノンを被弾し艦もろともＫＩＡ(作戦行動中戦死)となっていた

兄(カドモン・ラスキー)は西暦２５００年初頭から当時ＵＮＳＣの最精鋭と唄われたＯＤＳＴ(軌道降下強襲歩兵)に所属していた

兄はこまめにビデオレターをラスキーに送っていた

『ハハ…　川の水を飲んだら腹を下しちまったよ』

『お前(ラスキー)もＵＮＳＣに入隊してくれて俺も誇りに思う』

『・・・すぐ隣にいた仲間が死んだ、反乱軍のグレネードで粉々になって・・・』

そのレターを最後に兄は死んだ、何が原因かはわからないが、一瞬でほんのカケラも残らずに・・・当時コルブロ学校の校長でもあり、母に心からの敬意を持って尊敬していた『メハフィー大佐』から聞いた

それが今となってはコヴナントの仕業なのか、本当に反乱軍の仕業かはわからない

ラスキーは在籍していた士官候補生と関係者の内唯一生き残った６人の内の１人であり他に助かったのは入学当初から何かと気を使ってくれていた親友のマイケル・サリバン士官候補生とエイプリル・オレンスキー上級士官候補生、そしてシルシニウスⅣを防衛していた駐在兵が僅か数名のＵＮＳＣ海兵隊

それらを除いた人員は救助に来たマスターチーフ、シエラ０８７（ケー）、シエラ１０４（リー）とペリカンのパイロット（フレデリック）

彼（スパルタンⅡ）らは当時ＵＮＳＣに秘匿に正式に採用されたばかりの強化改造が済んだ１５歳の子供だった、西暦２５５８年現在はコールドスリープで差はあるが大体のスパルタンⅡの肉体年齢は２４歳が平均値なっている

互いに想いを秘めた彼女（カエラ）はバイオフォームの投与も虚しい結果になり死亡し、助からなかった

在籍中にコールドスリープに対する耐性が著しく低くＵＮＳＣとＯＮＩが除隊を認可するほど重度なアレルギー反応が認められるがラスキーは今もこうしてインフィニティの艦長としてコールドスリープを行う度に肌の結晶化を耐えながら歩み続けている

マスターチーフから貰った激励の言葉（お前は勇敢な兵士だ）の影響か、自分を残し家族全員と多くの仲間が

消え、せめてもの意思を継ぐ為か、或いは両方か――

家族に対し強いコンプレックスを抱いていた故にラスキーはこのザラックの女が言いたい事を見る角度や異なる成り立ちでも多少なりとも理解しようとしたのだ

――

――

――

『・・・そうか、なら無理に聞きはしない、君の言い分は良くわかった。最後にウルサス人のミーシャという名に聞き覚えは?これを聞くのが本来の目的なのでね』

『ミーシャ?ウルサス人・・・あいつか・・・知ってるよ、白髪で身体が骨と皮みたいな貧相なあいつだろ。どんな目に合ってスラム入りしたかは知らないけど最近良く市場で元気にスリやら置き引きやらをやってるよ』

『確かさ、身内のチビの為なんだろ?何処かのギャングに加わる訳でもなくこの業界でピン(1人)商売やんのは度胸がいる、だからあたし達の狩場では目を瞑ってるよ・・・同じ女のよしみってね・・・もういいかい艦長さん?あたしが知ってんのは・・・これくらいさ』

『ああ構わない、それと――食事を用意させた。口に合うかわからないができるだけ新鮮な天然物を使ってる』
『!! すっげぇ・・・本当に食っていいのか?』
『もちろん、今後の事はまた後日話し合おう、明日9・00に迎えを寄越すから従うように』

それを最後に彼女はインフィニティの食堂から運ばれた新鮮な野菜と鮮度の良い肉を焼きたてのバンズで挟んだバーベキューソースたっぷりのハンバーガーと臭くない氷入りの清潔な水をあっという間に平らげて腹を満たし安心したせいかとっぷりと寝込んでしまったとのことだった

『――何時の時代も、淘汰弾圧される人々は・・・いえ、言うのは止しておきましょう』
『・・・艦長は、彼女をどうするつもりで?』
『まだ測りかねています、マスターチーフは?あなたの意見も聞きたい』
『彼女が我々の因果に巻き込まれたのは事実でしょう・・・なら、事の発端に一任します』
『・・・コミュニケーション能力的に妥当でしょう。過去にＯＤＳＴやスパルタンⅢと

合同で作戦に参加していた彼は何かと面倒見が上手い、とりあえず目を覚ましたら清潔な衣服を提供して聴取を続けます・・・切断面部の癒着が良かったのでリハビリ次第ですが早ければ2週間で人並みに歩けるでしょう』

『了解、117交信終了――』

戦う事以外には粗雑で無頓着なチーフは面倒事はフレデリックや上官によく押し付けていた、今回もフルに仲間を利用していく事で面倒事を回避した

残された行動隊とチーフ、そしてチェンは気配を残さないように一度身を引く事にした

都会ならいざ知らずスラムの物達からすれば謎の一団が大勢で付近を彷徨(うろつ)いているだけで雰囲気が一変してしまう、それを避けるためだった

― ケリーside ―

「・・・見つけた」

幾つかある闇市場付近の廃ビルの屋上からそれを眺めるスパルタンが一人・・・

可能な限り視野の確保を優先したＥＶＡ型ヘルメットを改良し製造されたケリー専用のアーマーのヘルメット(エルメス)にパッケージ(ミーシャ)を捉える

随分と手慣れた様子で闇露店の硬パンを一つ、果物を一つ、小さいミルク瓶を一つと懐に納める姿は立派なスラム住人だ

普通は炊き出しを頼ったり他所の街の住居を持たぬ子供の為に用意された協会や施設があるがこのテラに、ましてや龍門にそんな都合のいい場所はそうそう無い

例の厄災のせいであろう事は地球や日常的に隕石や洪水に見舞われない環境で育ってきた人類だからこそテラの環境に異常性があると確信を持たせる

この移動都市と言う存在もそれらに拍車を掛けている

街そのものが動くのだ、山も、草原も、きらびやかな高層ビルも、この世の全ての汚物を混ぜ込んだスラムも

とても巨大な無限軌道(キャタピラ)の上で生活して居るようには感じられない

ＵＮＳＣにＭｏｂｉｌｅ　Ａｎｔｉ―Ａｉｒｃａｆｔ　Ｗｅａｐｏｎｓ　Ｐｌａｔｆｏｒｍ　Ｍ５１０　Ｓｉｅｇｅｗｏｒｋ　Ｕｌｔｒａ―Ｈｅａｖｙと呼ばれる通称マンモスという大型の軌道車両が存在す、もちろんマンモスは数機だがインフィニティにも搭載されている、だが移動都市のキャタピラの転輪１つにも満たないだろう、移動

都市に立ちはだかろうものなら人が蟻の存在に気付く事なく踏み潰すように、無限軌道に潰されるのが目に見える

移動する都市と云う名は伊達ではないということか、これだけの技術を持ちながらにして宇宙へ進出していないのは何か訳があるのだろうか？

これらが理由で別の街（移動都市）に行くことがほぼ不可能に近いというのが現状、資材やその他様々な輸入が行われるゲートは特にガードが硬く鉱石由来の透視技術（X線のようなモノ）もあり荷物に紛れ込む事も出来ないだろう

特に龍門は感染者やスラムに対する見方は悪い意味でトップクラスであり、それはまるで牛乳を吸い込んで数週間放置した雑巾を発見した時よろしく最早（もはや）最悪のそれに近い

そら、そんなことを思っている内に次は店主の死角にあるハエがたかる謎の肉を一つ陳列棚から拾い上げ懐に・・・

「あらまぁ、手癖が悪いじゃ収まりが悪いわ」

『ええ、ここまでくると顔パスね』

リンダも通信越しでミーシャの粗相に小言を挟む

しかしそれは致し方無い事だった、彼女(ミーシャ)は同じく育ち盛り食べ盛りな姉弟の分まで食糧を得なければならない、それを長い間続けてきた結果マジシャンもビックリな指使いにまで成長していた

龍門に彼女を預けた後は龍門なりロドスなりが弟たちを引き取ることになるだろう、どんな扱いになるかは誰も知る余地はないが間違いなく今の生活よりはマシになるはずだ――たぶん

「さぁショッピングは終わり。もしも店主に感付かれたら割って入るわ、その際は援護射撃を」

『任せて』

そしてミーシャは一瞬立ち止まり、走り出した

気取られていないハズ――

だが現に走り出した彼女は何かを悟っていた、何に?私達に?それとも住まいの廃ビルにチーフ達が居る事に?

彼女の僅かに動いた視線の先に浮浪者がいた、古くくたびれた帽子、使い込まれ袖口と裾が黒く変色し艶々になったジャンパーを着て口元が隠れるゴワゴワな髭、おまけに

破損した靴をダクトテープでぐるぐる巻にしており、正に浮浪者の鏡と云うべき装束である

その男がミーシャに対して指を動かして合図を送っているのが見えた、――錯誤（しくじ）ったいつ彼女に仲間が居ないと決めつけていたのか、スパルタンらしくもない浅い過失をした

『らしくないわね。チーフに連絡しておく、トラッキング（追跡）を』

「了解」

想定外だった、彼女がスラムのコミュニケーションに根を貼っている事を配慮していなかった、だが作戦の根本が変わることはない

精々時間が早まる程度の誤差で生じるズレを修正しよう、そう考えながらビルを飛び移るようにケリーはミーシャを追った

― ミーシャｓｉｄｅ ―

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

ミーシャは住まいにしている廃墟へ脚を急がせた

【見慣れない奴らがおったぞ】

初めてこのスラムに訪れた際に唯一貴重な食糧を分けてくれた同郷（ウルサス人）の浮浪者からのメッセージ、それだけで十分だった、ミーシャの考え得る可能な限りを想像した

（龍門のパトロール隊・・・？それともレイダー（略奪者）・・・？）

考えれば考えるほど不安が積もるばかりで平常心を取り戻せず無我夢中で走るミーシャを視界に捉えながらケリーはビルの屋上をひた走る

「チーフ、パッケージが足早に向かってるわ、協力者がいた」

『・・・117了解、こちらの準備は完了している。パッケージに警戒されたのは痛手だがこちらで対処する』

ミーシャが戻る頃には部隊は既に身を引いている頃合いなのは間違いない、先にビルへ侵入するアーミヤ達ならミーシャの警戒を解くのは『難しいが出来なくはない』のではないかと予想した

チーフは少し考える、アーミヤは確かにお堅い所が散見されているが『あれはあれで根は優しく歳相応な子供』という個人評価がつけられていた

龍門に上陸した際の失態（遅刻）で内申点に多少のブレはあったが失敗なぞ誰もがする事、大事なのはその失敗を如何に次に活かすかだ

そして――

「全行動隊はワートホグを使いセカンドライン（スラムと街の境目）まで後退しろ、俺はやることがある」

「――え？何故ですか？」

「嫌な予感がする」

チーフは帰投する部隊から外れ、スラスターを吹かしながら走り出した（滑走）――

―　ドクターｓｉｄｅ　―

「ふぅ・・・ふぅ・・・ここまでの道中といい、階段は、辛いね・・・」
「ドクター、もうじきです。あと少し頑張って下さいね」

廃ビルの中に侵入したアーミヤ一行はやけに慎重になっていた、コンクリートが剥き出しになり音を想定以上に不気味に反響させているのもあるが何より適当に打ち捨てられた食糧品の容器から見える腐りカビが生えた食べ物だった何かとその空容器に排泄したと思わしき汚物の名残(なごり)が彼らには堪えたようだ

「あぁ・・・こりゃまた・・・俗に言う魔窟ってやつか?」
「このバリアブルマスクが無ければ変な病気を患ってたかもしれないですね」
「マスクをしてても目に染みて痛いわ～」

最後尾にいるフレデリックの遠慮無い言葉に続くリスカムとフランカ
アーミヤとドクターはそんな内部の様子を見て唖然としていた

「陣形はどうしますか？」
「俺に合わせるより俺が合わせるほうがやりやすいんじゃないか？なんでも御座れだ」
「へぇ、随分と余裕そうですね」
「ああ、実際余裕だ。崩壊する軌道エレベーターの最上層から脱出するよりかはな」

実際ＢＳＷの２人もスパルタンⅡの適応力には舌を巻いていた
優れた感の良さに加えてそれに見合う戦闘能力はスパルタンⅣに匹敵するテラの住民からの評価も高く、スパルタンもまたテラ人達の身体能力の高さには肝を抜かれていた
それでもスパルタンⅡはテラに来てから一度も底を見せていないのはスパルタンⅡにとってもやりやすい環境だというのも関係していた
やりにくい環境ならばスパルタンⅡもその内本気を出すこともあるだろう

「軌道エレベーター？・・・まぁそんな話しはさておき。フランカ、彼の実力を活かすなら先頭がいいんじゃないの？」

「確かに普通なら一番優秀な人が先頭かもしれないけど、彼が先頭だと満足に視界が確保できないわよ?」

リスカムはフレデリックの体格をチラッとみて「あっ、そっかぁ・・・」と呆けた様子で口を溢す

ただ大柄なだけなら問題無いがスパルタンⅡはロドスの扉の上梁を手で掴みながら潜るほどの巨人だということを忘れていた、リスカムはたまにこういうポカをしてしまう

「・・・・・・」

「ん?」

何やらいきなり黙り込んでしまったフレデリックに気が付いたドクターは皆に注目するよう声を出した

「みんな、彼は・・・どう思う・・・?」

目の前にいるアーミヤ、リスカム、フランカは左耳に指を当てたまま微動だにしなくなったフレデリックを見る

「?? おーい、聞こえてるかい?・・・駄目だな、どうしたんだろ――」

まるでゼンマイが切れたブリキのオモチャ人形のように固まったかのように思えた――が、ドクターがフレデリックの正面に立ちバイザーを横から覗き込んだ瞬間事が動いた

― ドクターside end ―

突然フレデリックが動き出したかと思うとドクターの頭とフレデリックの頭は衝突した、普通のテラ人と700kg近い重量のアーマーとそれを身に付ける強化人間、パチキ(頭突き)勝負ならどちらが有利か、そんなものわかりきった勝負だろう

「アガガーーーーー!!!」

「ドド・・・ドクター??!」

「悪い、チーフから通信――?! ドクターあんた何やってんだ?!」

かなり際どい一撃を貰ったドクターはその場に倒れたかと思うと次は力の限りの咆哮を挙げた

「あだまがわれぞうだよ・・・」

「あ～悪い悪い」

「ハイビスカスさんにも同行して貰うべきでしたねドクター・・・」

かなり痛む額を擦りながらドクターに寄り添うアーミヤは医療オペレーターを随従させなかった事を少し後悔した

過ぎてしまったことは仕方ないがまさか事故とはいえ最初の負傷者がドクターで、それをやったのがスパルタンⅡなのはアーミヤであってしても完全に読めなかった

「でだ、ちょっと急ごう」

「？　ミーシャの事かしら？」

「いいや、違う」

「え――なら・・・？」

「予報通りだ、にわか雨（レユニオン）が降るぞ」